



TITLE:

南朝帝陵の石獸と磚畫

AUTHOR(S):

曾布川, 寛

CITATION:

曾布川, 寛. 南朝帝陵の石獸と磚畫. 東方學報 1991, 63: 115-263

ISSUE DATE:

1991-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/66727>

RIGHT:

南朝帝陵の石獸と磚畫

曾布川 寛

はじめに

一 宋帝陵の石獸……………	一八頁	(一) 江寧石馬衝……………	一六六頁
二 齊帝陵の石獸……………	二九頁	(二) 南京獅子衝……………	一六九頁
(一) 獅子灣・趙家灣・前艾廟……………	二九頁	(三) 南京油坊村大墓……………	一七二頁
(二) 仙塘灣・金家村・吳家村……………	三七頁	五 石獸の名稱……………	一七四頁
(三) 爛石壠・水經山村……………	四四頁	六 南朝陵墓の磚畫……………	一八八頁
三 梁帝陵の石獸……………	四六頁	(一) 磚畫の種類……………	一八八頁
(一) 三城巷(2)……………	四六頁	(二) 出行圖・門衛武士圖……………	一九二頁
(二) 三城巷(3)・三城巷(4)……………	五一頁	(三) 羽人戲龍・戲虎圖……………	一九八頁
(三) 陵口・三城巷(1)……………	五七頁	(四) 竹林七賢圖……………	二一五頁
四 陳帝陵の石獸……………	六六頁	七 南齊繪畫における磚畫の位置……………	三三一頁

はじめに

魏晉南北朝の南朝は中國美術の一つの榮光の時代であった。これまでの秦漢の無名の工人の時代と異なり、書の領域で王羲之・王獻之、繪畫の領域で顧愷之・陸探微・張僧繇、彫刻の領域で戴逵などの名をもった藝術家が輩出し、また書論や畫論などの藝術論が頻出したように、從來の美術より一次元高い藝術が強く意識され、造形に一段と彫琢と洗練が加えられた時代であった。しかし、それにもかかわらず南朝美術の遺品は極めて乏しいのが實狀である。傳世する王羲之の「喪亂帖」「風信

帖」、或いは顧愷之の「女史箴圖」「洛神賦圖」といえども、全て唐代以後の模本であることは大方の認めるところであり、當時榮華を誇った宮殿、寺院などの地上の建造物も殆ど壊滅状態といつてよい。このことは北朝として例外ではないが、北朝の場合には幸いなことに敦煌・雲岡・龍門などの佛教石窟寺院が多数現存し、これらを通して當時の彫刻、繪畫などの状況を窺うことが可能である。南朝の場合は石窟寺院といえは小規模な南京棲霞寺石窟が殆ど唯一であり、金銅佛、石佛も現存する作品数は北朝と比べれば寥寥たるものである。

このような南朝美術の状況にあつて、從來美術史學的觀點から餘り顧みられなかつた陵墓の石獸と、近年南朝の陵墓から出土している磚畫は甚だ貴重な資料である。いずれも南朝歷代の都の置かれた南京の郊外と齊・梁時代の帝陵區をなした丹陽郊外にあり、南朝の皇帝や王侯貴族の大墓に屬するものである。石獸は石灰岩を丸彫りした三、四mに及ぶ大型彫刻であり、磚畫は土に型押しして焼いたものとはいえ、紛れもなく當時の一級の藝術家、工人の關係した大畫面である。資料の操作次第では、これまで文獻や模本による以外手懸りのなかつた南朝の藝術も、これによってより確實な作品的裏附けが出來よう。

しかし、いまこれらを作品として取上げようとすると、その前に解決すべき多くの問題が存在する。というのは、これらの石獸や磚畫はいつの時代のものか、或いはどの皇帝、貴族の墓のものか、未だ必ずしも決定論の域に達していないからである。例えば文化大革命前の一九六〇年に南京西善橋の南朝大墓で發掘された有名な磚畫「竹林七賢と榮啓期圖」は、南朝繪畫史にとって稀にみる大收穫であつたにもかかわらず、その制作時期について東晉說、晉—宋間說、宋代說などがあり、いまなお結論をみていない。作品としての質がよいだけに「竹林七賢圖」の一種として果たして東晉の顧愷之の時代に遡るものか、劉宋の陸探微の時代に近いものか、はたまたそれ以後のものかは重要な問題である。また石獸をとつても、南京東北郊の棲霞寺に近い獅子衝の一対有角石獸は劉宋文帝（四二五—四五三）の長寧陵のものか、或いは陳文帝（五六〇—五六六）の永寧陵のものか、意見が並立の状態にある。兩者の説には百年以上もの開きがありゆゆしき問題といえよう。これは無論明確な紀年をもつた基準となるべき作品が絶對的に少ないことから起きた問題であるが、また東晉・宋・齊・梁・陳の各時代の造形様式

が正確に把握されていないことから起きた問題でもあろう。幸いに石獸の場合は各時代毎にかなり多くの作品が揃っており、これらを厳密に編年すれば宋・齊・梁・陳の各時代の彫刻様式が判明しよう。また「竹林七賢と榮啓期圖」などの磚畫の正確な年代が判明すれば、これまで六朝繪畫といえば顧愷之だけを取上げて事足れりとされた從來の繪畫史に大きな風穴を開けることが出来るとともに、また例えば南齊の謝赫の唱えた氣韻生動、骨法用筆などの「六法」理論が、どのような實際の作品を背景に生まれたかがわかるう。

本稿はこうした問題の状況に基づき、南朝陵墓のうちでも特に帝陵の石獸と磚畫を扱うことにする。石獸は皇帝と王侯貴族の墓雙方の參道入口に一對置かれたが、帝陵の石獸は、王侯貴族墓の鬚をもち舌を垂らした石獸とはっきり形式を異にして、頭頂に一本或いは二本の角をもっている。また「竹林七賢と榮啓期圖」「羽人戲龍・戲虎圖」「出行圖」「獅子圖」などの磚畫も、これまでの出土例からすると帝陵特有のものである。但し上述の「竹林七賢と榮啓期圖」を出土した南京西善橋墓は、厳密に言えばその墓葬形式からみて帝陵ではなく貴族の墓とみなされる例外的なケースであるが、「竹林七賢と榮啓期圖」は本來帝陵に制作されるべきものであるから、便宜上ここで一緒に取上げることにする。

さて、これまで帝陵の石獸や磚畫について研究した主要な論考としては、以下の如きものがある。

- (一) 朱希祖・滕固編『六朝陵墓調查報告』(北京 一九三五)
- (二) 朱契『建康蘭陵六朝陵墓図考』(北京 一九三六)
- (三) 羅宗眞「六朝陵墓及其石刻」⁽¹⁾『南京博物院集刊』一集 一九七九
- (四) 姚遷・古兵編『六朝藝術』(北京 一九八一)
- (五) 林樹中『南朝陵墓雕刻』(北京 一九八四)
- (六) 長廣敏雄「晉・宋間の竹林七賢と榮啓期の畫圖」『國華』八五七號 一九六三
- (七) 町田章「南齊帝陵考」『文化財論叢』京都 一九八三

(八) Barry Till; Some Observations on Stone Winged Chimeras at Ancient Chinese Tomb Sites, ARTIBUS ASIAE, Vol. XLII, 4, 1980, Ascona.

(一)は朱希祖とその息子朱倂の個人調査に中央古物保管委員會との共同調査を加え、合計十四回にわたる現地調査を基に作られた。中心となったのは「六朝陵墓調査報告書」などを執筆した朱希祖で、その他、滕固、朱倂の論考が收められ、巻末には朱倂などの撮影した寫眞圖版を附している。石獸、神道柱など地上の石刻のみの報告であるが、その石刻がどの皇帝の陵のものであるかという帝陵比定に当たっては、現地調査とともに『建康實錄』『元和郡縣圖志』『乾隆丹陽縣志』などの史料を博搜して集大成し、以後の研究に大きな影響を与えた。(二)は(一)の説を一部改めたもので、(三)は(二)の説を基にして更に解放後の發掘成果を取入れている。(四)は石獸・磚畫・碑刻を總合的に編集して、解放後の集大成的成果といえ、(五)もおおよそそれに基づいている。(六)は發掘間もない南京西善橋の磚畫を自ら撮影した拓本寫眞とともにわが國に紹介したもので、後に補筆して『六朝時代美術の研究』(東京 一九六九)に收められた。(七)は南齊だけにとどまらず宋・齊・梁・陳の石刻と磚畫を取上げ、從來の説にとられず大膽な帝陵比定を試みている。また(八)は漢代から六朝までの石獸一般を扱い、歐米收藏の石獸も取上げている。

本稿はこれら先學の研究成果を踏まえ、更に研究の發展を期さんとするもので、先に石獸を取上げてその帝陵比定と圖像學的考察を試み、後で磚畫を取上げ編年と圖像學的考察を試みたい。

一 宋帝陵の石獸

現存する南朝帝陵の石獸のうち最古のものは、南京(圖1)の東郊麒麟門北の麒麟鋪(江寧縣麒麟鋪村)³⁾にある一對石獸である。二石獸(圖2、3)は道路を挟んで兩側に二三・四〇m離れ、ほぼ東西に向合って置かれている。ともに破壊と風化によ

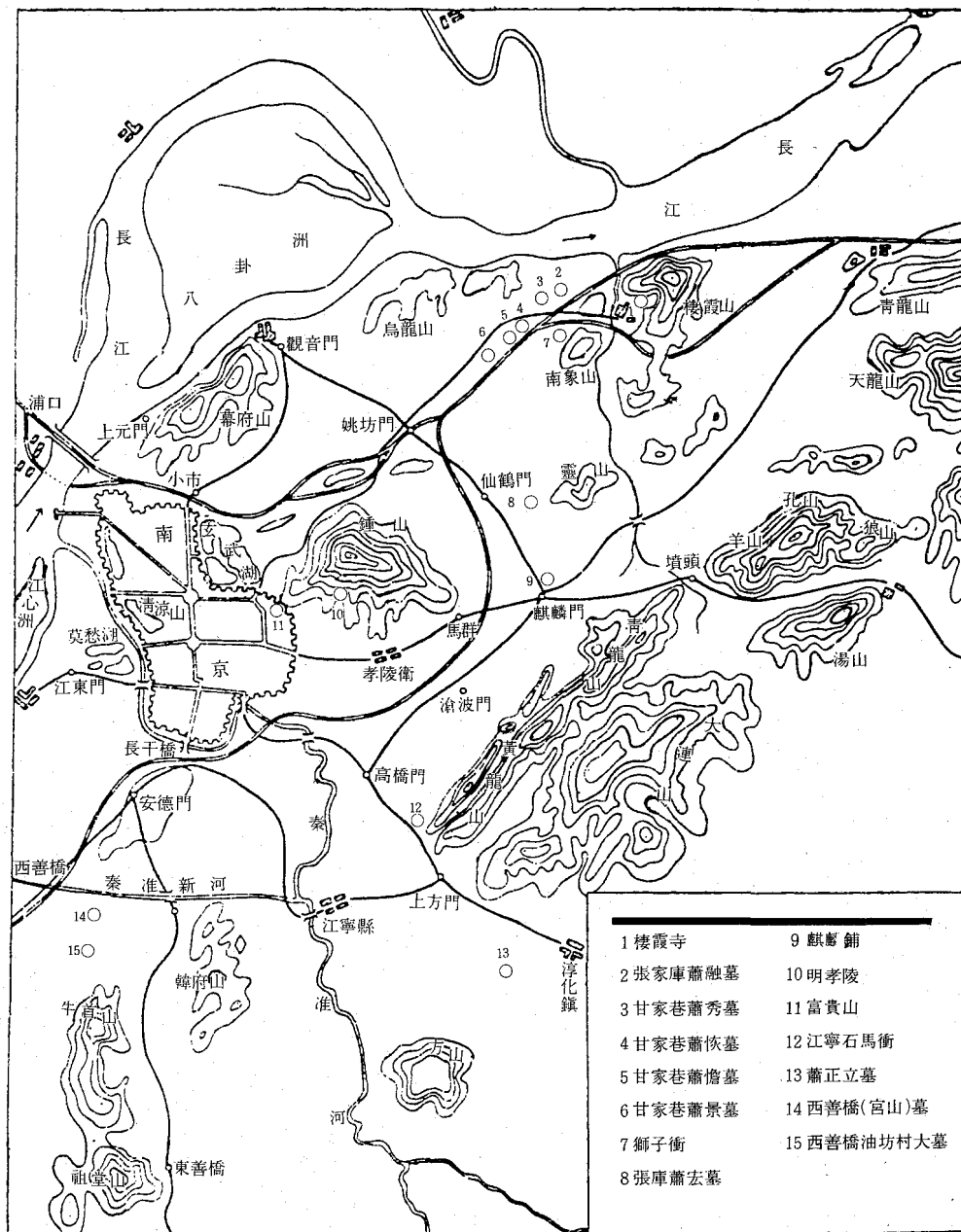
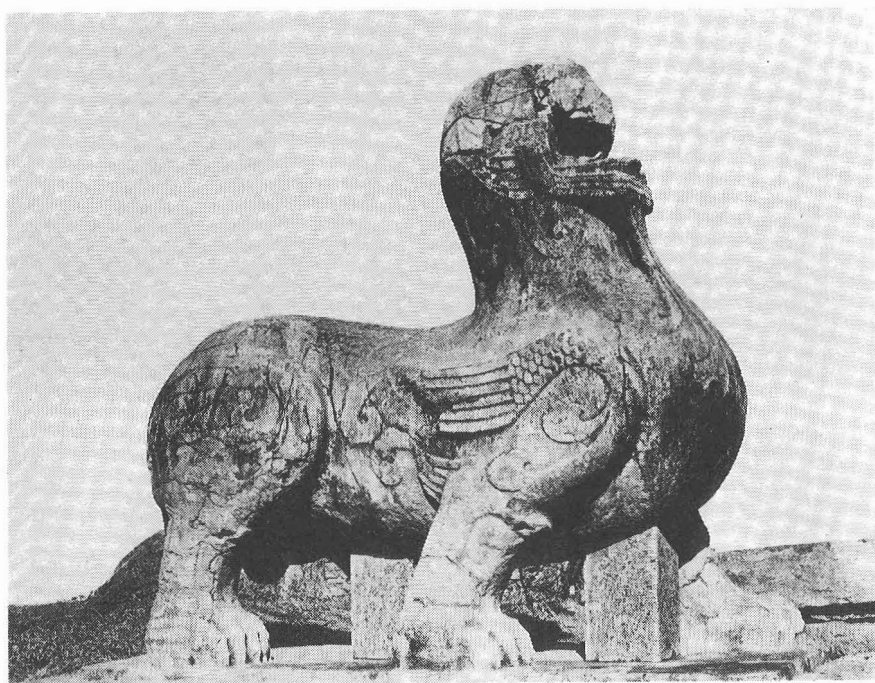


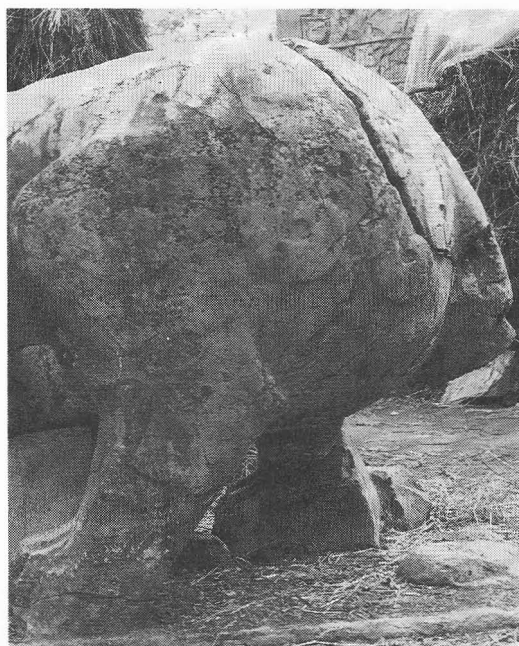
圖1 南京略圖



(1) 全身 體長 3.18m



(2) 胸部頸鬚

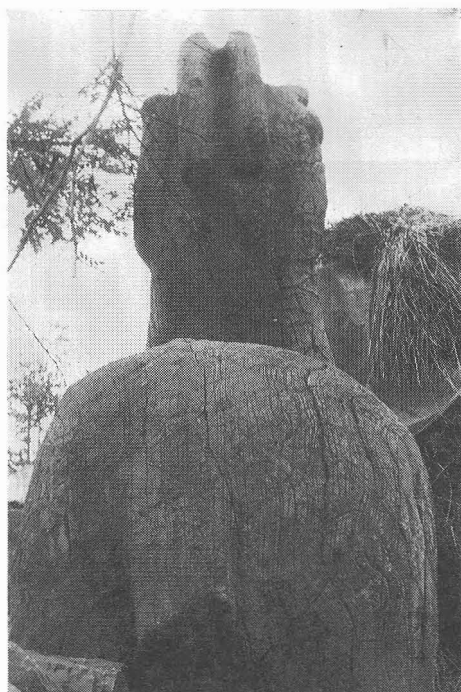


(3) 後 軀

圖2 南京麒麟鋪 右麒麟



(1) 全身 體長 2.96m



(2) 背面 雙角



(3) 翼 部

圖3 南京麒麟鋪 左麒麟

る損傷がかなりひどく、解放前に東側（左側）石獸は池中に倒れて水につかり、また西側（右側）石獸も頭部の半分が地上に落ちていたが、一九五六年に至って修理と補強が加えられ、それまで互いに五四・五m離れていた位置を移して現在の基臺の上に置かれた。石獸はいずれも頸の下に髭を垂れて肩に翼をはやし、頭を上に向け口を大きく開け、胸をそらして奥の前肢を前に出している。右側石獸は（圖2）は體長三・一八m、高さ二・五六m⁽⁵⁾で、頭の頂きと下顎を除く顔の前面は殆ど壊れて、地面に垂れた太い尾も折れており、また左側石獸は（圖3）は體長二・九六m、高さ二・八〇mで四肢は全て缺けて尾も途中で折れている。左右ともに形態と大きさは殆ど同じであるが、唯一の違いは角で、右側石獸は壊れて無いが、左側石獸は頭頂に二本（圖3（2））はっきり認められるところから、齊以後の帝陵石獸の形式を考え併せ、右側石獸の頭頂にも角が一本あったとみなされる。これらの石獸の名稱についてはいろいろ説があるけれども、それは後に詳しく検討することにして、いまは『南齊書』『梁書』に麒麟⁽⁶⁾（麒麟）の呼稱が用いられているので便宜的に麒麟と呼ぶことにし、右側の雙角石獸を右麒麟、左側の一角石獸を左麒麟とする。

さて、この麒麟鋪の石獸は、從來から、東晉最後の恭帝より禪讓を受けて永初元年（四二〇）に宋の王朝を立て、永初三年（四二二）に崩じた武帝劉裕の初寧陵⁽⁷⁾に比定されている。この説は唐の許嵩『建康實錄』卷十一、李吉甫『元和郡縣圖志』卷二五の次の記載に基づいている。

葬丹陽建康縣蔣山初寧陵。在縣東北二十里、周圍三十五步、高一丈四尺。

宋武帝劉裕初寧陵、文帝義隆長寧陵、並在（上元）縣東北二十二里、蔣山東南。

ともに南京（圖1）の東北に位置する蔣山（一名鍾山、紫金山）の近くにあったことをいい、後者は更に蔣山の東南の方角と云うが、いずれも現在の麒麟鋪の石獸の位置とほぼ合致する。無論石獸は參道入口に置かれるもので、陵自體はそこから更に數百m北の所にあったわけである。そして宋の張敦頤『六朝事迹編類』卷十三によると、北宋の政和年間にある人が蔣山の蔣廟の側で「初寧陵西北隅」と書かれた石柱を得たといい、この説を一層確實なものにする。しかし上引の『元和郡縣圖志』に

よると、蔣山の東南には宋文帝劉義隆（四二四—四五三在位）の長寧陵もあり、初寧陵との關係が紛らわしい。事實麒麟鋪の石獸を長寧陵のものとする意見も出て⁹いるが、長寧陵については『南齊書』卷二二、豫章文獻王嶷傳に次のような興味深い記事がみられる。

上數幸嶷第。宋長寧陵塹道出第前路、上曰、我便是人他家墓內尋人。乃徙其表闕麒麟於東岡上。麒麟及闕、形勢甚巧、宋孝武於襄陽致之、後諸帝王陵皆模範而莫及也。

即ち齊の永明七年（四八九）年頃、武帝蕭賾がしばしば弟の蕭嶷の邸宅を訪れたところ、長寧陵の塹道（參道）が邸宅の前の道路に出ていたので、武帝が他人の墓の中に入って人を尋ねるようなものだといひ、そこで長寧陵の「表闕」「麒麟」を東岡上に移したというのである。ここで蕭嶷の邸宅の位置が問題となるが、これは東田にあった北第と東府にあった齋¹⁰（南第）のうち、「臣 前に東田にありて、恩を承けて過ち酔う」¹¹（『南齊書』豫章文獻王嶷傳）とある北第で、その近くにあった長寧陵の「表闕」「麒麟」を東岡上に移したというわけである。東田は他にも、『南史』卷五、鬱林王紀に「文惠太子 樓館を鍾山の下に立て、號して東田¹²という」とある文惠太子蕭長懋の起こした東田の小苑、また沈約（四四一—五一三）が「郊居賦」に詠った東田の郊園¹³などがあつた所である。「東岡」はこの東田の近くの岡の意であらう。つまるところ長寧陵の移轉後の「表闕」「麒麟」は、朱希祖も¹⁴いうように當時の建康城の東方、青溪の北部に當たる地域、即ち鍾山の西南にあつたとみるのが妥當であらう。また現在麒麟鋪の石獸の置かれてゐる場所は「岡」という程の高臺にもない。従つて鍾山の東南にある麒麟鋪の石獸は、やはり長寧陵のものではなく初寧陵のものとするのが妥當である。

ところで、上引の『南齊書』豫章文獻王嶷傳によると、宋文帝長寧陵には麒麟（麒麟）の他に「表闕」もあつたことが知れるが、同じようなものは初寧陵にもあり、『宋書』五行志には次のような二條の記事がみえる。

元嘉十四年（四三七）、震初寧陵口標、四破至地。

孝武帝大明七年（四六三）、風吹初寧陵塹口左標折。

即ち參道入口の「標」が地震や大風で倒れたことをいうが、後述する三城巷(2)の梁文帝建陵に一部現存するような、石造の圓柱の上方に題額銘、頂きに小石獸をのせる圓盤を置いた神道柱を指すものと思われる。題額に陵名を記したので「表」「標」、陵の參道の入口兩側に一對置かれたので「口標」「左標」、漢代の宮城の門の如き役割を果たしたので「闕」といったのである。これによって宋の武帝の時から麒麟石獸と神道柱がセットで配されたことが知れる。

また上引の豫章文獻王嶷傳には、文帝の長寧陵の麒麟及び神道柱は姿かたちがなかなか巧みであったが、これは「宋孝武」が湖北襄陽からもたらしたもので、後の皇帝の陵は皆これをお手本として及ばなかったとあった。ここで「宋孝武」とは文帝の次の孝武帝劉駿(四五三—四六四在位)を指し、宋の帝陵の麒麟及び神道柱全般について述べたものである。また襄陽の石材については不詳であるが、恐らく孝武帝が即位前の一時期に、時の文帝の關・河經略の一環として、東晉の南渡以來皇子としては初めて雍州刺史として襄陽に赴任したことと關係があり、襄陽で制作して南京に運んだか、石灰岩を襄陽から運んだことをいうのであろう。いずれにしても、これによって宋の帝陵石獸は文帝の長寧陵の時に、それ以前の武帝の初寧陵と比べ何らかの改良がなされたことが知れる。

そして同時にここで見逃してならないのは、文帝長寧陵の石獸及び神道柱の制作に次に即位した孝武帝が關係していたことである。これは當然といえば當然のことであるが、陵の參道に置かれる石獸や神道柱、或いは石碑が、その皇帝の死後に制作されることを明確に示しているのである。このことはまた次の事實によっても證されよう。即ち神道柱の題額には、例えば上述の梁文帝建陵の題額銘に「太祖文皇帝之神道」(圖4)とあるように、廟號(「太祖」と諡號(「文皇帝」)は必ず刻されるべきものであるが、これらは言うまでもなく崩後に贈られるものであり、これからも神道柱が死後に制作されることが知れるのである。また碑があったとしても、それは南京甘家巷に現存する梁の蕭秀墓の、王僧孺・陸倕・劉孝綽・裴子野が蕭秀死後に撰して立てた四基の碑(圖5)の例からも確實に知られる通り、死後に作られるものである。従って石獸とともに參道に並ぶものとして他の石刻と同時に制作されるものと考えられよう。確かに陵自體は秦始皇帝陵など中國の古くからの例として皇帝

の即位と同時に場所が定められて造營準備が行われるが、これら參道の石刻はたとえ準備があったにしても、その最終的な完成は被葬者の死後のことの筈である。このことは今後石獸の編年をしていく上で極めて重要なことである。

ところで、このように帝陵に石獸や神道柱を設置するのは、南朝では宋の武帝から始まったことである。すぐ前の東晉でも帝陵に石獸や神道柱を作ることには行われなかったようである。南朝より前、漢代には陝西咸陽にある前漢武帝の茂陵や山東嘉祥縣にある後漢の武氏の墓に代表される如く、朝野をあげて厚葬の風が盛んで、巨大な墳丘、或いは石や磚で築いた豪華な墓室は勿論、祠堂・石獸・碑銘などが盛んに作られたが、魏晉南北朝に入ると様相は一變して、既に後漢末の建安十年（二〇五）、魏の武帝曹操は天下の凋弊を理由に薄葬令を出して立碑を禁じ⁽¹⁹⁾、西晉の武帝司馬炎も咸寧四年（二七八）に石獸・碑表を作ることを嚴に禁じている⁽²⁰⁾。その後、東晉では元帝の時に顧榮が立碑を求めて許されるなど禁は漸く緩んだが、末期の義熙年間にはまた禁令が出た。また遺物をみても東晉の貴族墓では神道柱は「楊陽神道柱」（圖7 北京故宮博物院藏）や額銘拓本などを通じて幾つかあったことが知られるが、帝陵では神道柱も石獸も例が知られていない。例えば一九六四年に南京城内東側で發見された富貴山東晉墓は、これに先立つ一九六〇年にそこから四〇〇m離れた地點で「宋永初二年太歲辛酉十一月乙巳朔七日辛亥晉恭皇帝之玄宮」と刻された石碣⁽²¹⁾（圖6 高さ一二五cm）が發見され、恭帝の沖平陵と目されているけれども、附近では石獸も神道柱も見つかっていない。恭帝は宋の武帝劉裕に禪讓した東晉最後の皇帝で、宋に入って零陵王に封ぜられ、永初二年（四二一）に劉裕の手先によって内房で弑されたが、葬令は晉禮をもって行われたとある。確かに墓室（圖78（4））の方は甬道に二重の石門を設けるなど帝陵としての條件を満たしているのである。

さて、このように麒麟鋪の一對石獸は宋武帝の初寧陵のものと考えられるが、これ以前の南朝に類例がなく、また前述の如く一部の研究者によって宋文帝の長寧陵石獸とみなされた南京獅子衝の石獸は、後に考證する通り明らかに梁以後のものであるため、これ以後の宋陵にも例がなく、これを様式の見地から明確に位置づけることはなかなか困難である。石獸は右麒麟（圖2）を例にとると、全體として太りじしのずんぐりした體軀をなし、首は太く短く、胴體は圓筒柱のように太く丸く、四

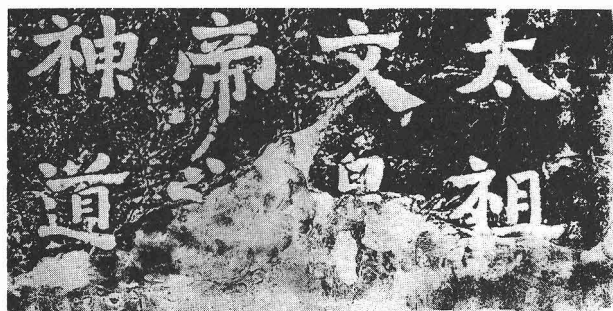


圖4 梁文帝建陵 神道柱題額銘（拓本） 縱69cm 橫133cm

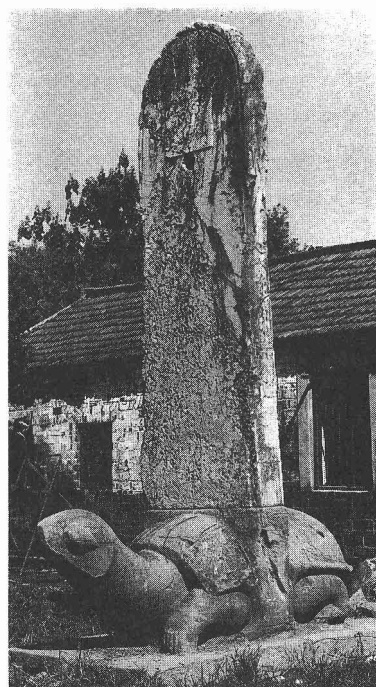


圖5 南京甘家巷蕭秀墓 左側奧石碑

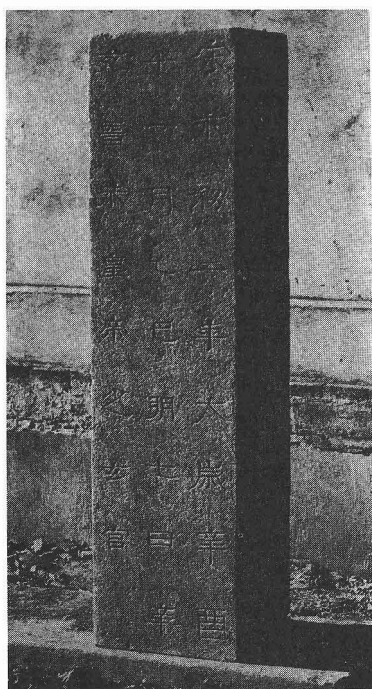


圖6 南京富貴山出土東晉恭帝玄宮碑
高124cm 宋 永初2年（421）



圖7 楊陽墓神道柱題額 東晉 隆安
3年（399） 北京故宮博物院

肢も太くがっしりしている。そのため塊量としての巨大なヴォリュームは感じられるけれども、反面頭部・胴部・四肢の身體各部が未だはっきり分化しておらず、素朴で鈍重な感じは否めない。未だ石という自然の素材に頼って彫刻としてそこから脱皮していないのである。こうした素朴さは、體軀の割に翼が小振りで、且つ位置が稍や低いため翼として十分機能していないことや、體の表面各所に淺く幅廣に浮彫りされた卷き毛（圖2（3））が、古來の聖獸の表面をおおう文様なのか、或いは體毛なのかどっちつかずの表現に終わったことにも窺える。これを見る限り、次に來るべき丹陽獅子灣などの南齊初期石獸と樣式的に餘りにも懸離れており、上述した如く長寧陵石獸において何らかの改良が行われる以前の石獸とみなすことは出來よう。但し頭頂の一角、二角にしる、下顎から垂れて胸部で左右に三本ずつ分かれる髭の表現（圖2（2））にしる、また翼の羽根の附け根の鱗文（圖3（3））にしる、これ以後の石獸の基本形式が既に出來上がっているのは注目される。

これに先立つ後漢の石獸⁽⁸⁾は、四川の蘆山縣楊君墓一對石獸や雅安市の高頭墓石獸（建安十四年 二〇九）などの他、一九五四年に洛陽の洛河岸で出土した「緱氏蒿聚成奴作」銘の一角と二角の一對石獸（圖8 洛陽關林石刻藝術館、中國歷史博物館藏）、一九五九年に咸陽西郊で出土した一對石獸（陝西省博物館藏）、建和元年（一四七）に「孫宗」により制作された山東嘉祥縣武氏祠の一對「師子」石獸（圖9）などが知られる。麒麟鋪石獸は洛河岸や咸陽西郊出土の險しい形相の虎型石獸よりも、武氏祠の鬣をもった獅子型石獸にずんぐりした體型が似ており、これらを參考に南朝において初めて作られたものと思われる。この初寧陵石獸の前肢の肘に三角形に表された毛（圖3（3））は長毛と呼ばれて獅子特有のものであり、角にこだわって鬣こそないが獅子を意識していたことは注目される。

いずれにしても、麒麟鋪石獸は彫刻としての素朴さが認められて南齊より前は勿論、宋の孝武帝による長寧陵石獸より前の樣式を示すと思われ、稍や嚴密さを缺くけれども、場所の考證と併せ宋初の初寧陵石獸とみなしてよいものと思われる。

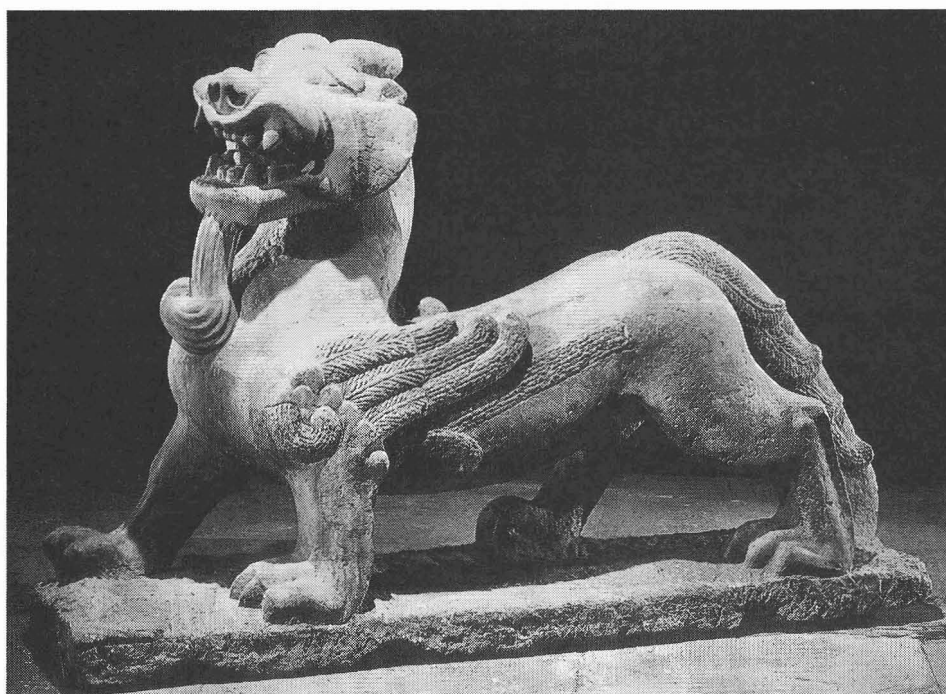


圖8 洛陽洛河岸出土石獸 體長168cm 後漢 洛陽關林石刻藝術館



圖9 武氏祠東側石獅子 高124cm 後漢 建和元年(147)

二 齊帝陵の石獸

(一) 獅子灣・趙家灣・前艾廟

齊・梁の帝陵は丹陽(圖10)の郊外に位置している。齊⁽²⁷⁾と梁はともに漢の相國蕭何を先祖とする蕭氏の立てた王朝で、もと山東の東海郡蘭陵縣中都里(西晉元康元年以後は蘭陵郡)にいたが、東晉初めの蕭整の時に南遷して揚子江を渡り、今の齊・梁帝陵區に當たる蘭陵武進縣東城里に居した。當時江南に移住した者はその場所に本籍地と同じ名前をつけ上に「南」を冠したので、この地は南蘭陵郡蘭陵縣とされ、陵もこの僑居の地に營まれたのである。いま丹陽における有角石獸は、爛石壠と水經山村の無角石獸を別にして、獅子灣・趙家灣・前艾廟・金家村と、三城巷の四箇所、そして陵口の合計八箇所分布している。このうち齊の帝陵石獸は概して丹陽東北の經山の周りに分布しており、なかでも獅子灣・趙家灣・前艾廟の石獸は前期に屬する。

先ず丹陽縣胡家橋北二里の獅子灣の石獸は、南向きの陵の參道に東西に相對し、東側(左側)の雙角石獸(圖12)が腰部や後肢に一部損傷を被っているものの比較的保存が良いのに対して、右側の一角石獸は頭部と首が缺けて脚を地中に埋めたまま伏している。左石獸の大きさは體長二・九五m、高さ二・七五mで、ほぼ同じ大きさの左石獸とは二三m離れていたが、一九七九年に左石獸を南に一m平行移動した⁽²⁸⁾という。またこの獅子灣から西に小丘陵を隔てて數百歩行つた所に趙家灣の石獸(圖11)がある。あると言ったが嚴密に言くと、解放前に朱希祖が調査した段階では、確かに互いに一八・五m隔てて頭部の無い二體の石獸が相對し存在していたが、一九六八年に全壞してしまつた。⁽²⁹⁾この獅子灣と趙家灣のあたりの地形は緩やかに起伏する丘陵が廣がつており、そこに二つの陵の石獸が隣接し位置していたのである。朱希祖「六朝陵墓調查報告書」によれば、こ

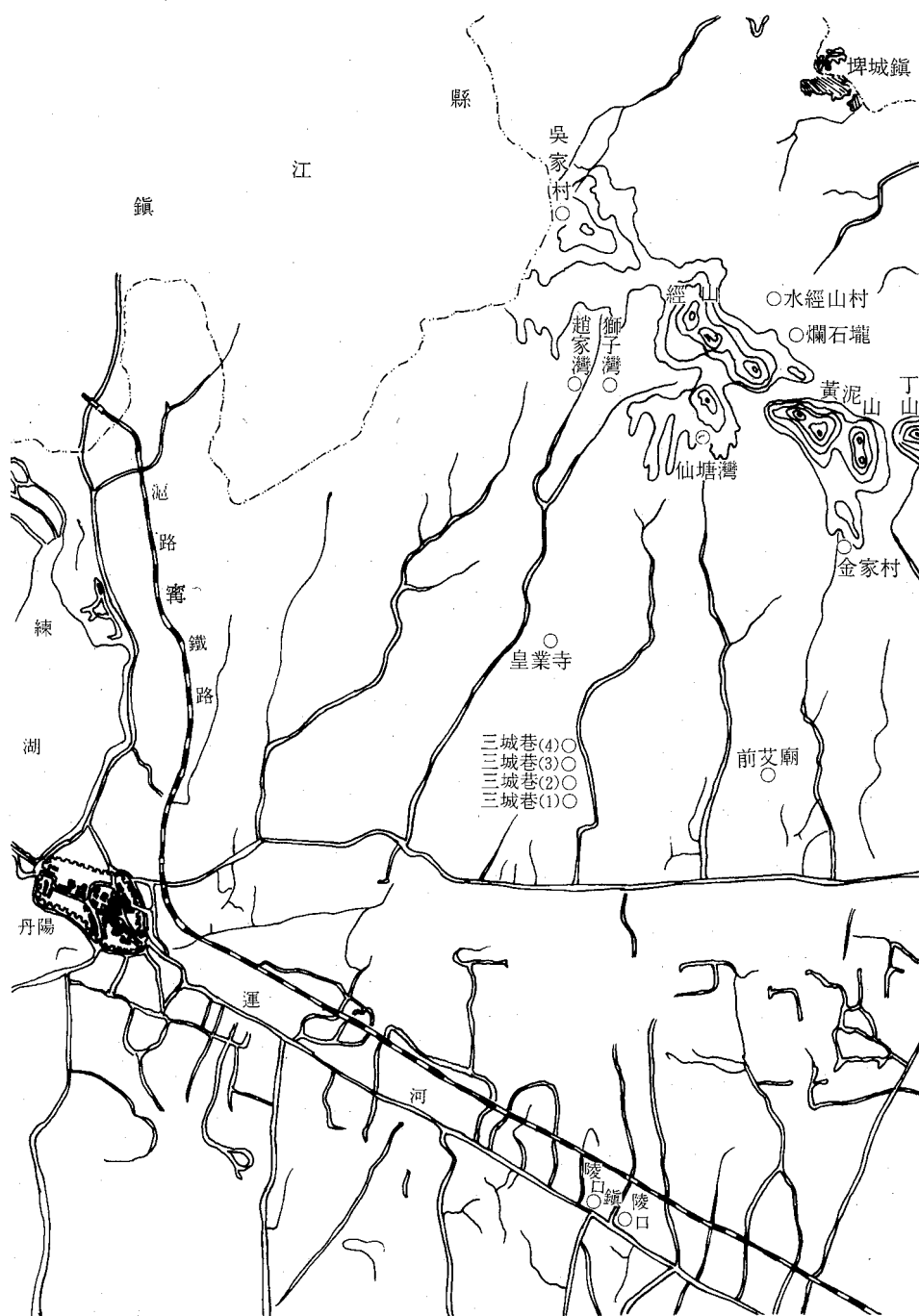


圖10 丹陽齊·梁帝陵位置略圖

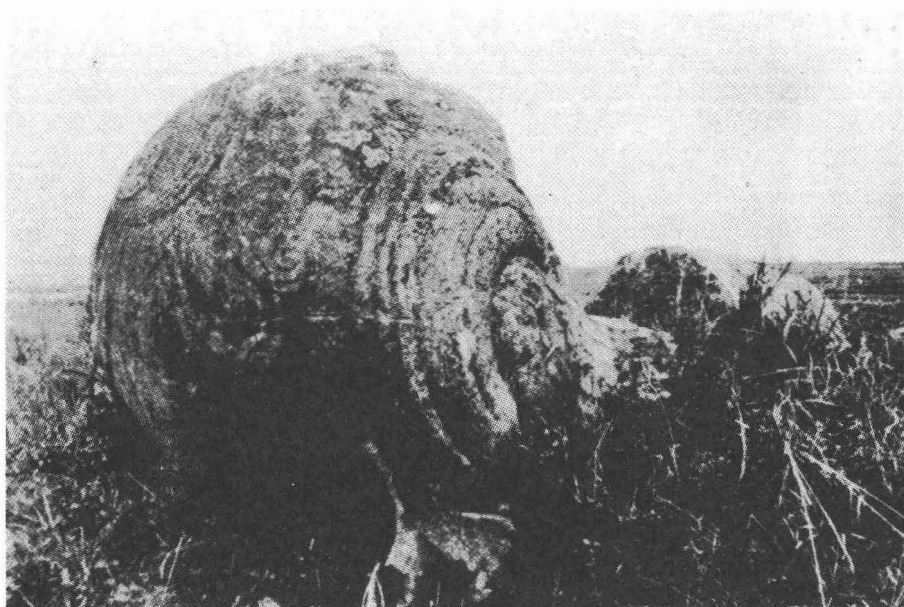


圖11 丹陽趙家灣 左麒麟

の二つの陵は北向きとあるけれども、⁽³⁰⁾少なくとも獅子灣の石獸は北側に次第に高くなる地形を背にしているばかりか、東側石獸は角こそ壊れてみえないものの、左前肢を前に出しているところから他の前艾廟や仙塘灣の齊陵石獸に照らして明らかに左石獸の筈であり、南向きとするのが妥當である。また趙家灣の陵も地圖で見ると限り北へとうずたかく起伏しており、南向きとするのが妥當であらう。つまり二つの陵は南向きに並んで造られていたというわけである。では、この二つの陵の石獸が齊のどの皇帝陵に當たるかという、從來通り、『元和郡縣圖志』⁽³²⁾卷二五が潤州丹陽縣の帝陵について、「縣北二十八里」「縣□(北)三十一里」とそれぞれ記す宣帝蕭承之の永安陵と高帝蕭道成の泰安陵に當てるのが妥當であらう。というのはこの二陵石獸は丹陽縣城からみると實際は東北の方角に當たるけれども、丹陽の石獸のある帝陵のうちでは最も北寄りの方角に位置し、また『元和郡縣圖志』⁽³³⁾の記事もこの二陵以外は縣の「東北」か「東」の方角にあると記しているからである。但し朱希祖以來、從來の説では獅子灣が宣帝の永安陵、趙家灣が高帝の泰安陵とするのが一般的であったが、これには大いに疑問がもたれる。宣帝と高帝は父子の關係にあり、建元元年(四七九)、高帝蕭道成が齊の王朝を立て高帝に即位した時に、既に亡くなっていた父の蕭承之を追尊

次に齊初期のもう一つの丹陽縣建山公社前艾廟（建山郷田家村附近）の石獸は、經山の周圍から南に稍や離れて、獅子灣、趙家灣の東南の方角に位置している。現在一對の石獸がのこっているが、右側石獸は甚だしく風化し僅かに兩翼を保つ程度で表面の裝飾は殆ど剝落してしまった。これに對して左側石獸（圖13）は下顎を缺き雙角と左前肢に損傷を被った程度で比較的良好に保存されている。左側の大きさは體長三・一五m、高さ二・八〇mである。この石獸の位置は丹陽縣城から丁度東の方角に當たり、『元和郡縣圖志』卷二五に「（丹陽）縣東二十二里」とあつて齊陵のなかでも唯一の東の方角が記載されている齊武帝蕭蹟の景安陵のものと考えられる。『南齊書』卷三、武帝記には、永明十一年（四九三）七月、武帝が不豫に陥った時の詔に次のことが記されている。

陵墓萬世所宅、意嘗恨休安陵未稱、今可用東三處地最東邊以葬我、名爲景安陵。

即ち武帝が即位する前、建元三年（四八二）に裴皇后が亡くなつて休安陵³⁹に葬られ、武帝もこの休安陵に合葬される筈であつたが、帝はこの陵がふさわしくないとして、新たに「東三處の地」の最も東端の地を選んで葬らせ、景安陵と名附けたというのである。この「東三處の地」が何を指すか明瞭でないけれども、前艾廟の石獸は少なくとも永安陵、泰安陵に對しては勿論、經山周圍の齊陵全體に對しても東にあつて一基ぼつんと位置しており、『南齊書』の記事にも合致すると思われる。

さて、齊初期の獅子灣、趙家灣、前艾廟の石獸をそれぞれ齊宣帝（四七九追尊）、高帝（四八二卒）、武帝（四九三卒）の陵に比定したが、實際の石獸彫刻の編年として果たして妥當であらうか。趙家灣の石獸については解放前の寫眞（圖11）しかないが、それを見る限り、左麒麟の大きな胸部はボールのように丸まるとして前に突き出され、顎の下巻鬚も胸部に垂れ下がつて、翼の生えた肩部も躍動的に大きな弧を描き、基本的には獅子灣の石獸と大差ないようである。そこで趙家灣において、前艾廟の石獸を上記の考證通り獅子灣に次ぐものとして、いま獅子灣と前艾廟の石獸を比較しつつみてみよう。

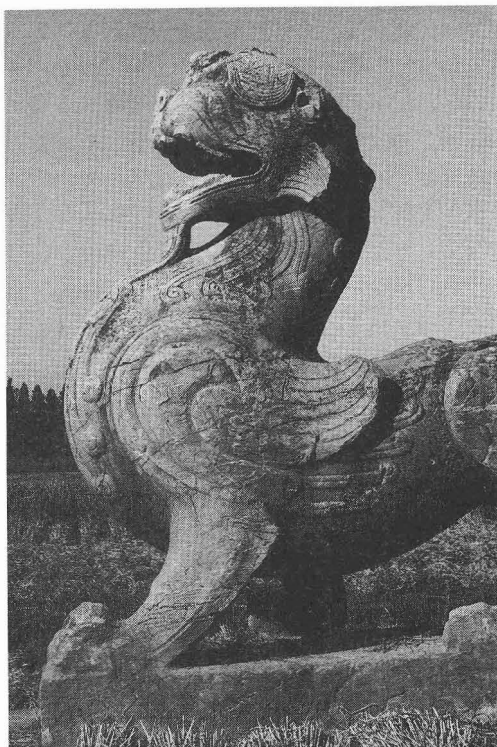
先ず獅子灣の左麒麟（圖12（1））は、頭を後ろに引いて胸を突き出し、左前肢を前に出して腰を高く上げている。頭部（圖12（3））は稍や上向きに口を半ば開けて鼻孔も大きく開き、突出した眼の上にはアイマスクのような幅の廣い眉毛が被さつて、頬鬚が



(1) 全身 體長2.95m



(2) 前面 頭部及び胸部



(3) 前 軀

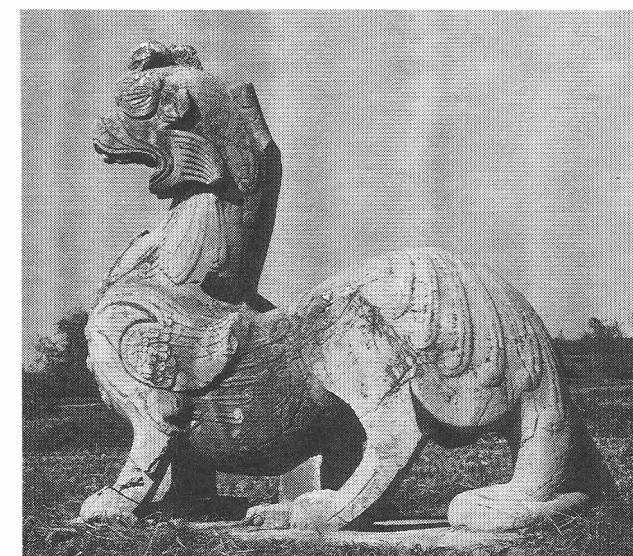
圖12 丹陽獅子灣 左麒麟

後ろ向きに伸びている。顎髭は胸に垂下がっているが、その下からは更に六本の矢のような毛が伸びて左右に三本ずつ分かれ先端を丸く巻いている。肩の翼（圖12(3)）の前部は大きな弧線を何本も描いて躍動的な三日月形を作り、後部には羽根を上に向かってぴんと伸ばして、附け根には鱗文が表される。そして太い尾は地に垂れて外に巻いている。また體の各所には胸部でみた先端を丸く作った矢のような毛が何本も生え、首の兩脇、翼の後ろ、腰の各部に表され、特に翼の羽根の後ろの毛（圖12(3)）は五本ずつ勢いよく平行に伸びている。この獅子灣の石獸の形態上の特徴は、頭部・首・胸部から成る前軀、とりわけ胸部を厚く大きく作って、胴を短くするなど後軀を小さくした點にあり、そのため全體の比重が前にかかって、頭部・首・胸部・左前肢と連なる斜めの軸に巨大な動勢が感じられる。そして胴は後ろに行くに従って細くなるとともに高くなって腰が隆起し、實に精悍な姿勢に作られている。

これに對して前艾廟の石獸（圖13(3)）は、形はほぼ獅子灣に似ているけれども、頭部をそれほど後ろに引かず胸部も大きくは作られず、胴體が殆ど同じ太さに長く表されて、腹部が重く垂下がるように重心低く作られている。その結果、顎の下から胸、そして下腹部に至る線が實に優雅な曲線を描き、一方隆起した腰が尾に連結してなだらかに地に落ちているため、肩から腰、尾に至る線が實に緩やかな曲線を描いている。この胴長の石獸のおっとりした優雅な感じは獅子灣石獸の精悍な感じとは異質で、それなりの年代差を感じさせるに十分である。また首の脇のところは四本の長い毛が伸びているが、獅子灣の場合（圖12(3)）は毛が少しねじれるように表現され、實に力強い線が感じられるのに對し、前艾廟の場合（圖13(1)）は緩い曲線を描くだけでより素直な感じを與える。獅子灣を高帝の泰安陵とするならば、前艾廟はそれから約十年後の武帝の景安陵として不可ないものと思われる。



(1) 胴體



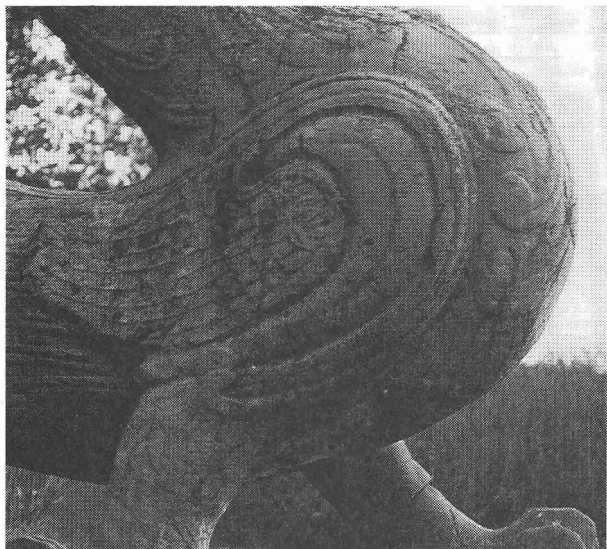
(2) 正面 胸部 (3) 全身 體長3.15m

圖13 丹陽前艾廟 左麒麟

(二) 仙塘灣・金家村・吳家村

次に齊帝陵の石獸として、仙塘灣と金家村の石獸が考えられる。この二箇所の石獸は現在一對ずつ保存されているが、參道の奥に位置する墓自體も發掘されて、甬道の二重石門の存在などから帝陵であることが立證されるところに、甬道や墓室では石獸こそ見つかっていないが、ここも帝陵形式の墓(圖78⁽⁵⁾)が發掘されて、「竹林七賢と榮啓期圖」「羽人戲龍・戲虎圖」などの磚畫が出土している。便宜上、ここでまとめて扱うことにする。

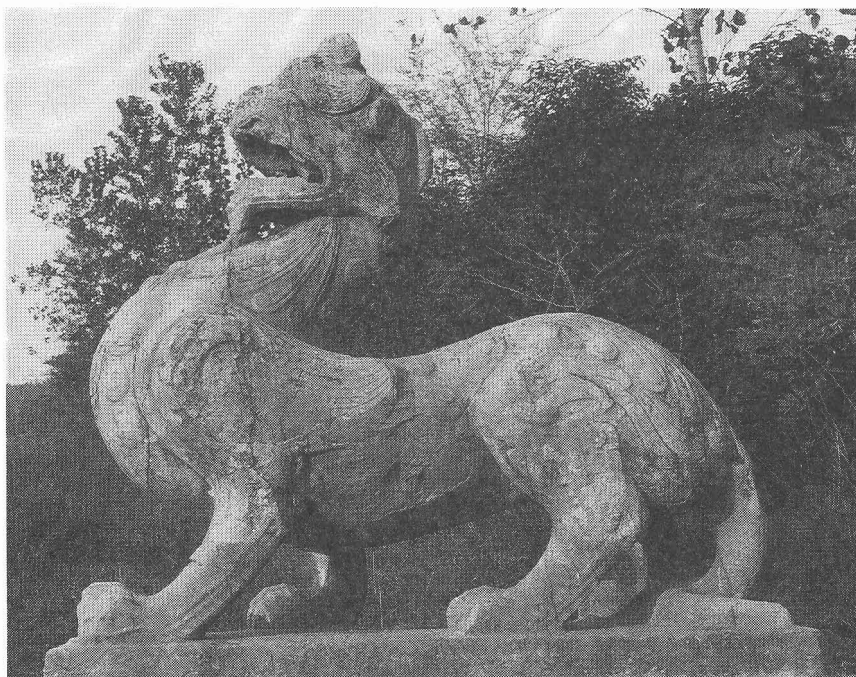
仙塘灣と金家村の帝陵は、上述のように今や石獸と墓の雙方の材料が揃っているので、墓葬形制と關連して石獸と墓の關係を概略みてみよう。先ず一九六五年に發掘された仙塘灣墓(圖10⁽⁴⁾)は、丹陽の東北十七km、經山支脈の水經山南の仙塘灣、俗に鶴仙塢と呼ばれる岡(海拔一〇〇m)の南麓に位置し(圖15⁽¹⁾)、岡の中腹、海拔七五mの地點に岩を鑿って坑を掘り、封門牆・甬道・墓室(圖42)などを磚で築いて、約二mから四mの封土を盛っていた。南朝陵墓の特質としてこの墓も例に漏れず排水に殊のほか氣を配り、山の斜面に墓を築いたのもその現れであるが、奥行九・四m、幅四・九mの墓室の中央部と四周に排水溝をめぐらして、集まった水は墓室の前と後の陰井口、そして甬道の下を通り、更に外の一九〇mもの排水溝を通じて下方の池(圖15⁽¹⁾)に流れ込む仕組みになっていた。そして更に下方の、ゆるいカーブを描いて墓から五一〇m離れた參道の入口に一對の麒麟石獸が置かれていたのである。この形式は仙塘灣墓の東南二・四kmの地點にあって一九六八年に發掘された建山金家村墓も同様で、黃泥山(海拔一六七・二m)の小高い山を背にした墓の前方二〇〇mの所に東西三〇m、南北二〇mの池があり、更に前方二〇〇mの所に一對の石獸(圖16⁽⁴⁾)が置かれ、石獸、池、墓室がほぼ一直線をなして幅八〇m程のゆるい谷間に參道がのびていた。吳家村墓も、石獸は見つからなかったが、發掘した墓の五〇〇m前方にやはり池があった。その他、



(1) 翼部 花瓣文

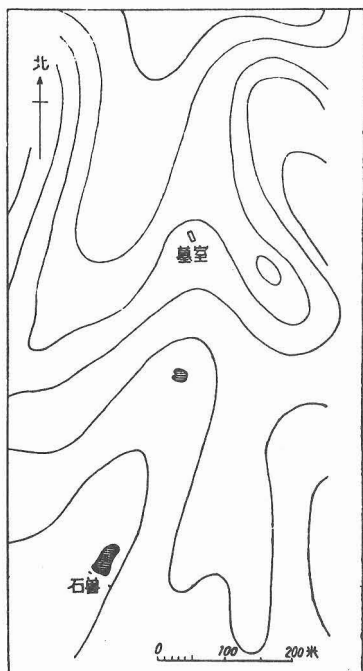


(2) 背面 雙角及び腰部



(3) 全身 體長 3.00m

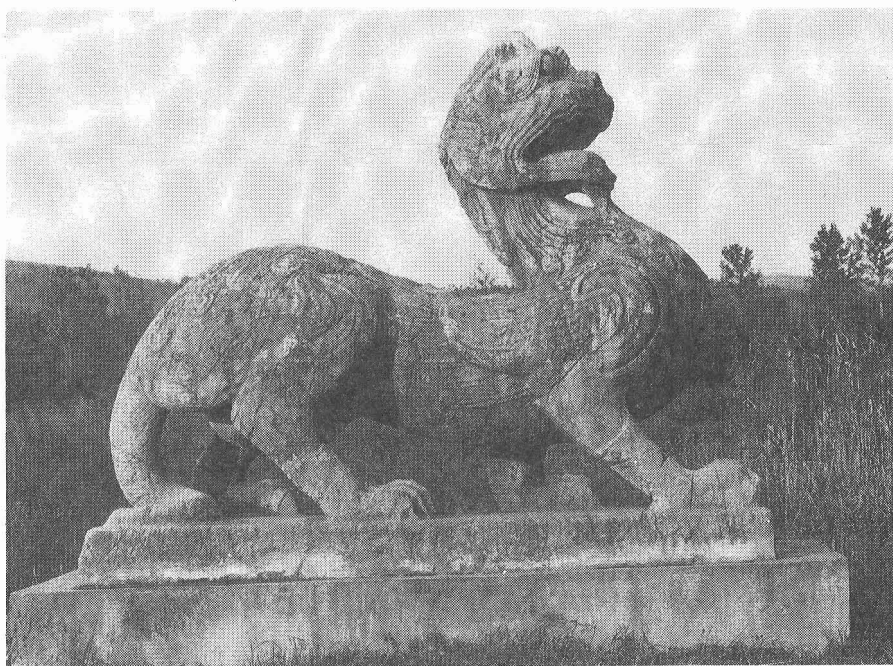
圖14 丹陽仙塘灣 左麒麟



(1) 帝陵地形圖



(2) 右麒麟背面



(3) 右麒麟全身 體長2.90m

圖15 丹陽仙塘灣 帝陵地形圖及び右麒麟

帝陵ではないが石獸と墓の雙方が確認されている南朝大墓としては、南京張家庫(南京石油化工廠東南)の梁桂陽王蕭融墓⁽⁴²⁾(五一卒、五〇二追封)と南京甘家巷の安成王蕭秀墓⁽⁴³⁾(五一八卒)の墓があり、墓と石獸の距離は兩者ともに約一〇〇〇mであった。南朝陵墓の參道はおおよそ四〇〇mから一〇〇〇mあったことになる。

さて、仙塘灣の石獸(圖14、15)は珍しく一對殆ど完全に保存されており、これまで獅子灣、前艾廟で缺けていた角もはっきりみられ、右麒麟の一角(圖15(2))は頭頂から頭に沿って後ろに稍や長く伸び、左麒麟の雙角(圖14(2))は半分壊れていたが、やはり後方に稍や長く伸びて途中で棒状のものが一本横に渡されていた。いまこの左麒麟を獅子灣の左麒麟と比較してみると、同じく胴長であるが、頭を極端に引いて少し上を向く代わりに胸を上向き加減に前に突き出している(圖14(1))のが特徴で、従って腹部はそれ程垂下がらず重心が少し高く作られている。またこれまで獅子灣、前艾廟の石獸は正面を向くか、斜め前を向いてもそれ程でなかったが、この石獸ははっきり斜め前を向くようになったのも大きな特徴で、胸を上向き加減に前に突き出したことと併せ、姿勢にかなり捻りが加えられ實に躍動的な感じがする。特に右麒麟(圖15(2))に著しいものがあり、その獍猛な性格は左右石獸ともに前に出した肢の先の鋭い瓜(圖14(3)、15(3))が小獸を掴んでいるところにも窺える。またこれまで體表の翼以外の表現といえば、先端を丸く卷いた矢のような長い毛だけであったが、腰部(圖14(2)、15(2))をみると新たに數本の線刻が施され小渦文も加えられている。その先端を丸く卷いた長い毛も、翼の後ろの脇腹では、右石獸(圖15(3))では上向きに卷いているが、左石獸(圖14(3))では下向きに卷き變化をつけている。仙塘灣以後の新傾向を示すものである。また羽根の付け根の所に鱗文に紛れて花瓣文様が一つ表され、右麒麟は五瓣、左麒麟は四瓣(圖14(1))に作られているが、この花瓣文様は獅子灣以來みられるもので、獅子灣の地に伏した右麒麟に四瓣、前艾廟の左麒麟に四瓣が認められ、更に金家村を含め齊帝陵の石獸に共通している。

次に金家村の石獸は、右麒麟(圖16)は良く保存されているが、左麒麟は下顎と三本の肢、尾が缺けるばかりか、全體に著しく風化が進んでいる。兩石獸とも基本的には仙塘灣の石獸の形を踏襲し、頭を引き上を向き胴長で重心が高いが、一層瘦せ

て小振りである。大きさは仙塘灣の左右麒麟の體長が三・〇〇mと二・九〇mであるのに對して、二・三八mと二・一三mである。羽根の付け根の四瓣の花瓣文様もより大きな割合を占め、肢が細く長く全體の重心がより高くなっていることから、仙塘灣の後とみなされよう。

では、仙塘灣墓と金家村墓はどの皇帝の陵に比定されるであろうか。この兩墓はそれぞれ丹陽縣城の東北十七km、十六kmの地點に位置しているが、『元和郡縣圖志』⁽⁴⁾卷二五によると齊陵のうち丹陽の東北の方角が記されているのは、「縣東北二十六里」の景帝蕭道生の修安陵と「縣東北二十四里」の明帝蕭鸞の興安陵である。蕭道生は蕭鸞の父に當たり、前廢帝蕭昭業（鬱林王）と後廢帝蕭昭文（海陵王）が相繼いで廢位された後、高帝蕭道成の甥に當たる蕭鸞が即位すると、父の始安定王蕭道生を追尊して景帝とするともに、改めて修安陵を造營して葬り、明帝蕭鸞自身は永泰元年（四九八）に興安陵に葬られたのである。仙塘灣と金家村の二陵はこの景帝の修安陵と明帝の興安陵に比定するのが妥當と考えられる。

これまで朱希祖・朱僕・羅宗眞・姚遷などの各氏⁽⁴⁵⁾は皆一様に仙塘灣を修安陵に當て、荆林三城巷の梁文帝建陵の南隣にある石獸（三城巷（1））を興安陵に當ててきたけれども、前者については良しとして、後者については地理的にも石獸の様式の點からも全く受入れ難い說である。後に詳述する通り、荆林三城巷は丹陽の東の方角に位置するばかりか、そこは梁の帝陵が南北に四基並んだ梁の帝陵區であり、その石獸も明らかに梁以後の様式を示しているからである。また金家村墓について、發掘報告書は明帝の次に即位し永元三年（五〇一）に廢位された廢帝蕭寶卷（東昏侯）の墓の可能性を指摘しているが、廢位された皇帝の場合は、後に鬱林王や海陵王の例をみる如く、「殯葬するに王禮をもつてし」（『南齊書』卷四 鬱林王紀）、帝陵のように有角の麒麟石獸を置かずに無角の鬣をもつた石獸を置いたものと考えられ、これまた受入れ難い說である。

ここで仙塘灣墓を修安陵、金家村墓を興安陵と比定する更なる根據は、この二つの陵はともに墓室で磚畫の「羽人戲虎圖」が發見されたが、町田章氏が指摘したように、その圖を詳しく觀察してみると圖柄が全く同じで同一の型（範）が使用されていたことである。そこから當然二つの陵が近い時期のものであることは勿論、同じ王朝内でも造營者が近い關係にあったこと

が推測されるが、この點で修安陵と興安陵は造營時期が最大限四年違うだけであり、また造營者は先にも述べたように修安陵は明帝蕭鸞、興安陵は明帝蕭鸞自身とその子の東昏侯蕭寶卷である。金家村の石獸が規模こそ小さくなったものの、仙塘灣の石獸の形を踏襲していたのもこれによって説明がつこう。また二基の陵は互いに2kmと離れているけれども、兩者の位置關係は一應父の修安陵が右、子の興安陵が左にきて、右を尙しとする法則とも矛盾しない。但しこれが正しいとすると、石獸のみならず墓室の大きさを比べても、修安陵が奥行九・四m、幅四・九m、これに對して興安陵が奥行八九四m、幅五・三mと、明帝の興安陵の方が小規模となるが、これは明帝の治世の晩期における大司馬王敬則の反亂⁽⁴⁹⁾や、惡童天子東昏侯の治世の紊亂⁽⁵⁰⁾を反映して、陵の造營に専念する餘裕が最早やなかったからと推測される。同様のことは金家村墓、即ち興安陵の墓室の磚畫「竹林七賢と榮啓期圖」にも窺え、後述するように本來の圖柄がかなり亂れていたばかりか、七賢と榮啓期の榜題人名を幾つか間違えるという帝陵としては有り得べからざる混亂をも引き起こしていたのである。

この「竹林七賢と榮啓期圖」の圖柄と榜題人名が更に混亂していたのが吳家村墓である。吳家村墓は丹陽の東北十五km、經山の西北に一基だけ離れて位置し、麒麟石獸こそ見つかっていないものの、發掘の結果、甬道の二重石門など帝陵の形式を備えていることがわかった。金家村墓の次の帝陵と考えられ、齊朝最後の和帝蕭寶融の恭安陵に比定されよう。和帝は中興二年⁽⁵¹⁾(五〇二)に梁王、即ち梁の武帝蕭衍に禪讓し、巴陵王とされて、姑熟(安徽省當塗)に宮して齊の正朔を行っていたが、その年十五歳で没し、齊の和帝と追尊されて恭安陵に葬られた。この吳家村墓の墓室⁽⁵²⁾圖78(5)は奥行八・二m、幅五・一九mと、仙塘灣はもとより金家村墓よりも小さく、また墓室の壁も本來は仙塘灣墓の如く四壁が外側に丸く膨らみ、全體として橢圓に近い形になる筈であるが、四隅を角取りしただけで八角形を呈し、倉卒になったことを物語っている。また磚畫の「羽人戲龍圖」⁽⁵³⁾「羽人戲虎圖」も仙塘灣、金家村墓のそれより線描が一層硬直化している。發掘報告書も恭安陵に當てているが、妥當と思われる。ところで、以上の齊帝陵として挙げた獅子灣・前艾廟・仙塘灣・金家村の石獸を見ると、ある表現形式が共通しているのに氣附く。それはどの石獸も左右の別なく陵の正面から見た場合、手前の前肢を前に出し奥の後肢を後ろに引いていることであ

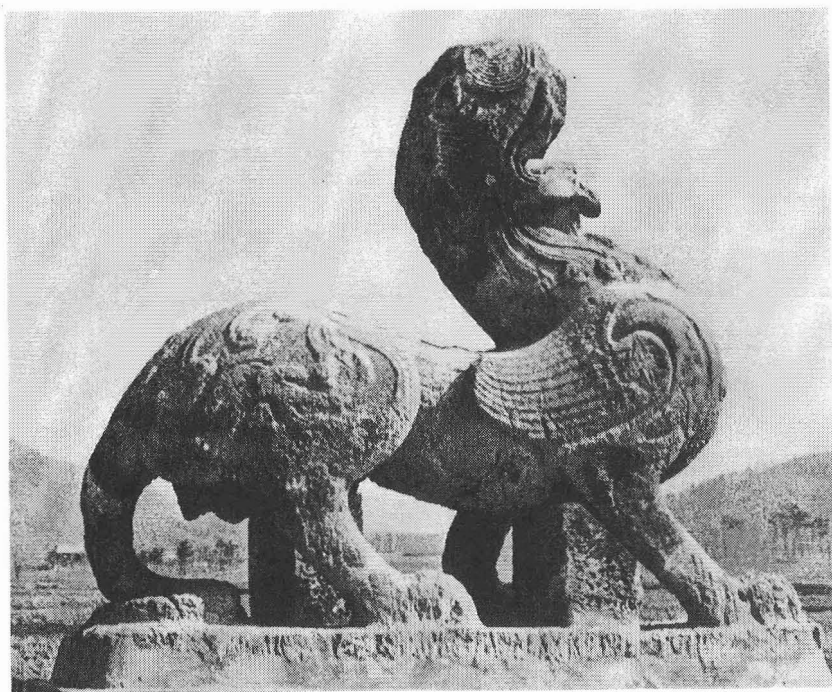


圖16 丹陽金家村 右麒麟 體長2.13m

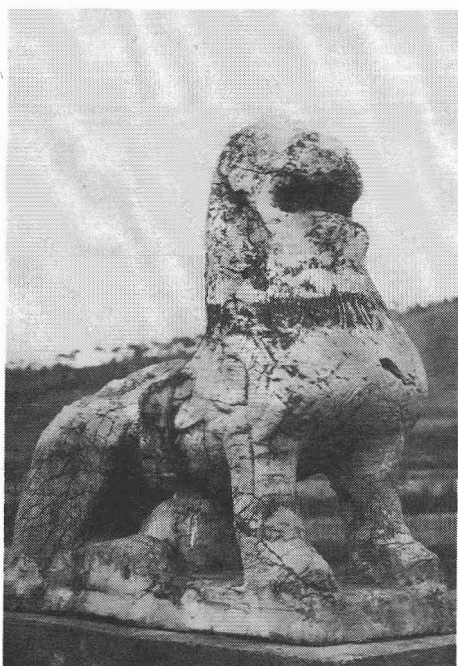


圖17 丹陽爛石壠 左石獸 體長1.58m



圖18 丹陽水經山村 左石獸 體長2.00m

る。例えば左右の石獸の揃っている仙塘灣(圖14、15)をみてもわかる通り、右石獸は右肢、左石獸は左肢を前に出しているのである。従って参拜者が陵の参道に進もうとすると、手前の前肢に邪魔される格好になるが、興味深いことに上述の宋の初寧陵石獸(圖2、3)や、この次に取上げる梁の帝陵石獸はこれと逆である。つまり宋や梁の帝陵の場合は、石獸は常に奥の前肢を前に出し、強いていえば参拜者を受入れる格好を示すのである。これはまさに王朝の墓葬形式に關わることであり、陵の比定にも重要なファクターになり得るものと考えられる。例えば従来齊明帝蕭鸞の興安陵とされてきた三城巷(1)の石獸は、上述の如く今回齊帝陵から外したが、それはこの形式に照らしても奥の前肢を前に出して梁以後の形式を示しているからである。また齊の石獸はその他の點でも宋の石獸に對して獨自の表現方法を示している。例えば宋の初寧陵石獸の胸に垂れた顎髭(圖2(2))はそのまま左右に三本ずつ分かれて下方に伸びていたが、齊の諸陵石獸の顎髭(圖12(2)、13(2))は胸に垂れるや二つに分かれて先端を巻き、その下から顎髭とは別個に毛が左右に三本ずつ分かれて伸びているといった具合である。そしてこの場合も次の梁が繼承するのは宋の表現方法なのである。

(三) 爛石壠・水經山村

經山(一名金牛山³³)の東南五里に位置し、經山の支脈に當たる水經山の東北麓の建山鄉爛石壠と埤城鎮水經山村には、これまでみてきた有角の麒麟石獸とは異なり無角で鬣をもった小型の獅子型石獸が置かれている。ともに墓は東向きで、爛石壠の場合は右側石獸は碎けてしまったが、左側石獸(圖17)は風化しているものの保存状態は良好である。大きさは體長一・五八m、高さ一・五四mで、前肢を立てて坐る蹲踞の狀に作られ、頭を稍や上げ口を開けて舌を垂らし、頭頂から肩にかけては鬣でおおわれ、兩肩には翼をつけている。そして奇妙にも方形の太い尾は上方に伸びて、背に沿うように肩のあたりまで達している。鬣が生えているところから明らかに獅子を意識した造形と思われる。また水經山村の場合は左右とも比較的よくのこ

り、やはり獅子型であるが、こちらは手前の前肢を前に出して歩行の様に作り、口を開いて舌を垂らし、これまでの麒麟石獸と同じく胸を前に突き出し腰を上げている。大きさは左右獸(圖18)が體長一九八五m、高さ一九五四m、左右獸が體長二・〇〇m、高さ一・五mである。小型の石獸の割に胸が厚く幅廣いが、肢がよく伸びて重心もそれなりに高く、體が引き締まって末端まで活力に溢れている。經山の周りにあること、手前の前肢を前に出す上述の南齊形式と併せ、爛石壠とともに齊の石獸とみなしてよいものと思われる。

この爛石壠と水經山村の石獸については、從來から朱希祖や朱倅⁵⁴によって前廢帝蕭昭業と後廢帝蕭昭文の墓の石獸ではないかと考えられてきた。兩廢帝はそれぞれ文惠太子蕭長懋の長子と第二子に當たり、前者は祖父の武帝の後を繼いで永明十一年(四九三)に即位したが、皇帝らしからぬ亂行の擧げ句、身の危険を感じた蕭鸞(後の明帝)の手先によって殺されて、鬱林王に降封され、次いで延興元年(四九四)に即位した後者も、僅か三箇月で廢位されて海陵王に降封された。そして『南齊書』鬱林王紀⁵⁵によるに「殯葬は王禮をもつてす」とあるように、この兩者は帝陵形式ではなく王墓形式で葬られたことが明らかであり、そこで有角の麒麟でない無角の獅子型の二つの墓の石獸が鬱林王、海陵王の墓に比定されたのである。他に廢位された皇帝としては東昏侯蕭寶卷(四九九—五〇一在位)がおり、その墓も丹陽にあったことは『梁書』卷五五、豫章王綜傳⁵⁶などにより明かで、石獸は獅子型に作られたと考えられる。しかし爛石壠と水經山村の石獸はともに水經山の東北麓の互いに近い位置に並んで存在し、被葬者は互いに近親關係にあったものと推測され、根據に乏しいけれども一應從來通り鬱林王と海陵王の兄弟の墓に比定しておく。恐らく右側の爛石壠の石獸が兄の鬱林王墓、左側の水經山村の石獸が弟の海陵王墓であろう。この邊一帶は水經山の裏側に當たり、經山の南側の趙家灣・獅子灣・仙塘灣などに比べると暗い感じを受けるが、それも水經山村石獸の翼の先が下を向いていたことなどと併せ、廢位された王墓の故と考えられよう。それはともかく王の墓の石獸獅子型に作ることは次の梁代に頻繁に行われて、上述の安成康王蕭秀の墓など南京甘家巷周邊にたくさん見受けられるが、これらはその先蹤をなすものといえる。

因みに鬱林王と海陵王の父である文惠太子蕭長懋、その弟の竟陵文宣王蕭子良、その叔父の豫章文獻王蕭嶷の墓も經山の周圍にあった筈である。『南齊書』卷四十、竟陵文宣王子良傳によると、

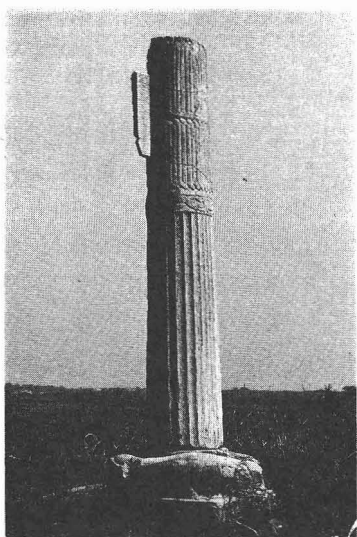
初、豫章王嶷葬金牛山、文惠太子葬夾石、子良臨送、望祖礪山、悲感嘆曰、北瞻吾叔、前望吾兄、死而有知、請葬茲地。既薨、遂葬焉

とある。豫章王の葬られた金牛山⁽⁵⁷⁾とは、『乾隆丹陽縣志』によれば經山のことであり、『南史』卷六、梁武帝紀に、武帝の父の蕭順之が、嘗て族兄の齊高帝蕭道成と一緒に登り、初めて蕭道成に大志あるを知ったと記す山である。文宣王が自ら請うて死後に葬られた祖礪山の邊りから豫章王の葬られた金牛山、そして文惠太子の葬られた夾石が望めたところから、三人の墓はともに經山の周圍にあったことがわかる。⁽⁵⁹⁾但し齊代のこれらの王墓にも獅子型の石獸が置かれたかどうかは不明である。

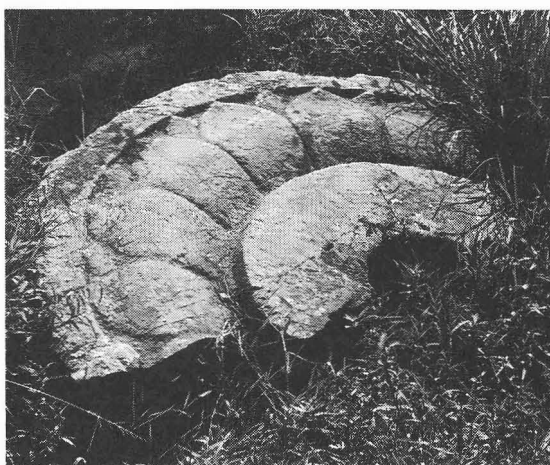
三 梁帝陵の石獸

(一) 三城巷 (2)

丹陽の經山の南方、平野の廣がる荆林三城巷(圖10)には東向きの四基の陵の石獸が南北に並んでいる。最も南に位置する三城巷(1)の石獸が、從來齊明帝蕭鸞の興安陵に比定されてきたものであり、その北六十mに位置する三城巷(2)の石獸が梁の文帝蕭順之の建陵のものである。そして更に建陵の北約三六〇mに三城巷(3)の石獸が一體あり、更に六十m北に三城巷(4)の石獸が一體壊れて置かれている。經山を圍むように配された上述の齊帝陵の石獸に對して、平地にあるこの四基の陵の石獸が一つの纏まりを有していることは當然推測されるところである。丹陽にはもう一つ三城巷の眞南の陵口に小運河を挟んで兩岸に一對の石獸が置かれており、これも四基の陵と關係があると考えられる。



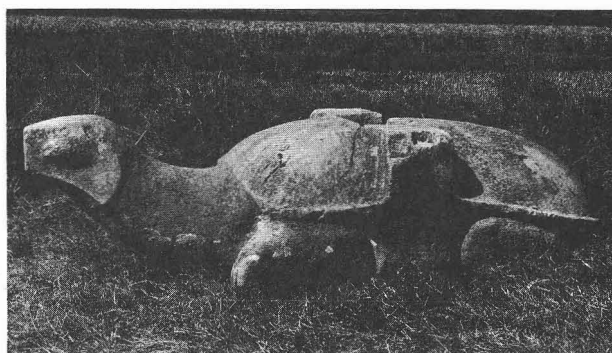
(1) 右神道柱



(2) 左神道柱蓮華文円盤



(3) 左神道柱方形基臺側面浮彫畏獸



(4) 左石碑龜趺

圖19 丹陽三城巷 (2) 石刻

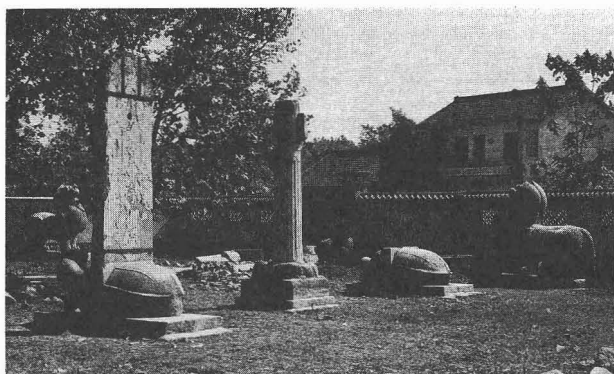


圖20 南京甘家巷蕭秀墓 右側石刻配置



圖21 南京甘家巷蕭景墓 右神道柱

さて、三城巷(2)の石獸は確實に梁武帝の父、文帝蕭順之の建陵のものである。ここは例外的に保存が良く、左右一對の石獸以外にも幾つかの石刻がのこっている。先ず一番手前に左右に十六m隔てて一對の石獸があり、その奥に左右相稱の形で方形の石基臺、神道石柱、龜趺と続く。方形基臺上に何が立っていたか不明であるが、周りにT字型のほぞがある。また神道柱は左右雙方とも基臺がのこっているけれども、上の圓柱がのこるのは右側(圖19(1))だけで、圓柱は表面に瓜稜直文が施され、上方の二箇所に繩索文が巻いて、下のそれには更に交龍文が伴っている。元來この神道柱には上に「太祖文皇帝之神道」と、左側(圖4)は正書、右側は反書で刻された方形石額があったけれども、現在は左右とも丹陽縣文化館に保管されている。この石額銘によって梁文帝の建陵であることが確實に知られたのである。また神道柱の頂きには蓮華を象った圓形の盤があり、その上には小型石獸がのっていた筈であるが、現在はともに落ちて地上に蓮華圓盤の破片(圖19(2))などが散らばっている。また神道柱の基臺は下が方形、上が圓形に作られ、下の方形基臺の四側面には各々上半身裸で尾をもった畏獸(圖19(3))が四體ずつ浮彫りされ、上の圓形臺座は珠を銜えた有角、四足の螭が一對左右に向合った形で彫られている。最後に一番奥の龜趺は左側(圖19(4))が完全にのこって右側は頭を缺くが、その上にのこっていた碑は現在どこにも見當らない。

このように不完全ながらも石獸以外の石刻がのこるのは、帝陵ではこの三城巷(2)だけであるが、梁代の王侯の墓には屢ばのこっており参考になろう。例えば南京甘家巷の蕭秀墓(五一八卒)では手前から左右相稱に獅子型石獸・龜趺石碑・雙螭座神道柱、龜趺石碑という配置(圖20)である。神道柱はやはり瓜稜直文を施し、石額に「梁故參騎常侍司空安成康王之□」と刻して、上端には今は落ちてゐるが小獸をのせた圓盤を置いていた。石碑が片側二基ずつ合計四基置かれてゐるけれども、これは異例で、『南史』卷五二、安成康王秀傳⁽⁶¹⁾によれば、蕭秀が亡くなると、佐史の夏侯亶等が表して墓碑を立てることを求めたところ、武帝が許可した。そこで當時蕭秀の門に遊んだ高才、王僧孺・陸倕・劉孝綽・裴子野が文を作り、その中から選ばうとしたが、皆實錄を稱されたので四碑立てたという。通常は南京仙鶴門外の蕭宏墓⁽⁶²⁾(五二六卒)のように左右二碑と思われる。また同じ甘家巷の蕭景墓(五二三卒)には額銘に「梁故侍中撫將軍開府儀同三司吳平忠侯蕭公之神道」と反書し、圓盤



(1) 左麒麟 體長3.10m



(2) 右麒麟 體長3.05m

圖22 丹陽三城巷 (2) 麒麟

と小獸をのせた保存完好な右神道柱(圖21)がある。しかしこれらに照らしても建陵の方形基臺の上にのっていたものが何であるかは不明である。

さて、建陵の石獸(圖22)は左右とも四肢を失う他、角と尾を缺き、左側は更に頭部の前半分を缺いて、補強石材の上のっている。大きさは右麒麟の體長が三・〇五m、左麒麟が體長三・一〇mである。より保存の良い右麒麟(圖22(2))をみると、基本的には齊帝陵の石獸の形を引き継いでいるが、頭部の引き方、胸の突き出し方、腰の上げ方、全てにおいて前代の仙塘灣や金家村のそれと比べおとなしくなって、躍動感が減じ、且つ頭部が小さく胴が長くなって、一種閒延びた感じがしないでもない。また左右の翼、或いは頸部、脇腹、腰部における矢のように長い毛の表現も寫實性をより減じて、裝飾的な處理が施され文様として體から遊離する傾向が出てきつつある。また羽根の附け根の四瓣の花瓣も確かに認められるが、頗る端正な文様に變わっている。

このように梁の最初の石獸として建陵石獸には新しい動きが看取されるけれども、先に指摘した前肢の出し方(圖22(2))についていえば、なお手前の前肢を前に出す齊の形式を採用しているのは注目される。これは建陵が梁王朝成立後間もない時に造營されたことに起因するものと思われる。即ち天監元年(五〇二)、齊の和帝から禪讓を受けて梁の武帝蕭衍が即位すると、既に亡くなっていた父の蕭順之を追尊して文皇帝とし、亡き母の獻皇后張氏とともに新たに築いた建陵に合葬した⁽⁶³⁾のである。

その場所は、『梁書』太祖張皇后傳⁽⁶⁴⁾に、宋泰始七年(四七一)に母の張氏が秣陵縣同夏里の宿舍で亡くなり、武進縣東城里山に葬ったという東城里山と思われ、これは建陵の地を東城村と稱する(『乾隆丹陽縣志』卷一九)如く、現在の建陵の地と合致する。蕭順之の元の墓は不明であるが、母の墓のあった同じ地に造營し直し合葬して建陵と稱したのである。因みに武帝自身⁽⁶⁵⁾の妻である郗氏も永元元年(四九九)に襄陽の官舎で亡くなって故郷の武進縣東城里山に歸葬されたが、武帝が即位すると郗皇后と追尊され陵を修陵と稱した。

では、嚴密に建陵石獸の制作時期はいつかというに、やはり天監元年頃とするのが妥當であらう。『梁書』武帝記⁽⁶⁶⁾によると、

天監七年（五〇八）に建陵・修陵の周圍五里内に居住民を返して、陵監の名を陵令に改めたとあるが、これは建陵・修陵の管理を改めて見直したことを意味し、この時には既に建陵の態勢は整っていたと思われる。そして大同十年（五四四）三月には、後述するように武帝による建陵、修陵への謁陵⁽⁶⁷⁾が大々的に行われ、中大同元年（五四六）正月には、建陵の「隧口の石麒麟」（『梁書』武帝紀）が動き、大蛇が隧中で闘ってそのうちの一匹が逃げるといふ事件があったのである。一方、建陵の神道柱や龜趺を梁の諸王侯墓のそれと比べると、蕭秀墓（五一八卒）の神道柱臺座の雙螭、基臺の側面の畏獸よりも素朴な様式を示し、龜趺も蕭秀墓（圖5）、蕭宏墓（五二六卒）へと龜の甲羅が次第にうず高くなる手前の段階を示しているのである。いずれにしても建陵の石獸が制作されたのは梁王朝初年のことであり、そのために未だ独自の帝陵プランをもたなかった梁朝は齊のプランをそのまま採用して建陵の石獸を作ったのである。

(二) 三城巷(3)・三城巷(4)

建陵の北約三六〇mに位置する三城巷(3)には、保存の完好な雙角の左麒麟（圖23）が一體だけ置かれている。體長三一五m、高さ二・一八mで、建陵の石獸とほぼ同じ大きさであるけれども、形式と形は相當異なっている。形式は手前の前肢を後ろに引いて奥の前肢を前に出す方式をとり、齊帝陵や建陵のそれとは逆である。また形は齊帝陵や建陵のどちらかといえば虎に近い體型から獅子に近い體型へと成り變わっている。即ち頭部（圖24）が横に幅廣く大きくなつて首が短くなり、胴の長さも短めで、四肢は太く頑丈に作られ、そのうえ前肢の肘には長毛（圖23(3)）があり三角形をしている。獅子の形が意識されていることは明瞭で、特に肘の長毛は獅子に特有のもので、宋の初寧陵石獸にはあったが、齊帝陵石獸には全くみられなかったものである。また細部をみると、二本の角（圖23(2)）は後頭部まで伸びて途中に短いとげ狀の突起が出、顎の下に垂れ



(1) 全身 體長 3.10m



(2) 雙角



(3) 翼部 長毛

圖23 丹陽三城巷 (3) 左麒麟

る髭(圖24)は、齊帝陵では胸部に左右に三本ずつ分かれて伸びる毛とは別々であったけれども、ここでは一緒になってしまいい六本の毛が髭の延長として表されている。つまり宋の初寧陵の方式である。また翼の前部(圖23 (3))はこれまで躍動的に大きく彎曲して三日月形を描いていたけれども、ここでは陰刻で渦巻を中心に描いて、その末端の毛をやはり陰刻で表現するだけであり、羽根の後ろに矢のように平行に伸びていた長い毛もはやみられず、腰部にあった長い毛とともに淺浮彫りの巻き毛に變わっている。しかし動物としての骨格は實によく把握されて、各部の表現にメリハリが感じられる。要するに齊帝陵の石獸のように頭から首、胴、腰に至る一貫した動勢が追求されるのではなく、頭と胴以下は別々の部分であって連續せず、寧ろ靜止した際の姿勢が追求されている。従つて躍動感には缺けるが、重心低く腰を落としてどっしり構えた姿勢には、確かに獅子の如く堂々と威風あたりを拂うものが感じられるのである。

この三城巷(3)の石獸については、梁の武帝蕭衍の修陵のものと認めてよいと思われる。修陵は先にも述べた如く、武帝が即位すると既に亡くなつていた妻の郗氏を追尊して郗皇后として營んだ陵であるが、太清三年(五四九)、武帝自身も侯景の亂によって幽閉されたまま餓死同然に亡くなると、夫婦合葬墓の形式をとつてこの修陵に葬られたのである。『南史』卷七、梁本紀には、大同十年(五四四)に武帝が蘭陵(丹陽)に行幸して建陵と修陵に謁陵した有様が次の如く記されている。

三月甲午、幸蘭陵。庚子、謁建陵、有紫雲蔭陵上、食頃乃散。帝望陵流涕、所霑草皆變色。陵傍有枯泉、至是而流水香潔。辛丑、哭于脩陵。壬寅、於皇基寺設法會、詔賜蘭陵老少位一階、并加頒賚。所經縣邑、無出今年租賦。因賦還舊鄉詩。癸卯、詔園陵職司、恭事勤勞、並錫位一階、并加賜賚。己酉、幸京口城北固樓、因改名北顧。

この謁陵については、『梁書』卷三、武帝紀に載せる同年三月壬寅の詔に、「朕桑梓を違えてより五十餘載、即ち眷みて東顧するに日として思わざるなし。(略)始めて園陵を展敬するを獲、但だ感慟を増す」とあり、五十餘年ぶりの歸郷であり、即位後四十三年にして始めての謁陵であった。最初に父文帝と母獻皇后の建陵に詣で、その八日後に妻郗皇后の修陵に詣で哭した。それから皇基寺で法會を設けて、「還舊鄉詩」を賦し、蘭陵の老若や陵園の官吏に位一階を賜った後、京口(鎮江)に向か

ったのである。皇基寺は『乾隆丹陽縣志』⁽⁶⁹⁾によると皇業寺のことで、丹陽縣の東二十五里、蕭塘港の北に位置して、修陵はその前にあったと述べ、解放前に皇業寺を調査した朱俔⁽⁷⁰⁾は修陵から半里にも満たない所にあるという。これらによって建陵、修陵、皇基寺が互いに極く近い所にあったことがわかり、三城巷（3）を武帝の修陵に當てるのは妥當と考えられる。また上述した墓葬形制における右を尙ぶ考え方に照らしても、武帝の修陵が父文帝の建陵のすぐ左側に位置するのは當然のことであり、この點からも修陵に比定するのが妥當である。

では、この修陵の石獸の制作時期はいつ頃であろうか。武帝は太清三年（五四九）に八十六歳で亡くなったが、これより先、北魏、東魏の武將であった侯景⁽⁷¹⁾が高歡の後を繼いだ高澄との對立から梁に降り、太清二年（五四八）八月、今度は梁の武帝に對して壽春で叛亂軍を決起すると、軍は忽ち揚子江を渡って都の建康に迫り、翌年三月、遂に臺城を陥落させた。その結果、武帝⁽⁷²⁾は幽閉の身になって五月に淨居殿において餓死同然に崩じ、齊の武帝蕭蹟のように陵を別に築くこともなく十一月に郗皇后の修陵に合葬された。武帝の在位は四十八年にも及んだので、石獸の成った年が在位中のいつ頃かは重要な問題であるが、やはり神道柱などの他の石刻とともに武帝の死後と考えるのが妥當であろう。武帝が葬られる以前の修陵は、墓自體はあらかじめ武帝との合葬に備えて設備は出来ていたにしても、あくまでそれは郗皇后の墓であり、たとえ陵と稱しても、皇后の墓の參道に有角の麒麟石獸を置いたということは考え難いからである。また上述の如く、中大同元年（五四六）に隣の建陵の「石麒麟」が動き舞う⁽⁷³⁾という事件があり、後に『隋書』五行志などによって侯景の亂の前兆とされたけれども、この時に修陵の石獸は全く話題に上っていないからである。そしていま一つの理由は、この石獸は確かに英邁な武帝にふさわしく格別の威風を備えているけれども、規模は建陵などと全く同じで特別に大きく作られることもなく、寧ろつましい印象すら與えるからである。武帝の在世中、特に侯景の亂以前であれば、弟に當たる南京甘家巷の蕭景の墓の石獸（圖25 體長三・八〇m）や句容縣石獅村の蕭績の墓の石獸（體長三・八五m）よりも、麒麟と獅子と形式が違うとはいえ、更に大型に作った筈である。従って現在の修陵の石獸は、武帝の死後直ちに即位した簡文帝⁽⁷⁴⁾によって作られたものであり、依然として侯景の制壓下にあったた



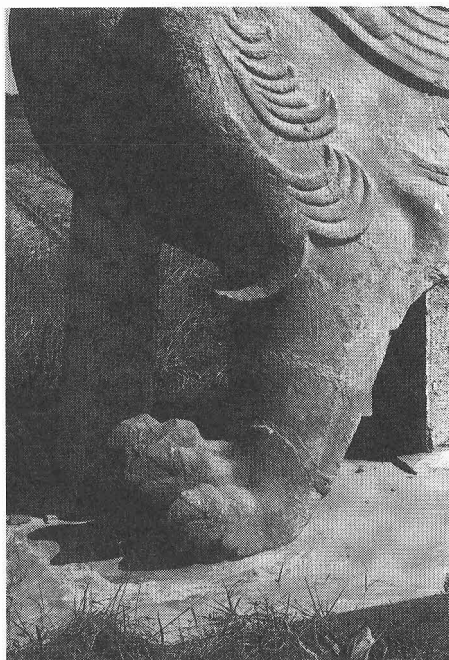
圖24 丹陽三城巷(3) 左麒麟頭部・胸部



圖25 南京甘家巷蕭景墓 左石獸 體長 3.80m



(1) 前軀 高3.16m



(2) 左前肢

圖26 丹陽三城巷(4) 右麒麟

めにこのような規模に作られたと考えるのである。

また石獸がはっきり獅子を意識して作られたのも武帝の考え方と関係があるろう。武帝が希代の佛教篤信者であったことは周知の如くであり、特に在位中に四回も同泰寺に行幸して捨身を行ったことは有名である。一方、獅子は、佛を人中の獅子に譬えてその説法を獅子吼と稱したり、石佛や金銅佛の佛像の左右には必ず獅子が一対配されて守護するなど、佛教と密接な關係にあることは言うまでもないことである。そこで武帝自身も獅子を好んだとみえ、捨身して同泰寺に講筵を開き『金字三慧經』などを講じたりした時には「師子座」に坐した⁽⁷⁵⁾という。また波斯國から獅子を献上された時には、博聞強記の劉顯に獅子の色について尋ねるなど、⁽⁷⁶⁾格別の興味をもっていたと考えられる。恐らく武帝の佛教信仰と關連して陵の石獸に獅子型が採用されたのである。いずれにしても修陵の石獸は明確な構想の下に個性的に作られて、武帝に對する特別な配慮を看取することが出來、武帝の崩後直ちに即位し佛教にも理解の深かった簡文帝の意圖が感じられよう。

次に三城巷(4)の石獸は、右石獸(圖26)のみ、しかも胴の半ばで切斷されて前軀のみのこっている。大きさは高さが三一六mで、開いた口は牙のように尖った齒が生え、左前肢の五本の爪(圖26(2))が上を向いているのが目立つが、頭頂に瘤のように大きく作られた一角はそこで折れている。全體に隣の修陵の石獸を受け繼いでいることは明かであり、右石獸として奥の左肢を前に出す形式をとり、頭部が大きくて首は極端に短く、前肢の肘の部分には同じく三角形に長毛が表され、胸部の長い毛も髭の延長として表されている。また翼の表現をみると、羽根の附け根の鱗文は凸狀になって數が少なくなり、その前部二箇所では毛がはね上がっている。全ての面で表現が大袈裟になっているのが特徴で、眼とその上瞼が突出し、口も必要以上に大きく開けられ、翼と毛も文様化すると同時に動きが強調され過ぎている。従って騒々しい印象もなくはなく、恐らく入念に作られたものではなからう。

この石獸も從來通り簡文帝蕭綱の莊陵に當てられる。蕭綱は、太清三年(五四九)に武帝が崩じた後、直ちに武帝の第三子

として侯景の衛兵が固める中で即位したが、大寶二年（五五二）八月、侯景に突然廢位を告げられて永福省に幽閉され、その年十月に四十九歳で崩じた。⁽⁷⁷⁾この時、侯景は明皇帝という諡號、高宗という廟號を贈ったが、翌大寶三年三月、王僧辯等が侯景を平らげると、次の元帝蕭繹は蕭綱を追崇して諡號を簡文皇帝、廟號を太宗とし、四月にかねてより簡皇后の埋葬されていた莊陵に葬ったのである。簡皇后は太清三年に亡くなり、簡文帝が大寶元年に即位すると莊陵に葬られたが、この時、簡文帝は「今營むところの莊陵、務めて約儉を存て」と詔している。⁽⁷⁸⁾それはともかく、上述の如く、この三城巷（4）の石獸は修陵の石獸より後の様式を示しており、また修陵の石獸の左側に位置し、父子の墓の尊卑の位置關係も當を得ている。そして『太平寰宇記』卷八九によると、

梁簡文帝陵有麒麟、碑尙存、陵有港、名曰蕭港、直上陵口大河、去縣二十五里

とある。即ち麒麟石獸の他に碑もあったことが知れるが、傍らに蕭港もしくは蕭塘港（『乾隆丹陽縣志』）と呼ばれる船着き場があり、そこは運河を陵口の所で蕭塘河（現蕭梁河）に入りまっすぐ北上した所にあったというのである。確かに三城巷（4）の石獸は、蕭塘河を挟んで兩岸に大型石獸の置かれている陵口と呼ばれる地の眞北に位置し（圖10）、現在なお蕭塘河が北へと伸びている。南京から丹陽へ水運を利用して謁陵した際には、運河づたいに陵口まで來、そこからこの蕭塘河に入ったのである。いずれにしても三城巷（4）は地理的にみても莊陵に比定して問題はなく、三城巷には文帝蕭順之、武帝蕭衍、簡文帝蕭綱と、梁の三代皇帝の陵が南から北へと東向き一列に並んでいたのである。

三 陵口・三城巷（1）

上述の如く荆林三城巷の南、丹陽陵口鎮の東〇・五kmの陵口には、蕭塘河、即ち現在蕭梁河と呼ばれる河を挟んで東西兩岸に一對の有角大型石獸が置かれている。但し現在の場所は元の場所ではなく、一九六五年に運河を擴幅した時に石獸を北に四

五〇m移動し、一九七七年、蕭梁河を浚渫した時に西に七〇m移動した。⁽⁸⁰⁾元來は鎮江から丹陽の市街を通って蘇州、杭州へと東南に伸びる大運河（江南運河）と、北上して三城巷に至る蕭梁河とが交わる地點（圖10）にあって、蕭梁河の方の左右兩岸に置かれていたのである。従ってこの石獸は他の石獸と違い特定の陵の參道に設置されたものではなく、背後に造營された幾つかの陵の陵區全體に對してその入口に設置されたものである。

當時は都の建康から丹陽へ謁陵する際には水路が利用され、それについて『輿地志』⁽⁸¹⁾（『乾隆丹陽縣志』所引）は次のように述べる。

泰安陵・景安陵・興安陵在故蘭陵東北金牛山、其中邱墟、西爲齊梁二代陵、陵口有大石麒麟辟邪來道、埽戶守之。四時公卿行陵、自方山下乘舴艋、經此入蘭陵、升安車以至陵所、舊跡猶在。

即ち若干意味の通じない箇所があるが、齊の高帝泰安陵、武帝景安陵、明帝興安陵は丹陽の東北金牛山（經山）にあって、あたりの丘陵は齊・梁二代の陵區をなしているが、入口の陵口には辟邪の麒麟石獸が置かれて道を挟み、墓守が警護している。そして四季折々の貴族の上陵の際には、南京から秦淮河を南に遡って方山に至り、そこで舴艋に乗り換えて運河を東へ進み、丹陽に至るや陵口を経て陵區に入り、船を降りて安車で目指す陵に到達したというのである。江寧方山と丹陽の間を東西に結ぶ運河は破崗瀆といい、破崗瀆は三國吳の孫皓が校尉陳勲に屯田兵三萬を發して造らせたもので、句陽の中道を鑿って江寧から丹陽へと水運を通じ、これによって都の建鄴と吳・會稽は危険な揚子江によらずとも、しかも短距離で往來することが出来るようになった。そして江寧側の入口が方山（圖1）で、秦淮河をせきとめて造った方山埭から東へ、途中の崗嶺を十四の埭で乗り越えて丹陽に至ったのである。『南齊書』卷三一、荀伯玉傳⁽⁸³⁾には、高帝の建元元年（四七九）、時の皇太子であった武帝蕭賾が丹陽での拜陵より歸還した時、「方山に至り、日暮れてまさに泊まらんとす」とあり、またこの歸還の際に、側近く仕えた張景眞が「白服きて畫ける舴艋に乗って胡床に坐し」、皇太子にも紛う僭倖な行爲をとらせたことで高帝の激怒を買うという一幕もあった。また葬送の際にも當然水運が利用され、『南史』卷四、齊本紀、高帝の條には、

(建元四年三月 四八二) 壬戌、皇帝崩于臨光殿、年五十六。羣臣上諡曰高皇帝、廟號太祖。梓宮於東府前渚升龍舟。四月丙午、葬於武進泰安陵、於龍舟卒哭、内外反吉

とある。即ち崩御した高帝の梓宮を龍舟に載せて武進(丹陽)にまで運び、泰安陵に葬った後、龍舟において不定時の哭を終え、内と外も吉にかえたというのである。⁽⁸⁴⁾

さて、陵口の一対石獸はともに四肢と尾を缺いているが、右一角石獸(圖27(1))が體長三・九五m、左雙角石獸(圖27(2))が體長四mある如く、これまでみてきた他の麒麟石獸が二mから三m内外であるのに對して特別に大型に作られている。先ず全體からみると、右石獸は四肢が缺けているものの奥の左前肢を前に出しているのがわかり、また左右ともに頭部が大きく首が短く、前肢の肘の部分には三角形の長毛(圖27(3))が表されて明らかに獅子型に作られており、武帝の修陵でみた石獸の形式と形に従っているのが看取される。そして頭・頸・胸の三部に齊陵のようなS字狀の躍動的かつ流麗な運動表現が志向されていないのは修陵と同様であるが、ただ修陵のように骨格が正しく把握されていないために、胴を経て腰に至る動きにはぎこちなさを感じられる。また文様のウェイトが大きくなるつつあるのが陵口石獸の特色であり、胸部に垂れ下がり左右に分かれた鬚、翼とその前部のはね上がった毛(圖27(3))、そして三角形の長毛は大きく文様化して表現され、しかも文様として胴體から遊離獨立する傾向にあるのが看取される。例えば腰部の體毛(圖27(1))も雲氣文のように著しく裝飾化している。

では、陵口の石獸の制作時期はいつ頃であろうか。この石獸については、丹陽が齊と梁の王朝の帝陵區をなし、陵區の入口たる陵口は齊にも梁にもあった筈なので、齊代と梁代ともに可能性があるが、從來より制作年代は勿論のこと、齊代か梁代かすら明言することは避けられてきた。⁽⁸⁵⁾ 文獻によれば、齊の時代にも確かに陵口があったことがわかる。『南齊書』卷二六、王敬則傳には、

(王) 敬則至武進陵口、慟哭乘肩輿而前

とある。つまり明帝の永泰元年(四九八)に大司馬の王敬則が反亂を起した時のことであるが、王敬則⁽⁸⁶⁾は高帝・武帝の舊將を

中心に兵を挙げ、晉陵（丹陽）に進軍し武進陵口に至った。丹陽は當時武進といったので齊の帝陵は武進陵と呼ばれ、そしてその陵口に至るや、嘗ての主君である高帝や武帝を偲んで慟哭した後、肩輿に乗って進軍したというのである。このように齊代にも確かに陵口という場所があり、その場所が現在（一九五六以前）の陵口と一致するか否かは不詳であるが、少なくとも現在の陵口、即ち蕭梁河を挟んで兩岸に石獸の置かれた陵口は梁の時代には機能したものだと思われる。というのは蕭梁河は前述の如く陵口からまっすぐに北上して三城巷（4）の梁簡文帝莊陵の傍らの蕭港を通っており、運河から入って三城巷の梁の諸帝陵に上陵するために都合の良い水運をなしていたからである。もし丹陽東北の經山周圍の齊帝陵のための水運としても機能したとすれば、當時は更に奥まで伸びていたであろう。いずれにしても現在の陵口の一対石獸は梁代のものであり、事實先に検討したように形式、様式の兩面からみても梁武帝の修陵以後の制作を示していたのである。

これと關連して更に制作時期を詰めるならば、大清三年（五四九）の武帝の修陵造營以後、簡文帝の莊陵が造營された前後の時期が考えられよう。上記の如く、簡文帝は大寶二年（五五一）に崩じ、翌年莊陵に葬られたが、『梁書』卷四、簡文帝紀はその間の事情を述べて次のようにいう。

（大寶二年十月壬寅）於是太宗崩於永福省、時年四十九。賊僞諡曰明皇帝、廟稱高宗。明年、三月己丑、王僧辯率前百官奉梓宮升朝堂、世祖追崇爲簡文皇帝、廟曰太宗。四月乙丑、葬莊陵。

即ち簡文帝が崩御すると、侯景は明皇帝の諡號、高宗の廟號を贈ったが、翌年三月、元帝蕭繹（世祖）は改めて簡文皇帝の諡號、太宗の廟號を贈り、四月に莊陵に葬ったという。但しこの半年の間には情勢に大きな變化があり、大寶三年（五五二）三月、王僧辯の東征軍は陳霸先の加勢を得て遂に侯景の軍を破ってこれを平らげ、その首を江陵にいた蕭繹に送ったのである。王僧辯が以前の百官を率いて簡文帝の梓宮を奉じ朝堂に升ったのはこのような状況を背景にしてであり、簡文帝の名譽回復と梁朝の再興を期さんがためであった。従って四月乙丑（二八日）の簡文帝の葬禮の準備もかなり大々的に行われたとみえ、『梁書』卷五、元帝紀によると、これに先立つ四月乙巳（八日）のこととして、

世祖遺策司空蕭泰、祠部尚書樂子雲拜謁塋陵、修復社廟

とある。司空⁽⁸⁹⁾は喪事を監護する大官であり、司空蕭泰等が葬禮に先だって丹陽の陵を拜謁した時、侯景によって荒らされた梁の帝陵も修復されたのである。そして蕭梁河が整備され陵口の石獸が置かれたのもこの頃と考えられる。というのは、蕭梁河も陵口石獸も梁の帝陵全體を前提にしたものであるが、そのような事業は梁の再興を目指したこの時期において他に考えられないからである。一方上引の『太平寰宇記』にもあったように、蕭梁河には蕭港という船着き場があって、その蕭港は簡文帝の莊陵のすぐ傍らにあったといい、蕭梁河も蕭港も當面は莊陵のために造られた感がするからである。塋陵の拜謁と宗社の修復は、中興の主と稱された元帝蕭繹が承聖元年（五五二）十一月に江陵で正式に即位し、翌年八月、尉遲迥が益州を陥れた時の詔にも詠われたが、結局元帝は江陵から建康に歸ることなく、承聖三年十二月、江陵を陥れた西魏によって殺されてしまった。⁽⁹¹⁾ 陵口石獸の造營を大寶三年（五五二）の簡文帝の葬禮の頃と推測する所以である。

次に三城巷（1）の石獸は梁文帝建陵の南六十mの所に位置し、一對のうち左側石獸は胴の半ばで輪切りにされて前軀のみ
のこり、しかも頭部を失ったうえに四肢を欠き損傷が著しいのに對して、右側石獸（圖28（1））は四肢と尾を缺く他は比較的長
くのこっている。右石獸の大きさは體長三・〇五mで、建陵、修陵の石獸とほぼ同じである。一見して氣附くことは陵口石獸
との類似であり、同じ様に頭部が大きく首が短く作られ、頭から首、胸、腰に至る姿勢も餘り躍動的でないのは勿論、翼（圖
28（2）、27（3））や體毛の表し方も頗るよく似ている。こちらの石獸が陵口の石獸の形を踏襲しているのは明かで、翼や體毛の表
現を更に詳しくみると、陵口石獸にみられた文様化の傾向を更に一層押し進め、自然な印象を益々減じている。例えば翼部
（圖28（2））は各部分が個性を失って前部から羽根へと流麗な曲線を描いて一續きに表現され、前部のはね上がった毛も勢い
は失せて文樣的に簡素化し、翼の付け根の鱗文も曲線の流れに逆らわないように數を減らして淺く彫られている。文様化の最
も顯著なのは腰部の體毛の表現（圖28（3））で、後ろからみると基本的には陵口（圖27（2））と形は同じで後頭部から背部を通っ



(1) 右麒麟全身 體長 3.95m



(2) 左麒麟背面 腰部文様

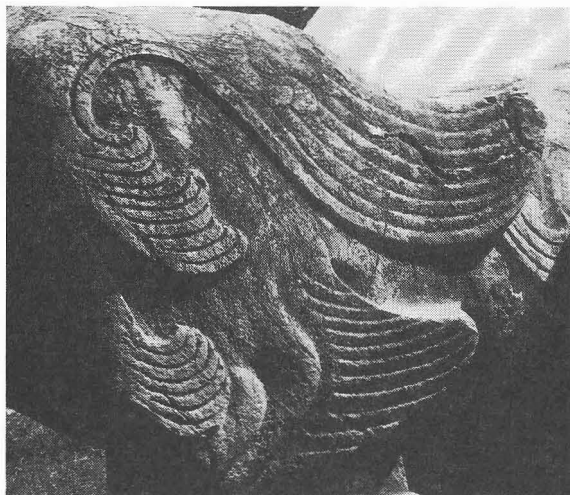


(3) 右麒麟翼部 長毛

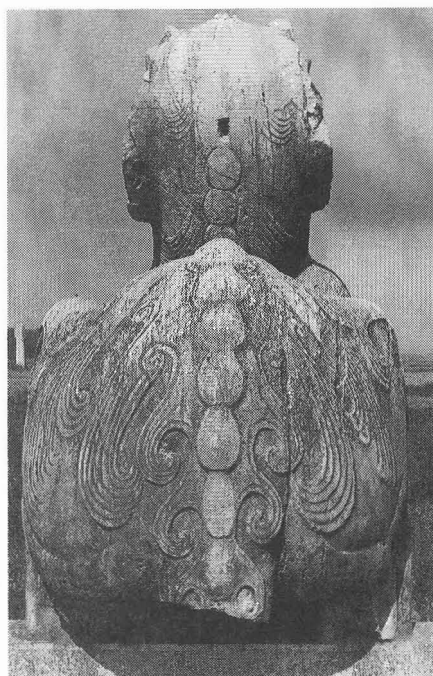
圖27 丹陽陵口 麒麟



(1) 全身 體長 3.02m



(2) 翼部 長毛



(3) 背面 腰部文様

圖28 丹陽三城巷 (1) 右麒麟

て尾に至る一種の連珠文を中に左右相稱に表されているが、陵口ではまだ前代の名残から毛が先端を卷いた矢のように表現されるのに對して、こちらは自由奔放に流麗な曲線を多用して毛並みを數本刻んだ體毛が卷き毛のように繰返し表現され、完全に文様化し切つて却て實にリズムカルである。

この三城巷（1）の石獸の帝陵比定については、朱希祖以來、中國の研究者によつて異口同音に齊の明帝蕭鸞の興安陵とされてきた。これは『乾隆丹陽縣志』卷十九に興安陵の位置が「東北二十四里、尙德鄉」とあり、また梁文帝の建陵の位置が「縣東北二十五里、東城村」とあることなどによつて、前者の尙德鄉を尙德鄉東城村と解したことなどによると思われるが、『乾隆丹陽縣志』が建陵の方角を丹陽縣の「東北」といったのは明らかに「東」の間違いで、それが證據にすぐ隣の武帝の修陵、簡文帝の莊陵については各々「縣東二十五里、皇業寺前」「縣治東二十七里」といつているのである。また『乾隆丹陽縣志』によれば尙德鄉は東城村の他三十八村もあつて廣く、先に趙家灣石獸を當てた齊宣帝蕭承之の永安陵も「縣北三十里、尙德鄉」にあつたとある。従つてこの考證には明らかに誤りが認められ、興安陵は『元和郡縣圖志』にも「縣東北二十四里」とあつた如く、先に考證したように東北の方角にある金家村墓とその石獸に當てるべきである。また様式的にみても三城巷（1）の石獸が齊明帝（四九八卒）の興安陵に當てられないのは無論のこと、上述の如く梁武帝の修陵以後の様式を示し、そのうえ後の大寶三年（五五二）頃に造營されたと推測される陵口の石獸の形を明らかに踏襲しているのである。また解放前の寫眞をみて（93）もこの右石獸は奥の左前肢を前に出す梁の形式に則つており、しかも前肢の肘の部分には三角形の長毛をはやして梁の獅子型石獸を示しているのである。

では、この石獸はどの帝陵に比定すべきであろうか。先ず荆林三城巷には東向きの四基の帝陵が南北一列に整然と並んでいたという事實に注目すべきである。つまりここは一群の帝陵區をなして、三城巷（2）（3）（4）が各々梁の文帝、武帝、簡文帝の陵であつたように、梁の帝陵區をなしていた筈であり、これまで三城巷（1）が齊明帝の興安陵に比定されて齊の帝陵が紛れていたこと自體、常識的に考えても奇妙だったのである。齊の帝陵が前艾廟の景安陵を唯一の例外として、經山を帝陵

區としてその周圍に配されていたのと同様である。従つて三城巷(1)は梁の帝陵の筈であり、しかもその時代は陵口の大寶三年より遅く、つまりは簡文帝より後の梁の帝陵ということになる。そこで候補として挙げられるのは、元帝蕭繹と梁最後の敬帝承方智である。武帝の第七子の元帝は既述の如く王僧辯等が侯景を平らげると江陵で即位し、承聖三年(五五四)に江陵を陥れた西魏によって殺された。また元帝の第九子に當たる敬帝⁽⁹⁴⁾は、太平二年(五五七)に陳の武帝陳霸先に禪讓した後、奉じて江陰王とされ、陳の永定二年(五五八)に薨じた。このうち元帝は『陳書』世祖紀⁽⁹⁵⁾によると、天嘉元年(五六〇)に陳の文帝陳蒨によって江寧に葬られたというから可能性は薄く、これに對して敬帝⁽⁹⁶⁾は江陰王になって後も優遇されて梁の正朔を行うことが許され、亡くなった時、武帝陳霸先は太常を遣わして弔祭せしめ、司空に喪事を監護させ一切を準備したというから可能性があろう。つまり東晉最後の恭帝の沖平陵が禪讓した宋武帝によって南京富貴山に營まれ、齊の最後の和帝の恭安陵が禪讓した梁武帝によって吳家村に營まれたようにである。この二基の陵は發掘した結果いずれも帝陵の形式を備えていた。三城巷(1)の石獸が敬帝の陵である可能性は十分にあらう。

また様式的にみても陵口の石獸の後に作られ、それを手本にしたことは先に述べたが、大寶三年(五五二)の莊陵石獸と比較しても、それより後の様式が一部みられる。例えば翼の前部の毛をはね上がった形に表すのはともに陵口(圖27(3))の石獸と共通しているが、それが莊陵(圖26(1))では陵口と同じように先ず二つに分かれて、上のが更に三つに分かれる表現であるのに對して、ここでは(圖28(2))上の毛の分かれ方が不明瞭になっている。また羽根の附け根の鱗文は陵口(圖27(3))では五列に分かれて数が多いが、莊陵(圖26(1))ではそれが二列に分かれて数が少ないために大きく突出するのに對して、ここでは(圖28(2))二列で大きいけれども突出せず、翼の描く流れるような文様の中に埋没した感じである。寫實を排した文様化の傾向は既に梁文帝の建陵でも萌芽的にみられたが、梁末期にあってはそれが更に進展し、陵口、莊陵、三城巷(1)と進んでいるようである。この點でも三城巷(1)の石獸を永定二年の梁敬帝の陵に當てるのは妥當と思われる。本來ならば恐らく叔父簡文帝的莊陵の左側(北側)に造營すべきであるが、父であり先帝である元帝の陵がなかったこと、莊陵の北側が皇基寺であ

ったことなどから、陳の武帝は建陵の南側に陵口の石獸の形を踏襲して制作させたものと思われる。

四 陳帝陵の石獸

(一) 江寧石馬衝

これまで齊と梁の帝陵は丹陽を陵區として造營されたが、陳になると特別に陵區を定めず、南京の近郊に造營した。現在確實に陳帝陵の石獸と考えられるのは南京甘家巷東南の北象山獅子衝の一對石獸だけで、江寧石馬衝の鬣をもった一對石獸は果たして陳代のものか疑問がもたれ、また陳帝陵と推測される南京西善橋油坊村の大墓は「獅子圖」磚畫が発見されたけれども石獸は見つかっていない。

最初に、南京の東南、江寧縣上坊鎮西北の石馬衝にある一對石獸は、東南向きの墓の參道の入口に互いに四八・八m隔てて置かれている。但しこの石獸はこれまでみてきた有角の麒麟石獸と異なって、丹陽爛石壠や水經山村でみた石獸と同じく角の代わりに鬣を有し、更に舌を垂らすのが特徴である。従って大きさも一般の帝陵石獸と較べ、右石獸(圖29)が體長二・七二m、高さ二・二八m、左石獸が體長二・五〇m、高さ二・五七mと、少し小さく、爛石壠や水經山村と較べれば少し大きい。そして水經山村(圖18)と同様、左右の石獸ともに手前の前肢を前に出しているのは注目すべきで、體型も似ている點もあるけれども、要するに小柄の動物と大柄の動物の違いで、こちらは鬣が発達して頭部が大きく、胴も長めで肢も太く、翼の先も上を向いている。右石獸の保存がほぼ完全であるのに對し、左石獸の頸部、胸部が破碎しているのは惜しまれる。

この石獸は從來から陳の武帝陳霸先の萬安陵のもの⁽⁹⁸⁾とされてきた。陳霸先は王僧辯とともに侯景の亂を平定したが、元帝の後の皇位繼承の問題で王僧辯と對立し、王僧辯を急襲して殺し敬帝蕭方智を立てた。そして敬帝の禪讓を受けて、永定元年

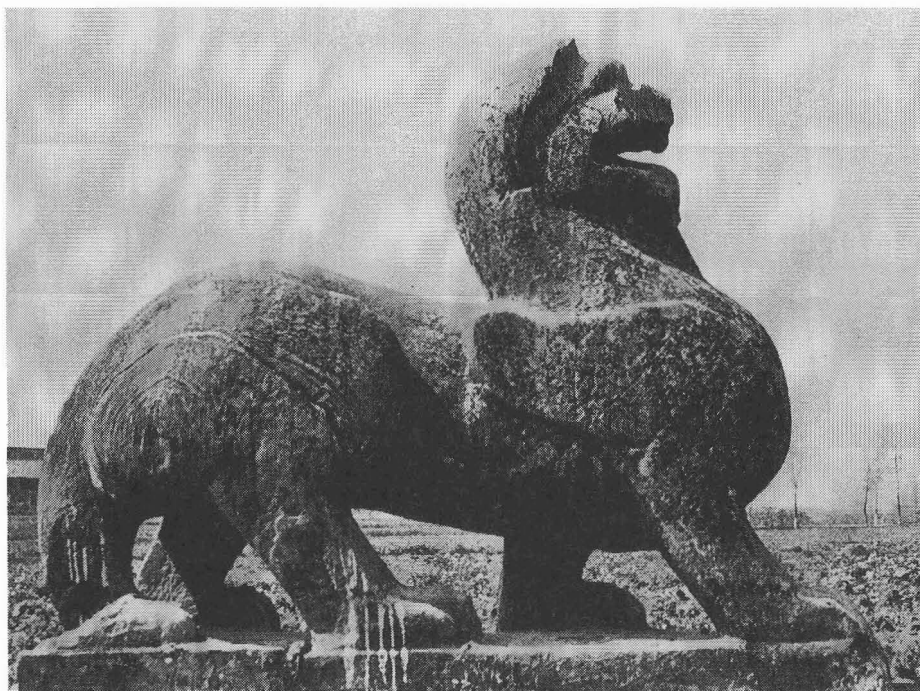


圖29 江寧石馬衝 右石獸 體長 2.72m

(五五七)に即位し、僅か三年在位しただけで、永定三年(五五八)に瑳璣殿に崩じ萬安陵に葬られた。⁽⁹⁹⁾石馬衝の石獸をこの萬安陵に比定することは、既に『六朝陵墓調查報告』⁽¹⁰⁰⁾も指摘した通り、種々の點から疑問がもたれる。先ず第一に、武帝陳霸先は陳の創業者として帝業を全うしたにもかかわらず、何故有角の麒麟の帝陵形式ではなく、無角の獅子の王墓形式で葬られなければならなかったかという素朴な疑問である。陳代には次に取上げる南京獅子衝石獸の例にみる通り、帝陵の石獸を一角・二角の有角石獸の形に作ることは確かに行われたのである。第二の疑問は、その位置が文獻の傳える萬安陵の位置と合わないことである。『建康實錄』⁽¹⁰¹⁾卷十九には「(上元)縣東南三十里、彭城驛側」とあるが、彭城驛の位置は不明で、淳化鎮東の彭城山の近くにあったとすれば、およそ方角違いである。また『元和郡縣圖志』卷二六に「(上元)縣東三十八里、方山西北」というが、實は石馬衝は方山の眞北に位置しているのである。第三の疑問は、『北史』卷八四、王頒⁽¹⁰²⁾傳によると、萬安陵は隋初に王頒によって徹底的に發かれたとあり、果たして石獸がのこったかどうかである。王頒は王僧辯の息子で、西魏が梁元帝のいた江陵を陥れた時、

關中に入って西魏に歸したが、その間に父が陳霸先に殺されたことを聞いて恨み、陳が滅ぶや父の嘗ての士卒千人餘りを召集して復讐を企て墓を發いたというのである。鍬、鋤を持って夜のうちにに行い、遺體の骨を焚いて灰を取り、それを水に入れて飲むという徹底ぶり、石獸も被害を受けたことは當然推測されよう。

このように江寧石馬衝の石獸を陳武帝の萬安陵の石獸に比定するには種々の疑問がもたれるが、それ以上に問題な點は果たしてこの石獸が形式的、様式的にみて陳代のものであろうかということである。先に觸れた如くこの一對石獸はともに手前の前肢を前に出していたが、これは齊の帝陵の有角石獸、並びに爛石壠、水經山村の無角有鬣石獸にみられた形式であり、いずれにしても齊の石獸の形式である。これに對して梁の形式は、梁初の文帝建陵の石獸を除き、三城巷(3)(4)(1)の石獸にみられたように奥の前肢を前に出す方式がとられ、これは現存する蕭秀墓(圖20)、蕭宏墓、蕭恢墓、蕭績墓、蕭景墓(圖25)、蕭愴墓、蕭融墓など、全ての王侯墓石獸にも共通する形式である。また陳も梁の形式を踏襲したものとみられ、後述する南京獅子衝の一對有角石獸(圖30)も奥の前肢を前に出している。従つて石馬衝の石獸は形式からみる限り、陳でないことは無論、梁でもなく、齊の石獸ということが考えられる。それでは様式の點ではどうかというと、やはり齊とみるのが妥當である。というのは右石獸(圖29)を眞横からみると、頭を引いて胸を突き出し右肢を前に出して、頭部・頸部・胸部・前肢がかなり傾斜して斜め一直線にみえるが、これが齊の石獸の特色であり、いまにも動き出さんとする動勢が感じられるのに對して、梁以後の石獸の場合は頭を引き胸を突き出しても前肢をそれほど前に出さないため、結果として立ち止まった姿勢に近く動きに乏しい感じを受けるのである。また胴が長く虎を基本形にしているのも、獅子を基本形にした梁以後の石獸との大きな相違といえる。恐らく無角有鬣の石獸としては、水經山村の石獸の後に來るものであり、また上述の如く梁初の文帝建陵の石獸がなお齊の形式で作られたことを考慮すれば、齊か梁初の制作ということになる。いずれにしても、陳の武帝萬安陵の石獸とするには疑問の點が餘りにも多すぎるといえよう。

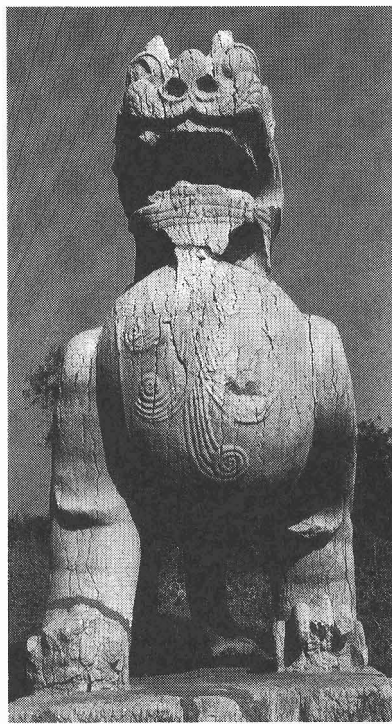
(二) 南京獅子衝

南京の東北、名刹棲霞寺のある棲霞山の西南約二・五km、北象山の下の獅子衝（圖1）には一對の有角石獸が相對して置かれてゐる。一九七七年に土中から取り出した時にはかなり破損を被っており、特に左右獸は頸部と腰部のところで破裂してゐたが、現在は修復されて三成の臺座の上にのつてゐる。大きさは右石獸（圖30（2））が體長三・一九m、高さ三・一三m、左右獸（圖30（1））が體長三・一一m、高さ三・〇〇mで、ともに白みを帯びた石灰岩が使われている。全體に獅子型をして奥の前肢を前に出す梁の形式を採用しており、一見して丹陽三城巷（4）の莊陵石獸（圖26）との近似が看取される。同じように頭部がいかつと大きくて、頭頂の太い角は表面にごつごつした鱗文を表し、太く短い肢の爪先（圖30（4））も同様に上を向いてゐる。しかも莊陵の石獸の大袈裟な作りは一層度を増しており、首の殆どない頭でっかちな頭部、ボールのようにまん丸い胸、太過ぎる程太い肢にそれが顯著に窺えるのみならず、眼と眉毛を一層突出させ、口の周りの筋肉を一層發達させたところにもそれが窺える。また翼の前部のはね上がった毛や腰部の毛（圖30（4））は周りを窪めて全く雲氣文の文様風に表し、毛筋を刻まないため一層自然から遊離した印象を與える。そして陵口、三城巷（1）の石獸にみられた、後頭部から背中を貫通して腰に至る一種の連珠文の帶（圖27（2）、28（3））は尾の先まで達し、更に尾の部分（圖30（3））の連珠文の兩側には渦文が施されて益々文様化した印象を與える。やはり梁末期の陵口や莊陵の石獸を受けた陳の動きを示すものであろう。

ところが、この獅子衝石獸に關しては、宋の文帝劉義隆の長寧陵に當てる説が根強く存在する。朱希祖は『六朝陵墓調查報告』において長寧陵説を退け、陳文帝永寧陵説を採用したが、朱楔は『建康蘭陵六朝陵墓圖考』において長寧陵説に傾き、解放後それを唱えて、最近では羅宗眞氏、町田章氏がこの説をとつてゐる。⁽¹⁰⁾しかしこの説は様式の面から論じて、上で檢證した如く獅子衝の石獸が梁末以後の様式を明確に示して根據不十分であるばかりか、文獻史料に依つて位置の面から論じても明らかに矛盾してゐる。先に宋の武帝の初寧陵の位置を考證した際に取上げたように、宋文帝の長寧陵の位置は蔣山（鍾山）の



(1) 左麒麟全身 體長3.11m



(2) 左麒麟正面



(3) 右麒麟胴體



(4) 右麒麟一角 腰部文様

圖30 南京獅子衝 麒麟

西南、そして南京城の東北にあって、蔣山の更に東北の獅子衝とは全く合致しないからである。

では誰の陵かというと、やはり朱希祖のいう通り、武帝の後を繼いで永定三年（五五九）に即位し、天康元年（五六六）に崩じた陳の文帝陳蒨の永寧陵に比定するのが妥當であろう。永寧陵の位置については、『建康實錄』卷十九、『元和郡縣圖志』卷二五にはそれぞれ次のようにいう。

陵在今縣東北四十里、陵山之陽、周四十五步、高一丈九尺。

在縣東北四十里蔣山東北。

即ち兩書ともに方角、里程が合致して上元縣（唐代の南京）の東北四十里にあったといい、後者は更に蔣山東北というが、これらはことごとく獅子衝の位置（圖一）に合う。朱希祖は陵山とは獅子衝の背後にあって土地の人々が蘭山と呼ぶ山のこと、廣州音では陵と蘭は音が近いという。

朱偁と羅宗眞氏は、この陳文帝の永寧陵については別に南京麒麟門外東北の靈山大墓を當てている。靈山大墓は鍾山東北東の靈山（圖一）と呼ばれる小高い山の南面にあって、この付近は獅子衝とも呼ばれるというが、一九六二年に神道柱の頂きにのせた小型石獸が發見され、その後一九七二年に南京市文物保管委員會によって近くの墓自體が發掘され、高さ七九cmもある豪華な青瓷蓮華尊（圖32）などが出土した。この發掘報告は今なお發表されていないので詳細は不明であるが、神道柱の小型石獸が發見されたからといって帝陵ということにはなるまい。蕭秀墓や蕭景墓（圖21）のように王侯墓の神道柱にも小型石獸はのせられたからである。寧ろ南京燕子磯附近で發見された梁普通二年（五一）墓（圖76（3））との墓葬形制の類似が指摘されており、梁の王侯墓の可能性があろう。丁度近くの仙鶴門外張庫村には普通七年に亡くなった梁臨川靖惠王蕭宏墓の石獸、神道柱、碑も存在しているのである。従っていまは棲霞山西南の獅子衝石獸を陳文帝の永寧陵に比定しておく。

(三) 南京油坊村大墓

一九六一年から翌年にかけて、南京西善橋油坊村にある海拔一〇四・三mの罐子山の北麓(圖31)で一基の南朝大墓⁽¹¹⁾が發掘された。場所は同じく西善橋の宮山北麓(圖31)にあつて一九六〇年に磚畫「竹林七賢と榮啓期圖」が發見されたいわゆる南京西善橋墓の眞南に位置し、西は馬鞍山、東南は牛首山に相對していた。墓(圖33)は山麓の海拔約三〇mの所に長さ四五m、幅九・十一mの長方形墓坑を掘つて、長さ三〇・五mの墓道の奥に甬道、墓室を長方磚で築き、封門牆で塞いでいた。そして全て完成した後に高さ一〇m、周長二四・一mの封土をかぶせていたのである。墓室の大きさは奥行一〇m、幅六・七m、高さ六・七mで楕圓形をなし、天井はドーム狀に造られていた。しかし墓室は盜掘と自然破壊によつて天井も壁も床も壞れており、甬道が一部破壊を免れて復元可能であつた。それによると甬道は幅一・七五m、高さ三mで、天井はアーチ狀で内壁は花文の磚で飾られ、途中に二重の石門を設けて第一甬道、第二甬道と區切つていた。その第一甬道の東西壁の中央、床から〇・五五mの高さの位置に縦〇・六五m、幅一・〇五mの磚畫「獅子圖」⁽¹²⁾がはめ込まれており、西壁(左壁)の方は完全に壞れていたが、東壁の方は幸いにも獅子の後半身だけのこつていた。この「獅子圖」はのこつた部分をみる限り、蹲踞して大きな尾を振り上げ、金家村墓の甬道で見つかつた「獅子圖」(圖43)と圖柄は殆ど同じであつた。

南朝の墓葬形制は後述するように、東晉・宋から齊・梁へと、これまで長方形であつた墓室の隅が角が取れると同時に周囲の壁が外側に膨らんで次第に圓みを帯びる傾向にあるが、油坊村大墓は殆ど完全な楕圓形をなしている點でより發達した段階にあるといえる。また天井がドーム狀をなすのも梁の中期までにはみられなかつた形式で、寧ろ一九七五年に常州南郊戚家村で發見された畫像磚墓に近いといえる。この畫像磚墓は墓室(圖34)が奥行四・五〇m、幅三・〇六mで、完全な楕圓形ではなけれども東西の二壁は油坊村大墓以上に外側に膨らみ、同じように天井はドーム狀をなしていた。中晚唐期の瓷器も發見され編年⁽¹³⁾を困難にしているが、南朝帝陵の磚畫「獅子圖」(圖43)と非常によく似た「獅子圖」畫像磚(圖39)(2)を出土するな

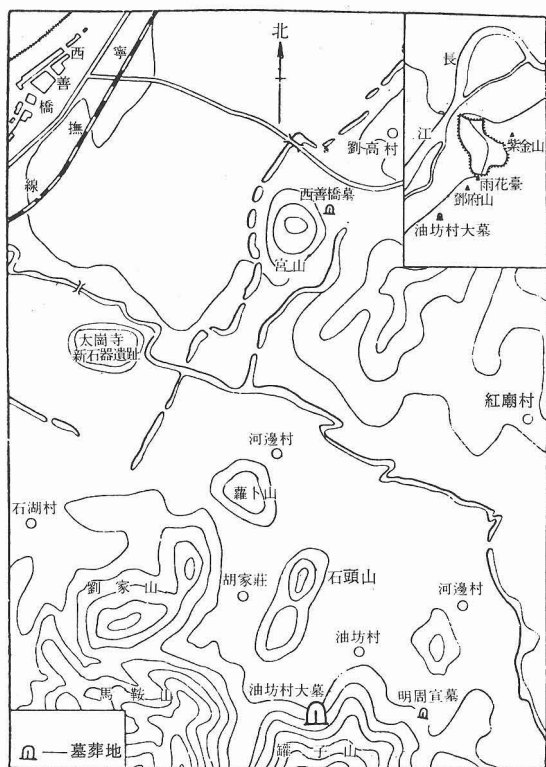


圖31 南京西善橋略圖

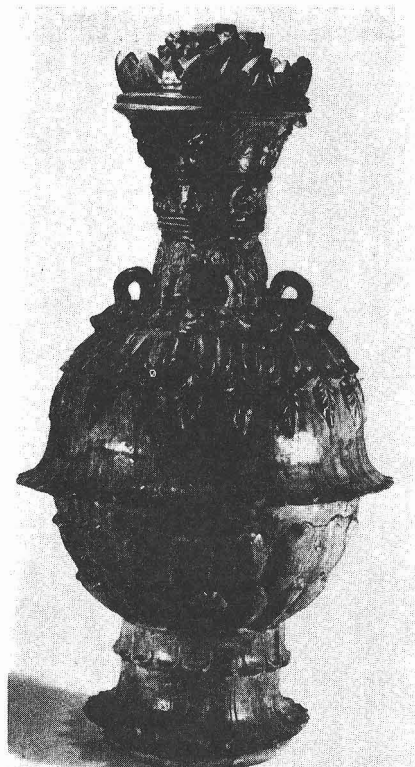


圖32 南京靈山大墓出土 青瓷蓮華尊 高79cm

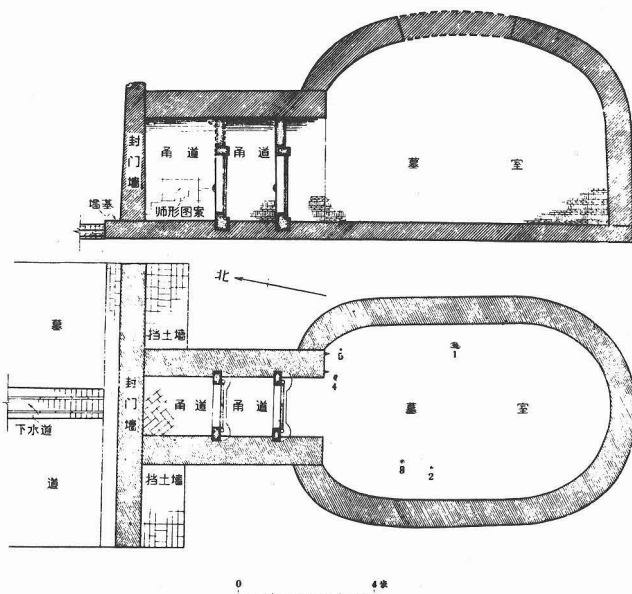


圖33 南京西善橋油坊村大墓立・平面圖

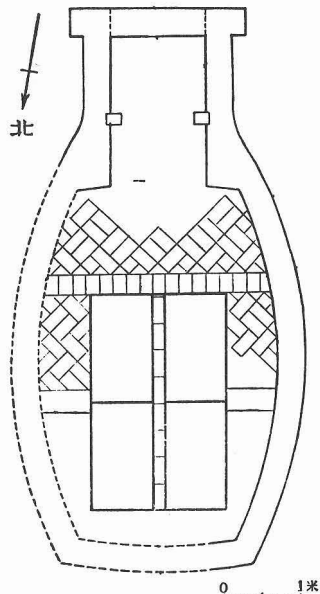


圖34 常州南郊戚家村畫像磚墓平面圖

ど、南朝の傳統を受繼いでいることからみても、南朝末から初唐頃とするのが妥當であろう。従つて油坊村大墓も同時期か少し早い時期に編年されるのである。

また、油坊村大墓は有角の麒麟石獸は見つかっていないけれども、南朝の帝陵の條件を十分に満たしている。甬道部分の二重の石門は、これまで發掘された全ての帝陵にみられるものであり、磚畫「獅子圖」も丹陽金家村の帝陵の同じ場所と同じ圖柄のものが發見されており、いずれも帝陵獨自のものと考えられるからである。また封土の規模も『建康實錄』の傳える宋と陳の帝陵の中で最大の陳武帝萬安陵の「周六十步、高二丈」⁽¹⁵⁾を凌ぐものがあり、墓室の大きさもこれまで發掘された帝陵中最大であつた丹陽仙塘灣の奥行九・四m、幅四・九mを凌いでいる。

被葬者については、南京郊外にあるところから齊と梁は除外されて、宋か陳かということになるが、墓室が長方形の角が完全にとれて楕圓形をしているので、仙塘灣や吳家村の齊帝陵は勿論、蕭秀墓など梁の王侯墓よりも新しい墓葬形式を示し、やはり陳の帝陵とみなすのが妥當であろう。『元和郡縣圖志』卷二五によると、陳の宣帝陳瑱の顯寧陵は「(上元)縣南四十里牛頭山の西北」にあるといい、里程がほぼ合致するばかりか、確かに牛頭山⁽¹⁶⁾、即ち東晉の宣容門の眞南に位置して雙峰があるところから天闕と稱された牛首山の西北に位置しているのである。宣帝陳瑱は文帝陳蒨の弟に當たり、文帝の後を繼いだ廢帝陳伯宗が廢された後を受けて太建元年(五六八)に即位し、太建十四年(五八二)に宣福殿に崩じて顯寧陵に葬られた。陳はその後、後主陳叔寶⁽¹⁷⁾が繼いだが、禎明三年(五八二)に隋によって滅ぼされて後主は執えられ、隋の仁壽四年(六〇四)に洛陽に薨じて芒山(邱山)に葬られたのである。

五 石獸の名稱

南朝帝陵の石獸の名稱の問題は古來の懸案であり、今なお難しい問題をはらんでいる。先にも述べた如く、『南齊書』卷二

二、豫章文獻王嶷傳は宋の長寧陵の石獸を「麒麟」と呼んでおり、また『梁書』卷三、武帝紀は建陵の石獸が動いた事件を取上げ「石麒麟」と呼んでいる。ところが後者の事件を述べて、『南史』卷七は「石辟邪」と記し、『隋書』五行志⁽¹⁰⁾に至っては「石麒麟」とする一方で、次の項で建陵の別の事件を取上げ「辟邪」としている。『南齊書』以外は全て唐代における撰述で、齊の豫章王蕭嶷の子に當たる蕭子顯⁽¹¹⁾（約四八九—五三七）の著した『南齊書』が「麒麟」というのは興味深い。それともかく、これらをみる限り「麒麟（麒麟）」説と「辟邪」説の二つに分かれるが、更に後世の研究者の説は錯綜を極めてい。先ず朱希祖は「天祿辟邪考」を著し、結論的にいえば帝陵の右の一角獸を天祿、左の二角獸を辟邪として、總名を桃拔というとし、王侯の墓の無角石獸を符拔或いは扶拔とし桃拔と同じ類としている。但しこれらは「正名」であって、同じく『六朝陵墓調查報告』に收められた「六朝陵墓調查報告書」⁽¹²⁾では、帝陵の石獸を一括して麒麟、王侯墓の石獸を辟邪と呼んでおり、通俗の呼稱に従ったとしている。また朱契⁽¹²⁾は一般に帝陵の一角獸を麒麟、二角獸を天祿と呼び、王侯墓の石獸は辟邪と呼ぶとし、近年羅宗眞氏や姚遷・古兵編『六朝藝術』もこれに従っている。しかし定論というわけではなく、現在なおこれ以外の説を唱える研究者があり、孫機氏⁽¹³⁾は浙江出土の神獸帶鏡の例を挙げ帝陵の一角獸を辟邪、二角獸を天祿としている。

このように石獸の名稱は錯綜を極めいづれの説も十分な説得力を缺くのが現状である。朱希祖の天祿・辟邪説は、歐陽修『集古錄跋尾』卷三の次の記事に據っている。

右漢天祿・辟邪四字、在宗資墓前石獸膊上。案後漢書宗資、南陽安衆人也。今墓在鄧州南陽界中、墓前二石獸、刻其膊上、一曰天祿、一曰辟邪。

即ち河南鄧州南陽界にあった後漢の宗資墓の一對石獸に「天祿」「辟邪」と銘が刻されていたというのである。これは『後漢書』靈帝紀の唐の李賢注⁽¹⁴⁾にも「今鄧州南陽縣の北に宗資碑あり、旁に兩石獸ありて、その膊に鐫り、一は天祿と曰い、一は辟邪と曰う」とあり、同じものである。しかし歐陽修も記す通り、この刻字は當時から不鮮明で、明の嘉靖年間に南陽知府の楊應奎⁽¹⁵⁾がここを訪れて、四肢が壊れたり地中に埋まったりした石獸を起こして細かく見ても字はなかったといい、却って『元一統志』⁽¹⁶⁾

を引用して、南陽縣東北の宋均墓の石獸に左石獸は「天祿」、右石獸は「辟邪」と刻されていたことを記している。また現在、南陽市の南陽漢畫館には宗資墓前の石獸として、體長二・二〇mと二・三五mの一對石獸(圖35)が保存されているけれども、「天祿」「辟邪」の刻銘がはっきりしないうえに、漢代の石獸としての様式にも問題があり、李賢や歐陽修のいう石獸と同一かどうか疑問がもたれる。いずれにしても、李賢注や『集古錄跋尾』をみる限り一角、二角には何も言及しておらず、朱希祖が天祿を一角、辟邪を二角としたのは、『後漢書』西域傳の「有桃拔・師子・犀牛」の孟康注に、

桃拔一名符拔、似鹿、長尾、一角者或爲天鹿、兩角者或爲辟邪

とあるに據り、また天祿と辟邪の總名を桃拔としたのもこれに據っている。しかし桃拔と稱する鹿に似た動物が墓前の鎮墓獸に使われたということは、漢代の出土品などを徵する限り例がないうえに、浙江紹興漓渚出土の神獸帶鏡では一角をつけた虎のような體つきの動物の傍らに「辟邪」の題字がみえる。孫機氏が南朝帝陵の一角獸を辟邪としたのもこれに據ったのである。要するに朱希祖が「正名」として擧げた一角天祿、二角辟邪の説も十分な根據に乏しいといえよう。寧ろ一角と二角に拘るならば、先に取上げた洛陽洛河岸で出土した「綠氏蒿聚成奴作」銘の一角と二角の有翼石獸(圖8)を擧げるべきで、體つきも虎に似ているところから、神獸帶鏡の題字に従う限り、一角獸の方は辟邪と名附けることが出來、二角獸の方は依然不明である。一角、二角以外にも、南朝帝陵石獸、特に齊陵の虎型石獸とは胸に垂れた髭、翼、四肢の鋭い爪などが類似しており、墓の鎮墓獸の形としては確かにこの漢代石獸の系譜にあるといえよう。

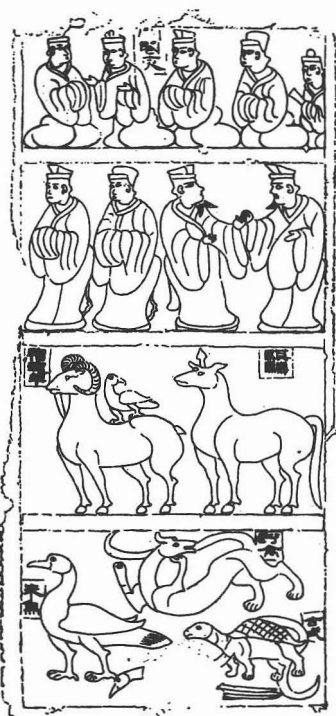
一方、朱希祖が通俗の呼稱に従ったという麒麟は、古くは『春秋』⁽¹²⁾『詩經』⁽¹³⁾『孟子』⁽¹⁴⁾などの文獻に登場し、漢代には祥瑞としての動物、即ち瑞獸として鳳凰、黃龍、白鹿などとともに繪畫や彫刻に盛んに表された。當時流行した天人感應思想に基づき、帝王や君主など爲政者が徳の高い政治を行い天下が太平であると、天がその徳を讃えて動物や品物を下すと考えられたのである。紀元前一二二年、前漢の武帝が長安の雍に行幸し五時で天上の五帝を祠った時、白麟を獲⁽¹⁵⁾、武帝は祥瑞の出現を喜んで「白麟之歌」を作り、その年を元狩元年と定めた。この漢代の麒麟の最も典型的な像は一九七四年に河南偃師縣の窖藏から



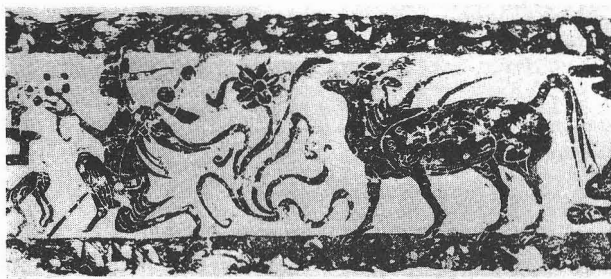
圖35 南陽縣石獸 高1.65m 南陽漢畫館



(1) 河南偃師出土 鍍金麒麟像 高8.6cm



(2) 江蘇邳縣繆宇墓畫像石 麒麟(「麒麟」)
畫像(模本)



(3) 江蘇睢寧縣九女墩畫像石 麒麟畫像(拓本)

圖36 後漢麒麟

出土した鍍金麒麟像(圖36(1))であり、類似の麒麟は山東嘉祥縣の武氏祠の畫像石にも「祥瑞圖」の一つとして畫かれ、榜題に「麟は胎を刳き少きを殘わされば、則ち至る」と刻されている。これらの像は後漢の許慎の『說文解字』に、

麒麟、麒麟、仁獸也。麋身、牛尾、一角

という麒麟の定義にほぼ合致し、麋(のろしか)の體をして牛の尾をつけ、頭頂に一本の角があるが、仁獸という如く、他を傷つけないようにその先端は丸く肉がかぶさっており、蹄も鹿の偶蹄と異なり生きた蟲や草を傷つけないようわざわざ圓く單蹄に作られている。しかし麒麟像も時代とともに次第に體型が變化して鹿から馬に近い形になり、一六八〇年に江蘇邳縣の後漢彭城相繆宇墓(和平元年卒、一五〇、元嘉元年造營、一五一)で發見された畫像石(圖36(2))にも、馬の體型をして先端が三角形を呈した一角と長い尾をもった麒麟が畫かれ、注目すべきことに榜題には馬偏で「麒麟」と書かれていた。このような麒麟は徐州睢寧縣九女墩の畫像石(圖36(3))でもみられ、そこでは有翼の麒麟が毛のふさを三重につけた節を持ち羽衣を着た羽人とともに畫かれ、傍らには仙草が生え花をつけている。羽人とともに畫くのは、節が天帝の使者のしるしであるように、祥瑞として地上に下される際に羽人が天帝の使者の役を果たし先導役をつとめるからである。

この馬型の麒麟は六朝時代に入っても作られ、下って河南鄧縣學莊の彩色畫像磚墓(圖37(1))では、折れ曲がり先端を卷いた一角をもつ大型の獸が翼をなびかせ雲の上を疾驅するという躍動的な姿に畫かれ、ここでも榜題に「麒麟」と書かれていた。一九五八年に發掘された鄧縣彩色畫像磚墓⁽¹⁴⁾は甬道と墓室の二部から成り、奥行九・八m、幅三・〇九m、高さ約三・二〇mで、甬道と墓室の左右壁には人物・出行・故事・四神など各種の彩色畫像磚がはめ込まれていた。南朝と北朝の丁度境界付近に位置しているけれども、南朝的色彩が強く、南朝の陵墓、特にその磚畫を考えるうえで甚だ貴重である。また北魏の神龜三年(五一〇)の銘をもつ元暉墓誌⁽¹⁵⁾(西安碑林藏)は、墓誌の四邊の側面に青龍・白虎・朱雀・玄武の四神が二頭ずつ表され、北の玄武の面(圖37(2))だけは更に一角有翼の、どちらかといえば鹿型の麒麟が二頭やはり空を驅ける姿で表されていた。これら六朝の麒麟はもはや後漢時代のおとなしく行儀の良い儒教的な仁獸ではなく、口を大きく開けたり脚を振り上げたり、或いは



(1) 鄧縣彩色畫像磚墓出土 麒麟（「麒麟」）圖 長38cm



(2) 元暉墓誌側面 玄武・麒麟畫像（拓本） 北魏 神龜3年（520）

圖37 六朝麒麟



圖38 鄧縣彩色畫像磚墓出土 白虎圖 長38cm

尾を激しく振る躍動的な瑞獸である。そしてこれと関連し注目すべきことは、本來瑞獸であるべき麒麟が四神と同じような扱いを受けて表現されていることである。鄧縣彩色畫像磚墓の場合、麒麟が翼をなびかせ脚を振り上げて空を疾驅する様は、同出の青龍⁽¹²⁾や白虎⁽¹³⁾の圖と全く同じであり、また口を開け齒をむき出した様は、白虎や玄武と同じく觀る者に對して威嚇するような獐猛な感じを與える。つまり四神は元來天空の東西南北それぞれの方角に配されてその方角の星宿を象徵すると同時に、その方角を守護する神獸であるが、その四神と何等變わらぬ形で捉えられているのである。元暉墓誌の場合は鹿型で獐猛さはそれ程ではないが、その配置の仕方は四神と全く同列に並べられており、鄧縣の場合は、「麒麟圖」畫像磚は墓室東壁の最も入口寄りの柱（東壁第一柱）の上段に位置していた⁽¹⁴⁾といい、これも元暉墓誌の場合に麒麟が玄武とともに北側の側面に位置していたのと似たケースであろう。

そこで、これらを見て思い起こされるのは、五靈という考え方である。後漢の許慎の『五經異義』卷下には、

謹案、禮運云、麟・鳳・龜・龍、謂之四靈。龍、東方也、虎、西方也、鳳凰、南方也、龜、北方也、麟、中央也

とある。即ち『禮記』禮運篇に麒麟・鳳凰・龜・龍の四種の靈獸を四靈といったのを受け、更に虎を加えて五種とし、五行思想に基づいてそれぞれの方角に割當てたのである。ここでは五靈の字はみえないが、同様の考え方は緯書の『禮稽命徵』⁽¹⁵⁾にも記され、はっきり五靈と述べられている。

古者以五靈配五方、龍木也、鳳火也、麟土也、白虎金也、神龜水也。

木・火・土・金・水の五行に配當されたこの五種の靈獸を五靈といったのである。無論、この五靈の考え方の根底には四靈の他に四神があり、本來五行と關係ない四靈に四神の五行思想を吹き込むことにより、いわば兩者を折衷した形で再構成したといえる。また『禮稽命徵』の上引の文の後に、「視は明にして禮修まれば、麒麟來り遊び、思は睿にして信立てば、白虎馴れ擾き、言は從にして文成れば、神龜沼に在り（略）」などと記すように、祥瑞の考え方も根底にあらう。いずれにしても、このように麒麟は五行の土を配當されて中央に配され、この結果、四神の青龍・白虎・朱雀・玄武と同じく天上における方角、

分野の守護神的役割を與えられて、本來の瑞獸的性格を改められたのである。それがいつの頃から圖像として表現されるようになったかが問題であるが、前漢末から後漢にかけて流行した方格規矩四神鏡の内區において、四神とともに、更に細かく言えば朱雀と白虎の間の末(西南)の方角に時折配される羊に似た一角獸がそれだとの説もある。上述した元暉墓誌の麒麟(圖37②)は實にその例であるといえ、墓誌裝飾の構成上中央に配することが出来ないため北邊に玄武とともに配されたと考えられる。かように麒麟は後漢以後六朝にかけて、次第に天上世界における單なる瑞獸ではなく、四神と同じように分野を與えられて守護神的性格を帯びるようになった。南朝帝陵の石獸の場合も鎮墓獸として守護神的な辟邪の機能をもっていたことは、陵の參道入口に置かれて威嚇的に大きく口を開けていること、獅子灣・仙塘灣・三城巷(3)の石獸のように前に出した足が鋭い爪で小獸をつかんでいることなどにより明白である。このような鎮墓獸的な辟邪の機能をもった有角石獸を、『南齊書』『梁書』が麒麟と稱してものはや違和感がなかったものと思われる。

いま一つ南朝における麒麟の現象で興味深いのは、劉宋以後になると、麒麟が祥瑞として地上に出現したという記録が全くないことである。沈約の著した『宋書』の符瑞志をみると、麒麟は祥瑞の筆頭に擧げられ、前漢武帝の元狩元年以來の麒麟の出現の記事が十五例記録されているけれども、東晉成帝の咸和八年(三三三)に遼東に現れたのを最後として、次の宋代については一例も擧がっていない。これは他の鳳凰、黃龍、靈龜、白鹿、白虎、白麕などの瑞獸が宋代に入っても盛んに出現しているのと比べると著しい違いである。これは符瑞志に限らず『宋書』全體に徴してもそうであり、更に『南齊書』『梁書』『陳書』をひもといても、依然として他の祥瑞は頻繁に現れているにも拘らず、麒麟出現の記事だけは見当たらないのである。しかし唐代になれば、例えば高宗の龍朔三年(六六三)十月丙申に絳州において麒麟が現れ、次いで丙午にも含元殿の前で麟趾が見つかり、ために高宗は喜んで翌年正月一日を麟德元年と改めている。従って東晉と唐の間に挟まれた南朝の宋・齊・梁・陳だけ麒麟出現の記事がないのは明らかに何か意圖があったものと考えられる。そしてまさに宋代から帝陵の參道に石獸が置かれて、しかもそれが蕭子顯の『南齊書』により「麒麟」と呼ばれており、麒麟不出現と帝陵麒麟石獸とは何か因果關

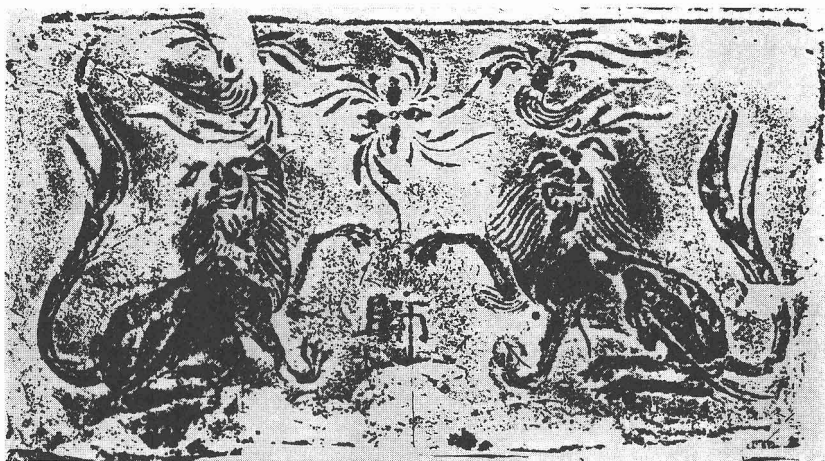
係があったと推測される。上述の如く、蕭子顯が「麒麟」と呼んだのは宋文帝の長寧陵の石獸であり、齊武帝蕭蹟が蕭子顯の父に當たる豫章文獻王蕭疑の東田の邸に行幸するに當たつて東崗上に移轉させた石獸⁽¹⁹⁾である。蕭子顯が「麒麟」と稱するについては確實な根據があったと思われる。

そこで「石麒麟(麒麟)」という言葉が思い起こされる。この言葉は『梁書』卷三、武帝記下において、中大同元年(五四六)に梁文帝の建陵の石獸が動いた時、「墜口の石麒麟動く」と使われており、當時石獸が「石麒麟」と呼ばれたことがわかる。そしてこの言葉はまた『陳書』卷二六、徐陵傳⁽²⁰⁾にもみえる。梁・陳代の文人で『玉臺新詠』を編纂したことでも知られる徐陵(五〇七—五八三)は生まれる時、母の臧氏が夢に五色の雲が化して鳳凰となり左肩に集まるのをみたといわれるが、また幼い頃、當時有道を詠われた釋寶誌上人の所に連れて行かれてみてもらったところ、上人は徐陵の頭を手でさすり、「天上の石麒麟なり」といったというのである。これは廣く人口に膾炙した話であるが、ここで麒麟といわず「石麒麟」といったのは日頃目にした帝陵の麒麟石獸を當然意識してのことであり、その上に「天上」という言葉が冠せられているのである。これは取りも直さず當時帝陵の石獸が天上世界の麒麟とみなされていたことを示し、賢い徐陵をその天上から下された麒麟のようだと⁽²¹⁾いって賞め讃えたのである。つまり帝陵の石獸は鎮墓獸として墓を守る麒麟であるのみならず、天上から下った麒麟という性格も帯びていたというわけである。宋以後の南朝において瑞獸としての麒麟の出現が全く記録されなかったのも、或いは天上の麒麟でありながら瑞獸としてではなく、辟邪の機能をもった鎮墓獸として扱った帝陵の麒麟石獸との関係で忌避されたということが考えられよう。

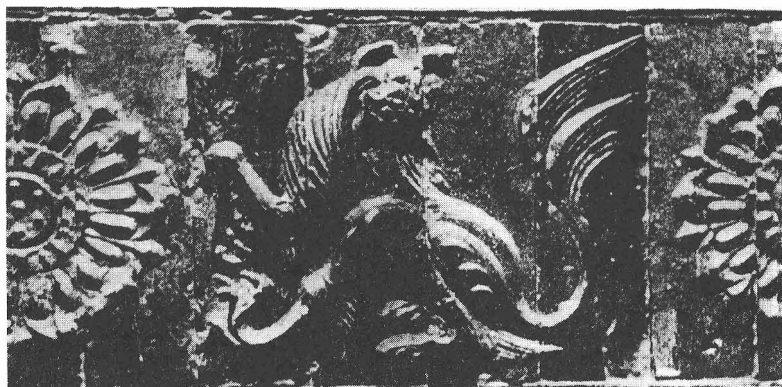
このように南朝帝陵石獸は天から下された麒麟でありながら、全く畫期的なことに、明らかに鎮墓獸として辟邪の機能をもっていた。それと関連しました注目すべきことは、帝陵を含めて石刻や畫像をもった南朝の幾つかの墓では、この麒麟と獅子と四神の三種類の神獸が絶えずセットで備わっていることである。帝陵の場合、後に詳述する如く墓室の周壁に「羽人戲龍圖」⁽²²⁾「羽人戲虎圖」(圖52、53)などの磚畫の形で四神が表現され、獅子は甬道左右壁の一對の磚畫「獅子圖」(圖43)の形で、麒麟は

參道入口に石獸の形で表現された。また鄧縣彩色畫像磚墓の場合も、墓室の四壁に青龍・白虎・朱雀・玄武の四神畫像磚がはめこまれ、上述の如く墓室入口寄りの左右壁に「麒麟圖」、甬道左右壁に「師」と榜題し二頭の獅子を畫いた「獅子圖」畫像磚(圖39)(1)が配されていた。いま一つの例は前節で紹介した常州南郊戚家村畫像磚墓⁽¹⁸⁾で、ここは甬道と墓室の壁に畫像磚がはめ込まれ、一部荒らされていたが、畫像と花文併せて八百五十餘點、三十九種が發掘された。この墓の畫像磚は高浮彫りの型を模印して畫像が立體感に富むことと、一つの畫像が何枚かの磚によつて構成されることが特徴である。ここでも墓室右壁(西壁)の四層から成る第一層中央に虎文畫像磚が發見された他、龍・鳳凰畫像磚が發見されて四神の存在が確認され、獅子畫像磚(圖39)(2)は甬道左右壁第一層と墓室左右壁の第二層に各一對配されていた。そして麒麟は甬道左右壁の第四層と墓室左右壁の第二層とにはめ込まれた一角と二角の一對有翼獸(圖41)(1)、(2)が該當しよう。この有翼獸は一角が左壁、二角が右壁に配され、全體の體型は鹿に似て長い尾をもち、足は單蹄で、脚を上げて驅ける様に表されていた。これを上引『漢書』西域傳の孟康注に従つて天祿(一角)、辟邪(二角)とする説もあるが、南朝帝陵の一角・二角石獸が麒麟である以上、これも麒麟とみなすのが妥當であらう。帝陵石獸の影響を受けて一角、二角の對の麒麟が表されるようになったとみることが出来るのである。

このように南朝帝陵墓では麒麟、獅子、四神の三種が石獸が一種の辟邪の機能をもった神獸として常にセットで表現されているのを見ることが出来る。そして帝陵の場合は、そのうちの麒麟が參道の鎮墓獸として外部に出たものと解することが出来る。蕭秀、蕭景など王侯墓の鬘をもった獅子型石獸(圖25)の場合は、墓室内の様子は荒らされて不明であるが、その獅子が參道の鎮墓獸として外部に出たものと解することが出来る。故に王侯墓の石獸は獅子と稱するのが適當である。そしてその結果、ともに鎮墓獸的性格が益々強調され、帝陵の麒麟は、漢代の墓前石獸と同じように大きく口を開け、本來單蹄であるべき足も五本の指に分かれて爪を鋭く表すようになり、王侯墓の獅子は、古く戰國時代の楚墓の鎮墓獸⁽¹⁹⁾のように魔除けの意味を込めて長い舌をべろりと垂らすようになったと考えられる。これより先、東晉時代には、江蘇鎮江で發見された隆安二年(三九八)



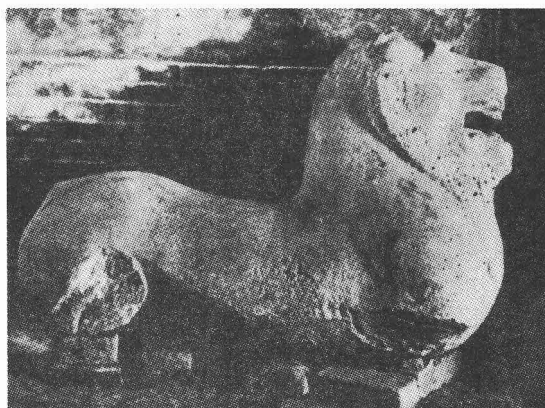
(1) 鄧縣彩色畫像磚墓出土 獅子〔師〕圖(拓本)



(2) 常州戚家村畫像磚墓出土 獅子畫像



(3) 金彩獅虎蟠龍文大盤(部分) 獅子文
前漢 永青文庫



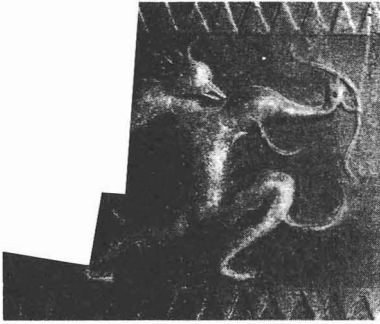
(4) 山東臨淄出土 劉漢作獅子石獸

圖39 獅子

の紀年銘のある東晉畫像磚墓⁽¹⁵⁷⁾のように、四神の他に獸首人身の形をした漢代以來の方相氏型の神獸(圖40(1))や殷周青銅器の饕餮文の系譜を引く獸面(圖40(2))が辟邪に使われたが、それらの勢力が次第に弱まって代わりに麒麟や獅子が加わるようになったのである。

獅子は中國では比較的後發の動物で、西域との交渉によりその文様が流入したり獅子自體が獻上されるようになり、前漢の頃から各種銅器などの文様として表現され始めた。前漢の中山靖王劉勝(元鼎四年卒 前一一三)を葬った河北滿城一號漢墓出土の鎏金銅案足の獅子文様は、まだスキタイ的性格を残しているが、金彩獅虎蟠龍文大盤⁽¹⁵⁸⁾(永青文庫藏 圖39(3))では、内側に二匹の龍、有翼の虎とともに鬣をもった獅子が表されて、次第に中國固有の文様の中にとけ込み、仙人神獸文鏡(和泉市久保惣記念美術館藏)の獅子は龍、虎、羽人などに完全にとけ込んでいる。そして後漢に入ると、先に取上げた石闕に「建和元年(一四七)……孫宗做師子、直四萬」銘のある武氏祠の獅子石獸⁽¹⁵⁹⁾(圖9)のように墓前參道の鎮墓獸として盛んに使われ、解放前に山東臨淄で出土したという一對石獸⁽¹⁶⁰⁾(圖39(4))は頸部左背部に「雒陽中東門外劉漢所作師子一雙」の隸體銘があり、やはり墓の鎮墓獸として使われたものと思われる。獅子は郭璞によれば俊貌ともいい、「虎豹をも食らう」という威猛さが信仰されたのである。南朝の獅子もこの系譜上にあつて辟邪の目的に使われたが、また佛像とともに流入した、佛を守護する獅子の影響もあつたであろう。

いずれにせよ、南朝帝陵の石獸が『南齊書』がそう呼んだように麒麟と呼ばれていたことは確かなことで、それが唐代に入ると、餘り本來の麒麟と似ない石獸を取えて麒麟と呼ばねばならぬ理由が失われ、比較的早く撰述された姚思廉の『梁書』(貞觀十年成 六三六)を除いて、李延壽の『南史』や許嵩の『建康實錄』などは、専ら機能的側面からみて「辟邪」と呼稱を改めたと考えられる。しかし帝陵の參道に麒麟石獸を置く形式は唐代の一部の帝陵にも受け繼がれており、例えば則天武后の母楊氏(孝明高皇后 六九〇追尊)を葬った陝西咸陽市東北の順陵⁽¹⁶¹⁾や、睿宗(七一二卒)を葬った蒲城縣西北の橋陵では、參道の兩側に他の石獸と一緒に麒麟石獸が置かれている。この麒麟石獸は、順陵の場合(圖41(3))は體長四・二〇m、高さ四・一



(1) 獸首人身畫像



(2) 虎首戴蛇畫像

圖40 鎮江東晉畫像磚墓 隆安2年(398)



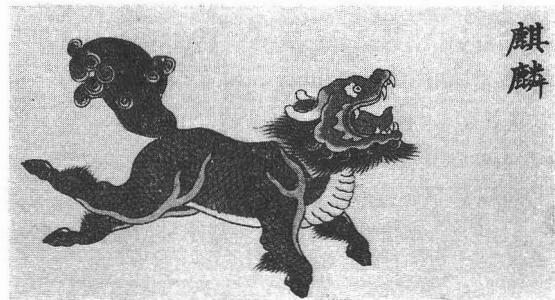
(1) 常州戚家村畫像磚墓 一角獸畫像



(2) 常州戚家村畫像磚墓 二角獸畫像



(3) 唐順陵 麒麟像 高4.15m



(4) 『營造法式』麒麟畫像 北宋 元符3年(1100)

圖41 六朝末・唐・宋麒麟

五m、橋陵の場合は體長三・二〇m、高さ三・〇八mあり、體型は馬に似、いずれも頭頂に灣曲した一角があつて肩に卷雲文の翼をつけ、蹄は馬の圓蹄に作られて行儀よく佇立している。まさに唐初に編纂された『藝文類聚』卷九八に引用する『毛詩義疏』の麒麟の定義、即ち、

麟、麀身、馬足、牛尾、黃色、圓蹄、一角、角端有肉

を十分満たし、麒麟と稱するに足るものといえる。このような紛れもない麒麟石獸が唐の帝陵に置かれたこと自體、それに先立つ南朝帝陵の石獸の麒麟たることを傍證するものといえる。

因みに麒麟の形態はその後、唐と宋を境にして大變貌を遂げる。雙角で、胴體が一面に鱗文でおおわれ、蹄も偶蹄になる。この形の麒麟がいつ頃から現れたかという点、少なくとも北宋末の元符三年（一一〇〇）に李誠によって著された建築技術書『營造法式』の段階にはかなり普及していたものと思われる。『營造法式』卷三三には、裝飾圖案の例として師子の項に麒麟一對（圖41(4)）が載っており、それがこの形である。全體に獅子の體つきをして鬣があり、雙角、偶蹄に作られている。しかしそのような變化もさることながら、一番大きな變化は全身が鱗文でおおわれたことであろう。この麒麟の鱗文については、同時代の勅撰の銅器圖錄『博古圖』に肩部以下を鱗文で飾られた銅瓶が「麒麟然」としているとして、麒麟と名附けられたことによつても確かめられる。そして以後、この雙角・偶蹄・鱗文という麒麟の形式が定式となり、元代の景德鎮で作られた青花麒麟文大盤（トプカピ美術館藏）の麒麟、明の太祖洪武帝（一三六八—一三九八在位）を葬った南京の孝陵參道の蹲坐・佇立各一對麒麟石獸、或いは明の王圻『三才圖繪』や清の徐鼎『毛詩名物圖說』の「麒麟圖」となったのである。思い起こすに、このような麒麟の變貌と混亂は既に南朝の時代から始まっていたのである。

六 南朝陵墓の磚畫

(一) 磚畫の種類

南朝陵墓のうち、これまで磚畫の發見されているのは丹陽の經山周圍にある仙塘灣墓、金家村墓、吳家村墓、南京南郊の西善橋の油坊村大墓、そして同じく西善橋の南朝墓の五基の墓である。このうち丹陽の三基の墓は上述の如く齊の帝陵、南京の油坊村大墓は陳の帝陵とみなされ、西善橋墓は王侯貴族の墓とみなされる。また油坊村大墓で發見された磚畫は、保存狀況の惡さが手傳つて甬道右壁の「獅子圖」だけであり、西善橋墓の磚畫はもとから墓室左右壁の「竹林七賢と榮啓期圖」(以下「竹林七賢圖」と略す)だけであった。これに對して丹陽にある三基の陵の磚畫は種類が豊富で、各陵の保存狀況は必ずしも良くはなかったが、墓葬形式が殆ど同じであるため三基で補い合うことによって全體の内容を知ることが出來、それは油坊村大墓、西善橋墓の磚畫の内容をもカバーするものであった。そこで先ずこの丹陽の三基の陵の磚畫、とりわけ仙塘灣墓の磚畫を取上げて、南朝陵墓の磚畫の内容と配置の仕方を説明しておこう。

仙塘灣墓は參道入口に一對の麒麟石獸(圖14、15)が置かれていたが、そこから緩やかな傾斜地を五一〇m上がった鶴仙塙という岡の中腹(海拔七五m)に墓(圖15(1))が築かれていた。墓(圖42)は稍や東に偏した南向きで、封門牆・甬道・墓室の三部分から構成され、花文磚で三順一丁法を用いて築いていた。三順一丁法とは南朝の磚室墓によくみられる方法で、磚の長側面を内に向け目地を工字形にしながら三重に横積みし、その上に今度は磚の短側面を内に向け一重に縦積みし、これを交互に繰返していく方法である。封門牆は幅七・六m、厚さ〇・六mで、これを二重に磚で築いて、牆と牆の間を〇・二五m開けて防濕のために石灰を詰めていた。そして甬道は長さ二・九m、幅一・七二m、高さ二・九二mで、天井はアーチ形をし、二枚

の扉をもち半圓形の門額に人字形の斗拱をもった石門が二重に設置されていた。二重石門は南朝の帝陵に特有のものである。また墓室は長方楕圓形で、奥行九・四m、幅四・九m、天井は崩れていたが復原するとドーム形をなしており、高さは四・三五mであった。床は席文磚が九層に敷かれ、その中間の層に方形の排水溝を墓室の四周と中央にめぐらして、前部と後部の陰井口で一旦集めた水を更に甬道の席文磚の下を通して、墓の外一九〇m離れた池へと導いていた。墓室の壁は、磚畫以外の部分は八瓣或いは六瓣の蓮華文や雙錢文など、十種類の異なった花文磚で裝飾され、その側面には磚の規格大小を記す三十三種の文字符號が陽刻で模印されていた。そして木棺は腐ってなくなっていたが、二個の頭骨破片が発見され夫婦合葬墓であることが判明した。

さて磚畫は、先ず墓室部分では左右兩壁(圖44)に上下の二段に分かれはめ込まれていた。仙塘灣墓では比較的完全なのは五幅しかなかったが、金家村墓、吳家村墓のそれを參考に復原してみると、各壁五幅ずつ、全部で十二幅から成っていた。左右壁の磚畫は互いに相對應する形で配置されており、右壁(西壁)は上段の入口側に「羽人戲虎圖」、奥の側に「竹林七賢圖」の嵇康から王戎に至る前半がはめ込まれ、下段は「出行圖」を構成する四幅、即ち入口側から順に「騎馬武士」「執戟侍衛」「執扇・蓋侍從」「騎馬樂隊」の各圖が並べられていた。これに對して左壁(東壁)は、下段の「出行圖」は右壁と全く同じで左右對稱に配されていたが、上段は入口側に「羽人戲龍圖」、奥の側に「竹林七賢圖」の向秀から榮啓期に至る後半がはめ込まれていた。大きさは金家村墓、吳家村墓の例では、「羽人戲龍・戲虎圖」が高さ〇・九四m、長さ二・四〇m、「竹林七賢圖」が片面各々高さ〇・八五m、長さ二・五〇m、「出行圖」は上段の「竹林七賢圖」などと下に〇・一五m隔て、全長は四・九七mあったが、各畫面と畫面の間は花文磚で隔てられ、高さは〇・三四mから〇・四五mであった。また磚は短側面にその磚の規格大小を記す文字符號が模印されていた他、磚畫の磚には側面に畫の名稱と編號を記す文字が刻まれており、後者は特に磚畫の内容を知る上で重要な資料である。

次に甬道部分の磚畫は、仙塘灣墓は全滅であったが金家村墓がよくのこっており、入口と第一石門の間の天井には「日月圖」

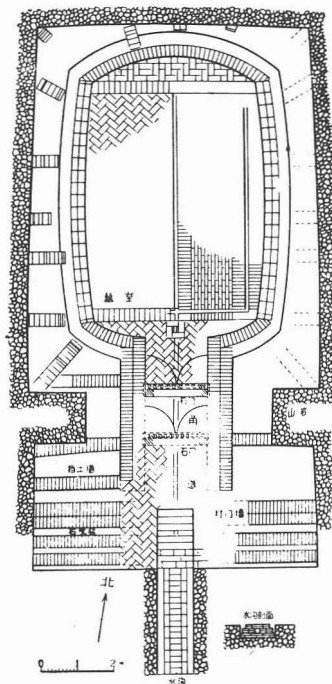


圖42 丹陽仙塘灣墓平面圖

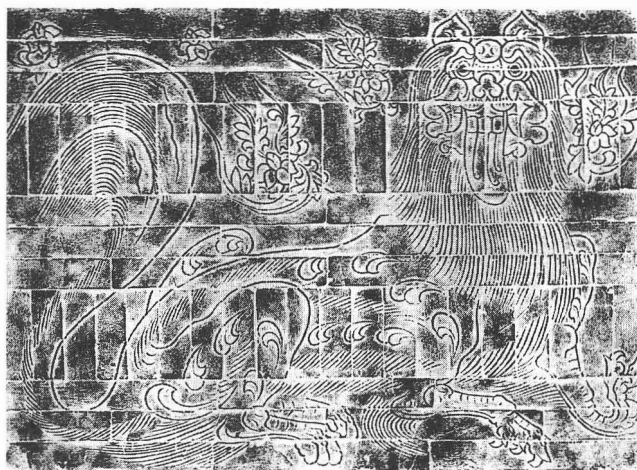


圖43 丹陽金家村墓甬道東壁磚畫 獅子圖 (拓本)

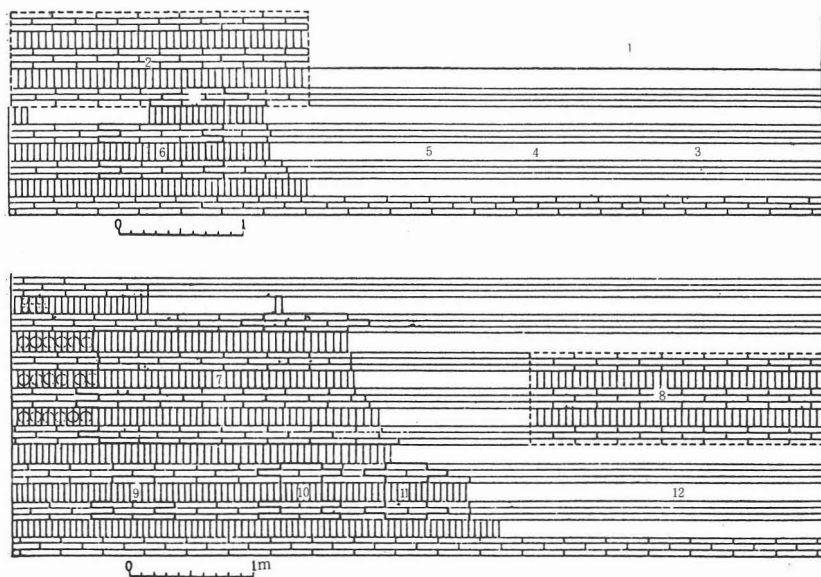


圖44 丹陽仙塘灣墓室磚畫復原配置圖 上一左壁立面 下一右壁立面
1. 羽人戲龍圖 2. 8. 竹林七賢圖 3. 9. 騎馬武士圖 4. 10. 執戟侍衛圖
5. 11. 執扇・蓋侍從圖 6. 12. 騎馬樂隊圖 7. 羽人戲虎圖

があり、左壁（東壁）寄りに太陽、右壁寄りに月が配されていた。ともに直径一〇cmの圓形に作られ、その中に太陽は羽根を廣げた三足鳥、月は桂の樹とその下で仙藥を搗く玉兔が畫かれていた。また第一石門の前の左右兩壁には「獅子圖」（圖43）があり、鬣をもった獅子が口を開け舌を垂らし、尾を振り上げて蹲っていた。畫面の大きさは高さ〇・七七m、幅一・一三mあり、發見した時には兩耳、兩眼、鼻、舌は紅く、兩頬は白く彩色されていたという。そして今一つ第一石門と第二石門の間の左右壁には「門衛武士圖」が配され、冠をかぶって肩を鎧で覆い、長劔を杖に柄を撫す武士が畫かれていた。大きさは高さ〇・七九m、幅〇・三一mであった。

南京の油坊村大墓で發見された「獅子圖」⁽¹¹³⁾ 磚畫も第一甬道部のものであり、左壁（西壁）は壞れていたが、右壁（東壁）の獅子はかろうじて後半身だけ破壊を免れた。大きさは少し小さく、高さ〇・六五m、幅は一・〇五mであった。また南京の西善橋墓の「竹林七賢圖」⁽¹¹⁴⁾ 磚畫も墓室左右壁のものであり、但しここでは床から〇・五mの位置に高さ〇・八m、高さ二・四mのこの磚畫だけがはめ込まれていた。この磚畫はどの墓にも増して保存状態がよく、實に貴重な發見であった。

さて、これらの陵墓で發見された磚畫の種類と出土時の状況を墓ごとに纏めて示すと以下の通りである。（毀—かなり破損していたことを示す）

仙塘灣墓 「羽人戲虎圖」（毀）「竹林七賢圖」（左壁—毀）「騎馬武士」（右壁）「執戟侍衛」（右壁）「執扇・蓋侍從」（右壁）「騎馬樂隊」（左壁）

金家村墓 「日月圖」「獅子圖」（右・左壁）「門衛武士圖」（右・左壁）「羽人戲龍圖」（毀）「羽人戲虎圖」「竹林七賢圖」（右壁—毀、左壁）「騎馬武士」「執戟侍衛」「執扇・蓋侍從」「騎馬樂隊」（ともに右・左壁）

吳家村墓 「羽人戲龍圖」「羽人戲虎圖」（毀）「竹林七賢圖」（右壁—毀、左壁）

油坊村大墓 「獅子圖」（右壁—毀）

西善橋墓 「竹林七賢圖」（右・左壁）

いま、これらの磚畫のうち主だったものを圖像學的に内容、意味を解明してみるとともに、先の石獸を通してみた帝陵の編年と関連し、改めて制作年代を探ってみたい。

(二) 出行圖・門衛武士圖

金家村墓の墓室左右壁⁽¹⁵⁾には、下段に「騎馬武士」「執戟侍衛」「執扇・蓋侍從」「騎馬樂隊」から成る「出行圖」が入口の方を向いて左右相稱の形で表されていた。この「出行圖」は仙塘灣墓にも一部のこっており、左壁は「騎馬樂隊」だけであったが、右壁は「騎馬武士」「執戟侍衛」「執扇・蓋侍從」の三幅がのこっていた。このように貴族や皇帝が行幸、出御、狩獵などのために隊伍を組んで出かける様を畫いた「出行圖」は、後漢代には墳墓の壁畫や畫像石、畫像磚などによく題材とされたが、南朝においても纏まった大畫面はなさないけれども表現され、鄧縣彩色畫像磚墓などにみられる。『宋書』卷五一、劉韞傳⁽¹⁶⁾には、宗室の劉韞が湘州や雍州に刺史として赴任していた時、畫の上手な者に自分の「出行鹵簿の羽儀」を畫かせ、常に披いて樂しんだという。また『歷代名畫記』卷三、「述古之祕畫珍圖」の項には、「諸の鹵簿圖、備さには錄さざれども、篇目至って多し」とあり、多分圖卷形式のものはかなりあったと思われる。當時の風俗を知るには恰好の資料である。

先ず「騎馬武士圖」(圖45)は、鎧で完全武裝した馬にこれまた鎧で完全武裝した武士が弓を首に掛け腰に環頭の劍を帯びて騎乗する。この磚畫の磚側刻字に「右具張第二」⁽¹⁷⁾とあるが、かような馬の鎧は當時具裝と呼ばれ、「具張」は具裝のことと思われる。『南齊書』卷七、東昏侯紀⁽¹⁸⁾は、東昏侯が騎馬した時の有様を述べ、「馬は銀の蓮葉の具裝鎧を被り、雜羽と孔雀の寄生あり」という。銀製の小札の馬鎧をつけ、雜多な羽根や孔雀・翡翠の羽根で馬の腰に立てる寄生⁽¹⁹⁾の飾りを作っていたのである。類似的の具裝鎧は鄧縣彩色畫像磚墓の「戰馬圖」(圖46)にもみられ、楊弘氏⁽²⁰⁾はそれを分解して面簾・鷄頭・當胸・身甲・搭後・寄生の六部から成るとしている。また武士のつける鎧は襦褌鎧(兩當鎧)と呼ばれ、『釋名』⁽²¹⁾に「襦褌、その一は胸に當て、

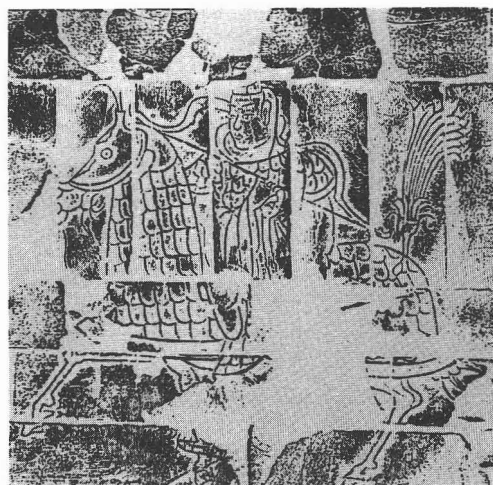


圖45 騎馬武士圖磚畫(拓本) (左) 金家村墓西壁 (右) 仙塘灣墓西壁



圖46 鄧縣彩色畫像磚墓 戰馬圖 長38cm



圖47 丹陽金家村墓
墓室西壁磚畫執
戟侍衛圖(拓本)

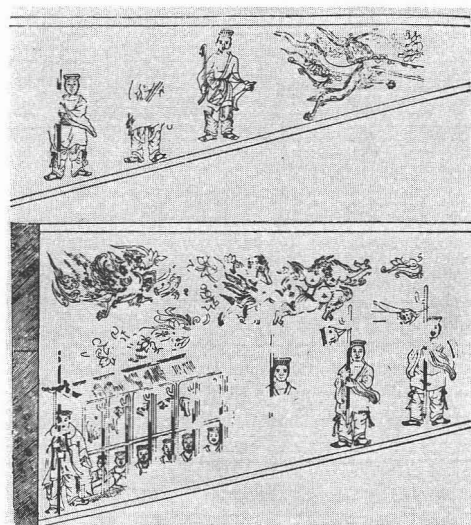


圖48 河北磁縣茹茹公主墓墓道東壁壁畫 儀仗圖
(模本) 東魏

その一は背に當てるなり」とあるように、前と後から當て肩で吊ったのである。磚畫の武士は更に披膊をつけて上膊部を保護し、下は不鮮明であるが乗馬用の袴褶をはいたものと思われる。兜の代わりに冠をつけているのは、他の「執戟侍衛」「騎馬樂隊」と同じく儀仗兵だからである。

次に「執戟侍衛」(圖47)は、高い筒形の冠を被って簪で留め、袖の廣い長袍を着て、足には先の反り返った履をはいている。手にした柄の長い武器は矛の刃の下方にまた刃が横に伸びてやはり戟と思われるが、仙塘灣墓の磚側刻字にも「右□戟第三」とあり、戟の一種に違いあるまい。刃の先端とその付け根から垂れる總飾りは儀仗用だからである。このような「執戟侍衛」は皇帝の出行にはつきもので、『晉書』輿服志には「中朝大駕鹵簿」⁽¹³⁾として皇帝の鹵簿の大きかりな内容が詳細に記されているが、その中に「戟吏」と稱するものがあり、これに該當しよう。また一九七八年に河北省磁縣で發掘された東魏武定八年(五五〇)の茹茹公主墓⁽¹⁴⁾は、墓道、甬道、墓室で壁畫が發見されたけれども、その墓道左右壁の壁畫(圖48)は「青龍・白虎圖」の他に、宮城や貴族の邸宅の正門左右に立てる檠戟架と武器を持って立つ八人の儀衛兵を畫いていた。この八人の儀衛兵のうち五人は、獸面を表した幡のついた戟を持っており、これも磚畫と同じく出行の際に行列に従う儀仗用の戟吏であろう。他に片肌脱いで棍棒状のものを持った二人は、行列の先頭を行き先拂いする者と思われる。

また「執扇・蓋侍從」(圖49)は前の「執戟侍從」と異なつて冠をつけずに、代わりに幘をつけ、上衣と褲子を着て、褲子の途中をくくり、淺鞋をはいている。より身分の低い者であろう。先を行く「執扇侍從」の扇は、長い柄の先に羽根を半圓狀に大きくめぐらしつけたもので、一般に障扇(鄣扇)と呼ばれるが、雉の羽根で作ったものを特に雉尾扇と呼ぶ。『古今注』⁽¹⁵⁾には「障扇は長扇なり、漢の世、豪俠の雉尾を象りて長扇を製するもの多きなり」とある。この圖は皇帝の「出行圖」であるから扇も雉尾扇と考えられる。『南史』卷三七、荀伯玉傳⁽¹⁶⁾には、齊の高帝蕭道成が皇太子蕭蹟の東宮に行幸し玄圃園に遊んだ時、高帝の皇太子に對する怒りを靜めるために、「長沙王晃が華蓋を促り、臨川王映が雉尾扇を執り、聞喜公子良が酒鎗を持ち、南郡王が行酒した」という。同種の雉尾扇は、洛陽の龍門石窟賓陽中洞左右前壁に浮彫りされた「皇帝・皇后禮佛圖」⁽¹⁷⁾(圖49(右))

にも各々二つずつみられる。賓陽中洞は宣文帝の時に北魏朝廷が造營に取掛かった石窟である。しかし雉尾扇は貴族には贅澤とみなされ、『宋書』卷六一、江夏王義恭傳⁽¹⁸⁾には、劉義恭などの提案した九條に基づく二十四條の節約令として、公主王妃は「鄴扇は雉尾を得ず、劔は鹿盧形を得ず」と上奏され、可とされている。また「執蓋侍從」の持つ蓋は、上の圓形の絹傘の周りにリボンを垂らし、柄にも總を垂らしているが、柄が曲がっているところから特に曲華蓋という。曲華蓋は『晉書』輿服志の「中朝大駕鹵簿」にも認められ、賓陽中洞の「皇帝・皇后禮佛圖」にも畫かれて皇帝と皇后にさしかけられている。

最後に「騎馬樂隊」(圖50 (1))は、三騎が並んで、奥の一騎は馬の背に建鼓を据えて體を反り返らせ袖を振り上げるようにして桴で打鳴らし、中間の一騎は左手に排簫を持って吹き、手前の一騎は口の近くに手をやって笛を吹いている。このような軍樂隊は當時鼓吹と呼ばれ、『隋書』音樂志⁽¹⁹⁾には、陳の宣帝の太建六年(五七四)、蔡景歷が上奏して復活した鼓吹の制度が記され、皇帝の鼓吹は一部十六人、即ち簫十三人、笛二人、鼓一人で構成し、以下東宮は簫を二人、笛を一人減らし、諸王は更に簫一人を減らし、庶姓は更に簫一人を減らしたとある。陳代の軍樂隊が建鼓、排簫、笛の三種の樂器で編成されたことがわかるとともに、その編成が少なくとも南齊にまで遡ることがこれによって知れたのである。建鼓は漢代以來の樂器で、成都楊子山一號後漢墓で出土した「鼓吹圖」畫像磚(圖50 (2))などにもみられ、ここでは六騎で編成してうち五騎が奏樂し、前列に鏡と排簫、後列に鏡、排簫という配置で、建鼓は後列奥にみえる。このように漢代の鼓吹は建鼓、鏡、排簫、そしてこの圖にはみえないが笛の四種で編成され、南齊になると鏡が消えている。また建鼓自體も若干變化し、漢代畫像磚では太鼓の上に左右に分かれた大きな羽葆を立てていたが、ここでは上に小振りの圓形の羽葆を二重につけてその頂きに鳥を飾り、縦に置いた大太鼓の下に小太鼓を横に置いている。また排簫は竹管を二十三ないし十六並べて作り、中原の傳統的な樂器であるが、⁽²⁰⁾笛は西北の遊牧民族が傳えて胡笛とも呼ばれ、蘆葉を卷いて作った一種の管樂器である。いずれにしてもここに鼓吹を三騎だけで表したのは省略によるもので、先に引用した『晉書』輿服志の「中朝大駕鹵簿」でも、先頭に鼓吹一部十三人が中道を行くとしている。



(左) 丹陽金家村墓室西壁磚畫 執扇・蓋侍從圖(拓本)
(右) 龍門賓陽中洞前壁浮彫 皇帝禮佛圖(模本)

圖49 障扇 曲華蓋

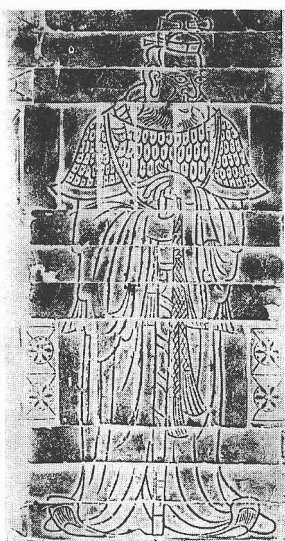


(1) 丹陽金家村墓室西壁磚畫
鼓吹圖(拓本)



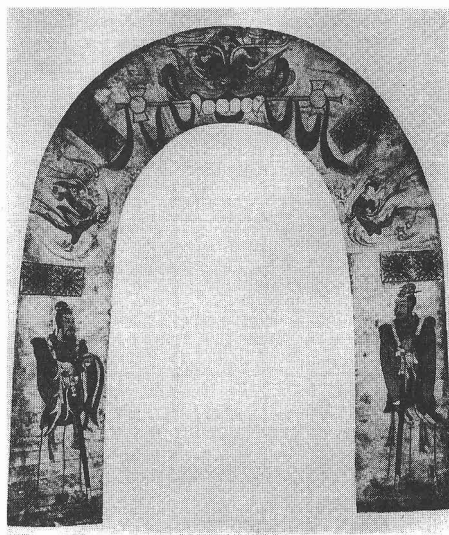
(2) 成都楊子山一號後漢墓出土 鼓吹圖
畫像磚(拓本)高38.8cm

圖50 鼓 吹



(左) 丹陽金家村墓甬道
東壁磚畫 門衛武
士圖(拓本)
(右) 鄧縣彩色畫像磚墓
券門壁畫 門衛武
士(模本)

圖51 門衛武士



さて、「出行圖」は仙塘灣墓と金家村墓で出土し、兩墓は「騎馬武士」「執戟侍衛」「執扇・蓋侍從」の三點が共通していたが、いまそれらを比較してみると、同じ圖柄ながら處理の仕方において相當の開きのあることがわかる。「騎馬武士」(圖45)を例に取れば、金家村墓の方が杜撰さが目立ち、仙塘灣墓(圖45(右))では馬の具裝鎧と武士の襦襜鎧、或いは具裝鎧自身も頸、胸、腰などの部位がきちんと書き分けられているのに對し、金家村墓(圖45(左))の方は鎧の小札を殆ど全て一様に表現しているため不分明で紛らわしく、ために全體に平板で奥行が感じられない。仙塘灣墓では金屬の小札の質感すら感じられる程で、「執戟侍衛」⁽¹⁹⁾の衣のゆったり垂れた質感もみごとである。また馬の腰に立てた寄生の飾りは、仙塘灣では一本の花の如く、莖、萼、花瓣の各部が丁寧に表示されているのに對して、金家村では稻穂を無造作に束ねたように省略されている。違ひはまた人物自體にも認められ、仙塘灣は概して若者の姿に畫かれるのに對して、金家村の人物は概して髭をはやした老人に近い姿に畫かれている。これは後述する「竹林七賢圖」にも共通してみられることである。要するに仙塘灣墓の潑刺とした丁寧な畫像が金家村墓へと次第に手抜きされて崩れていったものと解せられ、やはり仙塘灣墓が先に營まれたと考えられよう。

ところで、以上の「出行圖」は墓室内であったが、金家村墓甬道の第一石門と第二石門の間の左右壁には髭をはやした「門衛武士圖」(圖51(左))が一對表されていた。この武士は頭に冠をつけて肩を鎧で覆い、下は袴褶をつけて先の跳ね上がった履をはき、直刀の劒を杖にして柄を撫していた。このような門衛の武士は鄧縣彩色畫像磚墓の券門(圖51(右))、後述する洛陽出土の北魏畫像石棺の前檔(圖59)などに畫かれ、また立體像としては隋の河南安陽張盛墓出土の白磁黑彩武官俑⁽¹⁹⁾、隋の山東嘉祥英山出土の石侍衛俑⁽¹⁹⁾などがある。いずれも冠、劒、袴褶、履が共通するが、この門衛武士は他の武士が革製襦襜鎧をつけるのに對して披膊の附いた金屬製の魚鱗甲襦襜鎧をつけ、劒は柄の先が丸く(環頭)總飾りが垂れている。恐らく帝陵だけに許されたものであろう。また袴褶については、『晉書』卷二五、輿服志に「袴褶の制、未だ起る所を詳かにせず、近世の凡そ車駕親戎、中外の戒嚴これを服す」とある。

(三) 羽人戲龍・戲虎圖

「羽人戲龍・戲虎圖」は墓室左右壁の上段前部に表され、仙塘灣墓では「羽人戲虎圖」のみで、しかも圖の後半部が壊れていたが、吳家村墓と金家村墓では「羽人戲龍圖」「羽人戲虎圖」の雙方が発見された。しかし金家村墓の「羽人戲龍圖」は磚の表面が損なわれていて圖の内容は餘り判然としなかった。そこで、先ず「羽人戲虎圖」の方を、最も保存の良かった金家村墓のそれ(圖52)を例に説明すると、横長の畫面の大部分を占めて一頭の胴の長い虎が左方へと驅ける様に畫かれ、その前に羽衣をつけて先導する羽人、そして龍の上方には天衣をつけて舞う三人の天女が配される。虎は頭頂から尾の先まで體一面に縞の文様をつけ、肩に火焰のようにたなびく四本の羽根、四肢の肘に羽毛が表され、首の後ろと腰、尾の三箇所には小さな炎がちろちろ燃えている。胴の下に雲氣が幾つか風になびいており、空を驅けているのがわかる。そして羽人も大股で空を驅けており、頭頂に羽根を三本挿して履をはき、肩・肘・膝に羽毛のついた上下の羽衣を着ている。虎の方を振向きながら、左手を差出して虎を手招きし、右手には丈の長い草の端を掴んで虎の鼻先にかざしている。但し羽人の持ち物は吳家村墓ではこれと異なり、左手は煙の出ている柄香爐を持って虎に差出し、右手は丈の長い草の束を掴んで振回している。いずれにしても草は先端に妖しい花をつけているところから睢寧縣九女墩漢墓畫像石(圖36(3))でみた仙草と同じものであり、この仙草や香を餌に虎を誘導しているものと思われる。また天女は三人空中を舞って天衣の飄帶や裾を翻しており、先頭の天女は一際豪華に鳥の羽で袖を飾り、二番目は壊れて不明であるが三番目の笙を吹く天女とともに先頭の天女に従っている。しかし吳家村墓の場合とは少し異なり、天女は三人とも衣装が同じで、一番目は煙の出ている盤付きの三脚香爐を胸の所で捧げ、二番目は持ち物が不明であるが、三番目は小さな鈴を吊るした棒を右手に持っている。その他、虎や羽人の周りには雲氣、散華、そして羽毛をつけた花が舞っている。この構成方法は吳家村墓左壁に唯一良好に保存された「羽人戲龍圖」(圖53)もほぼ同じであるが、右壁の「羽人戲虎圖」とは、二本の長い角をもって首から尾の先端まで鱗文でおおわれた龍以外にも、上方の三人の天女

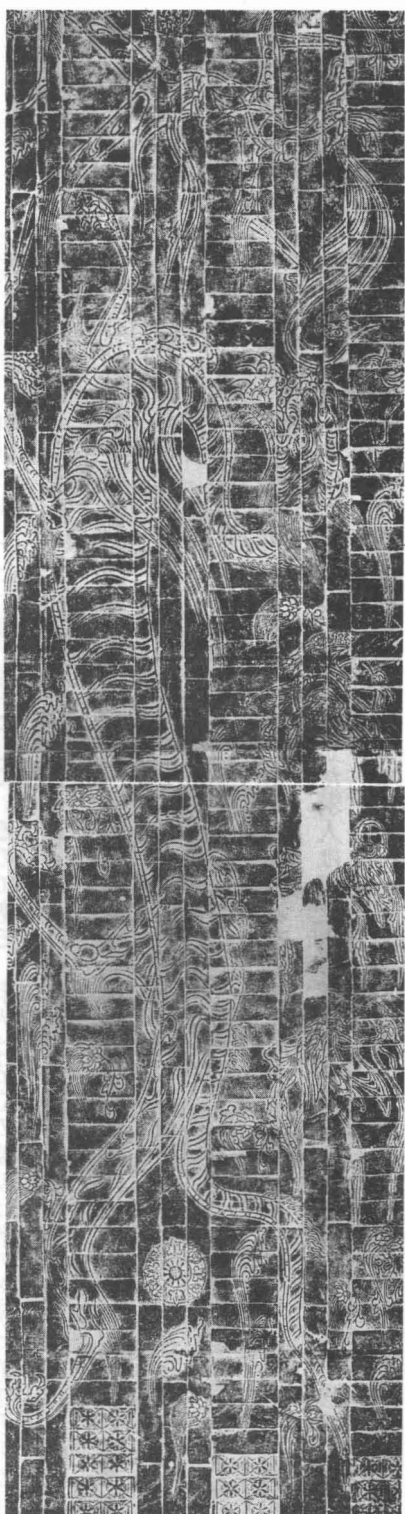
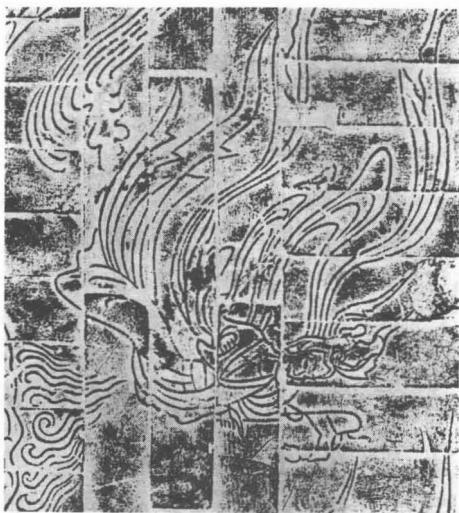


圖52 丹陽金家村墓墓室西壁磚畫 羽人戲虎圖 (拓本)



(1) 天人



(2) 龍

圖53 丹陽吳家村墓墓室東壁磚畫 羽人戲龍圖 (拓本)



(3) 羽人

南朝帝陵の石獸と磚畫

は二番目が右手に何かを盛った盤を捧げている他、三番目(圖53(1))が磐を吊るした棒を持っているのが異なっている。

それでは、この「羽人戲龍・戲虎圖」は何を表しているのであろうか。これについて死者の靈魂の仙界への飛翔の有様を畫いた「昇仙圖」とする見方があるが、そうではあるまい。報告によると、吳家村墓「羽人戲龍圖」の磚側に「大龍⁽¹⁹⁸⁾」と刻字したものがあり、仙塘灣墓「羽人戲虎圖」の磚側にも「大虎上行第二⁽¹⁹⁷⁾」(圖54(左))と刻字したものがあつた。故に磚畫の龍と虎が工人によって「大龍」「大虎」と呼ばれていたことがわかるが、更に注目されるのは、仙塘灣墓で發見された磚の破片に「朱鷹⁽¹⁹⁹⁾」(圖54(中))と刻字したものがあり、また林樹中氏が仙塘灣墓で見つけた磚畫破片の一つ(圖54(右))に六角の龜甲文が表され、その別の側面に「玄武」⁽¹⁹⁹⁾と刻字されていたことである。つまり林樹中氏もいうように、「大龍」「大虎」「朱鳥」「玄武」合わせて、青龍・白虎・朱雀・玄武の四神を表現したとみるのが妥當で、左壁の大きな龍は青龍、右壁の大きな虎は白虎であり、更に前壁と後壁には朱雀と玄武を表していたものと考えられる。仙塘灣墓墓室の前壁と後壁の發掘時の状況については發掘報告書は何も觸れていないが、恐らく既に壞れていたためと思われる。

それでは羽人は何かというと、天上界において青龍・白虎の神獸を世話したり誘導したりする役の仙人であり、仙人のしるしとして羽毛のついた羽衣を着、神獸の餌として仙草を手に行っているのである。羽人は成立の當初は體の各所に直接羽毛が生え、『楚辭』遠遊の王逸注に「人道を得れば身に毛羽を生ず⁽²⁰⁰⁾」とあるように、それが道を體得したことの證とされた。例えば前漢の文帝十二年(前一六八)より少し後の湖南省長沙馬王堆一號漢墓の朱地彩繪棺左側板漆畫では、右側の崑崙山の巖に見立てられた龍の胴體を攀じ登ろうとしている神仙の羿(圖55(1))は、上半身裸で肩・肘・膝など各所に羽毛が生えている。しかしその後、羽人は羽衣という鳥の羽毛のついた衣を着るようになり、西安の漢長安城遺址から出土した前漢の「青銅羽人像⁽²⁰²⁾」(圖55(2))は、襟や帶が表され、肩や裾の部位に羽毛がついて明らかに羽衣を着ており、前漢中期の洛陽卜千秋墓主室頂脊に畫かれた「昇仙圖」壁畫⁽²⁰³⁾でも、長い柄の節を持ち頭を被髪にした羽人は、上衣の肩と下裳の裾に羽毛がみられる。後漢の睢寧縣九女墩畫像石の麒麟とともに登場した羽人(圖36(3))も同様である。これらの羽人は、洛陽卜千秋墓や睢寧九女墩畫像石の



(左) 羽人戴虎圖磚側刻字 (中) 朱雀圖磚側刻字 (右) 玄武圖龜甲文及び磚側刻字

圖54 仙塘灣墓磚側刻字(拓本)



(1) 長沙馬王堆一號漢墓朱地彩繪棺左側面漆畫 羿(模本)

(2) 西安長安城遺址出土 青銅羽人像 高15.3cm 前漢

(3) 營城子二號墓主室奧壁壁畫 羽人(模本)

圖55 羽人



圖56 雲南昭通後海子東晉墓西壁上層壁畫 青龍・玉女(模本)



圖57 鄧縣彩色畫像磚墓 天人圖(拓本) 長38cm

羽人が天帝の使者のしるしとして三重の毛のふさのついた節を持つように、天上界に住んで天帝から遣わされた者であり、不死を屬性として天に舞い上がるのが出来ることから仙人（僊人）⁽²⁸⁾と呼ぶことが出来る。これら仙人の役目は、卜千秋墓の羽人が龍・麒麟・鳳凰・騶虞などの瑞獸を先導し、九女墩畫像石の羽人が麒麟を誘導するように、天上界の神獸の世話もその一つである。一九三一年に遼寧省旅順の北方の營城子後漢磚室墓⁽²⁹⁾で發見された「昇仙圖」壁畫では、羽衣をつけた仙人（圖55）が鳳凰に餌の仙草を與えており、南陽や山東の漢代畫像石でも羽人は龍、鳳凰、虎などと一緒に頻繁に登場し仙草をその口に差出している。そして一九六三年に雲南省昭通後海子で發見された東晉壁畫墓の右壁上層壁畫⁽³⁰⁾には、「右青龍」と題された龍に天女（圖56）が草の束を差出している圖があり、榜題に「玉女以草授龍」と書かれていた。この「玉女」は羽衣をつけていないけれども、天上にあって青龍の世話をする仙人の一種であろう。「羽人戲龍・戲虎圖」の羽人もこれらの系譜の延長上にある仙人といえる。

また上方に舞う天女は、仙塘灣墓で發見された磚側刻字に「天人右」⁽³¹⁾と書かれているところから、天人とするのが正しく、鄧縣彩色畫像磚墓で發見された「天人圖」畫像磚（圖57）にも、二人の天女が天衣を翻して舞い降りるところが畫かれ、「天人」とはっきり題記されていた。仙人との違いは羽衣の代わりに天衣を身に纏っていることであり、敦煌莫高窟などの石窟壁畫に佛を莊嚴するために頻繁に表された飛天などと同じく、肩や腕に掛けた天衣や裾を翻して飛んでいる。明らかに佛教の飛天から形を借りてきたものであり、樂器を演奏したり供物を捧げるのも飛天と同じで、ここでは青龍・白虎の圖を威儀あらしめるべく列を組んで付き従っているのである。佛教の影響は空中を舞う散華にもみられよう。いずれにしても「羽人戲龍・戲虎圖」の主人公は青龍と白虎であり、それぞれ南向きの墓を前提にして左壁（東壁）と右壁（西壁）に配されているように、それぞれの方角を守護するために畫いた「四神圖」の青龍・白虎とみることが出来る。

ところで、この南朝帝陵墓室の「四神圖」と著しく似た畫像が北朝の畫像石棺にもみられ、墓室磚畫と石棺線刻畫という違いこそあれ、「四神圖」各圖のみならず全體の構成も著しく似ている。「羽人戲龍・戲虎圖」を考える際に大いに参考にならう。

この種の畫像石棺は現在數點確認されており、一九七七年に洛陽東郊瀘河東磚瓦廠で發見された北魏の畫像石棺⁽²⁸⁾を例にとろう。この石棺は青色石灰岩製で、蓋板・底板・左右側板・前後檔板の六枚の石板から成り、大きさは棺自體が長さ二・三三m、高さ〇・八六m、前部の幅が〇・九〇m、後ろの幅が〇・八〇mであった。そして蓋板の表は素面であったが、裏に太陽と月が朱繪されて、その他の石板には全て畫像が刻されていた。畫像の内容は、前檔(圖59)の下部中央に門の扉が朱繪されて、その左右に劍を杖に柄櫓鎧をつけた武士が各々一人線刻され、上部中央に蓮華座附きの寶珠、左右に鳳凰が一羽ずつと宙に舞う花文が線刻されていた。そして後檔には三幅の畫面があり、中央の幅に「孝孫原穀」の孝行故事(『孝子傳』『太平御覽』卷五一九所引)を扱った「孝子圖」が畫かれていたけれども、左右の二幅は途中で大半が削られているところから、もともとこの後檔板はこの石棺とは無關係で、何等かの理由で轉用されたものと考えられる。また棺の底板は前・後部、左・右側部に分かれ、前・後部はともに左に龍、右に虎を配して、その中間に前部は獸面、後部は一種の唐草文を置き、左・右側部はそれぞれ十二の格に區分して格内に合計二十四の畏獸を線刻していた。

かように蓋の裏の「日月圖」や前檔の「門衛武士圖」など、南朝帝陵の磚畫と題材的に頗る共通するが、更に細部にわたって共通していたのが左右側板の畫像であった。先ず左側板(圖58)は、長さ二・二四mの横長の畫面に胴の長い龍の空を驅ける様が大きく表されて、右手に團扇の先に羽毛のついた麈尾扇、左手に雲氣のようなものを持った男性が一人騎乘し、前方にはこれを誘導する二人の仙人(圖60(1))が各々三本の羽根を挿した冠をつけて履をはき、麈尾扇と草狀のものを持って驅け、少し後方龍の左傍らにも仙人が驅けている。そして龍の後ろには小龍に騎乘した六人の天人樂隊(圖60(2))が従い、建鼓を打鳴らしたり排簫(三人)や箏(二人)を吹いたりしている。畫面はその他にも畏獸、雲氣、散華などで埋め盡くされて、更に前後兩端にはたたなわる険しい山岳に樹木が生えている。右側板も畫面の構成の仕方はほぼ同様であるが、こちらは龍に合わせ、胴の長い虎には大きな鬚に櫛を挿して首飾りをつけた女性(圖61(1))が騎乘し、前方の二人の仙人(圖61(2))は花の蕾狀の冠をつけて、うち一人は柄香爐と草狀のものを持ち、横傍らの仙人は高い筒狀の冠を被っている。また後方の陪從は少し大き

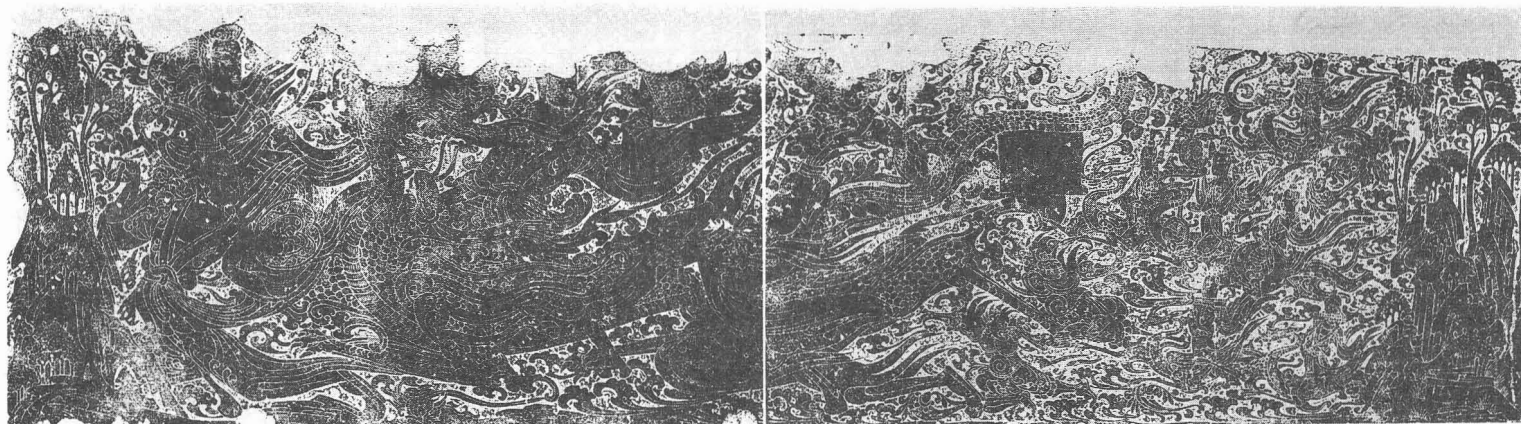


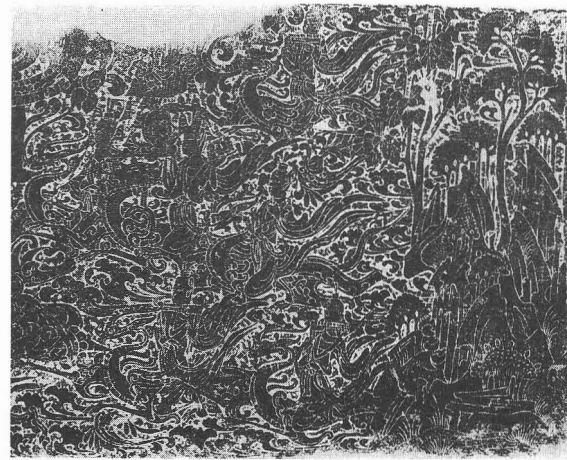
圖58 洛陽北郊出土北魏畫像石棺左側面 仙人騎龍圖（拓本）長224cm



圖59 洛陽北郊出土北魏畫像石棺前檔
門衛武士 朱雀（拓本）幅56cm



(1) 仙人



(2) 伎樂天人

圖60 洛陽北郊出土北魏畫像石棺左側面 仙人騎龍圖（拓本）

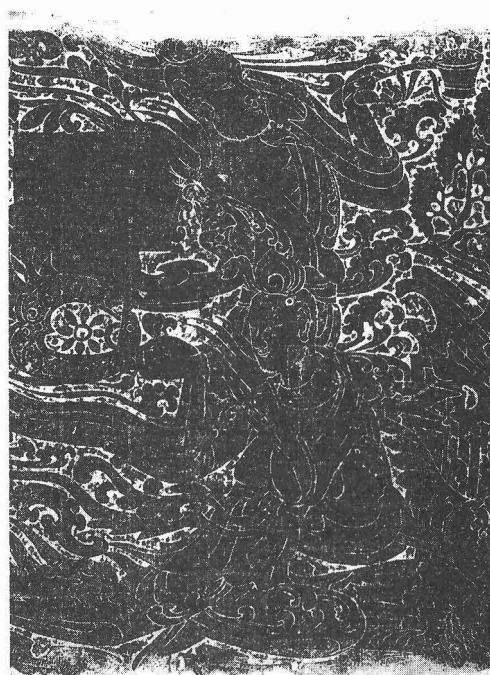
な鳥禽に騎乗して天衣をつけた二人の仙女と、少し小さな蓋附きの鳥禽に騎乗した三人の天女が配され、樂器などは一切持っていないようである。そして左側板と同じく間に大小様々な畏獣がおり、雲氣や散華が配される。これらをみてもわかるように南朝帝陵の「羽人戲龍・戲虎圖」とモチーフが驚く程類似しており、龍・虎・仙人・天人はいうまでもなく、雲氣や散華が共通し、更に前で誘導する仙人の頭頂の三本の羽根や手に持った草・柄香爐などの細部まで共通していた。

この左右側板の「仙人騎龍・騎虎圖」とでもいうべき圖を「昇仙圖」とみなす説が廣く行われているが、やはりこれも「羽人戲龍・戲虎圖」と同じく「四神圖」のうちの青龍・白虎とみなすべきであろう。「昇仙圖」とみなす説は、龍・虎に騎乗する男性と女性をこの墓の主人公夫婦とするけれども、これは承伏し難い。もともと石棺は一人を埋納するためのものであるから夫婦二人が畫かれること自體奇妙であるが、更に騎乗している人物を詳しく觀察すると、例えば男性の場合(圖58)は、前と傍らを行く三人の仙人と同じくローブのような羽衣を着て帶で締め、仙人特有の羽衣の肩部についた羽毛が後ろになびいているだけでなく、持物も花文をあしらった麈尾扇⁽²⁰⁾が共通し、明らかに仙人を表しているからである。但し騎乗の仙人と誘導件走する三人の仙人との區別もなされており、三人の仙人(圖60(1))の持物の一つが先端に花をつけた草であるのに對して、騎乗の仙人は先端が雲氣の文様と化した枝狀のものを持っている。これは兩者の地位と役割の違いを表し、前者の草狀のものは龍の餌としての仙草であり、後者の枝狀のものは雲氣で、前者より高次の雲氣の使い手であることを示すものであろう。この雲氣は虎に騎乗する女性(圖61(2))の場合により明瞭で、右手には麈尾扇を持っているが、左手は雲氣をしかと握んで、その雲氣の端を振向いた虎が銜えて恰も甘えるように戯れている。龍の場合も同様に、騎乗する男性仙人の握る二本の雲氣を龍が銜えている。いずれにしても龍と虎に騎乗する男女の人物は仙人であり、墓の主人公ではあるまい。

「四神圖」のうちの青龍・白虎であることは、また前檔に朱雀が表されていることから明かである。即ち前檔板の上部左右に表された二羽の鳳凰(圖59)は、石棺の門を南向きとして南の方角を守護する朱雀を表しているのである。北を守護する玄武がいなくても、これは後檔板が失われて「孝子圖」を彫った別の石板で代替されたためで、元來は玄武の畫像もあつ



(1) 騎乘女仙



(2) 仙人

圖61 洛陽北郊出土北魏畫像石棺右側面 仙人騎虎圖（拓本）



（左）左側面 仙人騎龍圖 騎乘仙人（拓本）



（右）後檔 仙人玄武圖（拓本）

圖62 洛陽出土北魏畫像石棺 開封市博物館

た筈である。例えば一九二八年に洛陽邙山下の海資村で出土した同類の北魏畫像石棺⁽²⁰⁾(開封市博物館藏)では、左右側板に塵尾扇を持った男性(圖62左)と女性が各々騎乗する龍・虎が畫かれて、前に二人の先導する仙人、後ろに付き従う一人の仙人が各々配されているが、前檔板には畫面一杯に人物の騎乗する鳳凰、後檔板(圖62右)には龜に蛇が絡んだ玄武と劍を持った人物が刻されていた。これは明らかに前後、左右の石板合わせて青龍・白虎・朱雀・玄武の「四神圖」を表したものである。このような畫像は石棺のみならず、一九二八年に洛陽北十里頭村で出土した北魏永安二年(五一九)の爾朱龔墓誌蓋(圖63上)にもみられ、四邊に青龍・白虎・朱雀(圖63下)・玄武と騎乗する男仙や女仙を刻した「四神圖」が表されていた。これが「四神圖」であることは、先に引用した北魏神龜三年(五二〇)の元暉墓誌⁽²¹⁾の四邊側面に仙人の騎乗しない青龍・白虎・朱雀・玄武(圖37(2))を各々二體ずつ刻し、「四神圖」を表していたことによっても傍證されよう。北朝ではこのような仙人の騎乗する「四神圖」はその後も盛んに制作され、一九八六年に發掘された北齊天保二年(五五一)の山東臨朐縣冶源鎮崔芬墓墓室四壁⁽²²⁾(圖64)にも畫かれており、更に陝西三原縣雙盛村で發見された隋開皇二年(五八二)の李和墓⁽²³⁾の石棺にも刻されていた。このように南朝帝陵の「羽人戲龍・戲虎圖」は、北朝の類似する「仙人騎龍・騎虎圖」の例からみても「四神圖」の青龍・白虎を表したものとみるのが妥當であるが、南朝の方にも關連の畫像がなかったわけではない。鄧縣彩色畫像磚墓はその例で、「四神圖」の玄武⁽²⁴⁾(圖65)は後壁(北壁)に二點並んではめ込まれ、長さ三八cm、幅一九cmの磚に、龜甲は白く身は紅く彩色が施されていた。他の青龍・白虎・朱雀の彩色畫像磚も發掘前にはがされて採集したものの中にあり、朱雀は「鳳凰」と題記されたものが該當すると思われる。そして興味深いことに四神に仙人が騎乗した圖柄の畫像磚も、餘りものとして未彩色のまま封門牆にはめ込まれた畫像磚の中から見つかつており、「騎虎圖」畫像磚(圖66)の空を驅ける神獸は胴體に縞の文様があつて「白虎圖」畫像磚(圖38)の虎と似、左手に仙草をもち右手に手綱を取って御す女性は天女とも異なり女仙と思われる。仙人の騎乗しない「四神圖」と仙人の騎乗する「四神圖」が同一墓内に併存していたのである。また南朝末期から初唐頃と推定される常州南郊戚家村畫像磚墓⁽²⁵⁾でも、楕圓形墓室の東西壁に七枚の磚の端面を使って組合わせた「青龍圖」(圖67)「白虎圖」がはめ



圖63 爾朱襲墓誌蓋 北魏 永安2年(529) 西安碑林
(上) 墓誌蓋(拓本) 縱64cm 橫74cm
(下) 墓誌蓋(部分) 女仙騎乘朱雀圖(拓本)



圖64 山東臨朐縣崔芬墓墓室北壁壁畫
神人玄武圖 北齊 天保2年(551)

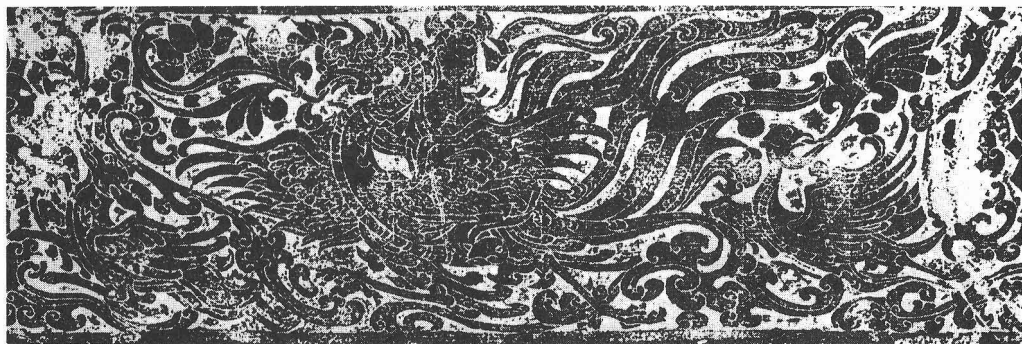


圖65 鄧縣彩色畫像磚墓 玄武圖 長38cm

込まれていた。先に麒麟と関連して述べたように、この鄧縣彩色畫像磚墓と常州戚家村畫像磚墓では、ともに「獅子圖」畫像磚（圖39）(1)、(2)も發見されており、この獅子と同じく四神も辟邪の目的で表されたものと考えられる。

それにしても、この「四神圖」をめぐる南朝と北朝の畫像の類似は興味深いことである。特に南朝帝陵の「羽人戲龍・戲虎圖」と北朝畫像石棺の「仙人騎龍・騎虎圖」は、構圖といい人物構成といい著しく類似していた。これは北朝の畫像石棺がいずれも洛陽近邊で發見されたことやその様式を考慮すると、北魏が孝文帝の太和十八年（四九四）に大同から洛陽に遷都して以後のものであり、また南朝の帝陵はいずれも齊朝（四七九—五〇二）のものであるから、南朝から北朝へ影響したという風に考えられよう。事實、遷都以前の北魏の墓からは從來このような畫像石棺は發掘されておらず、例えば一九六五年に大同石家寨で發見された司馬金龍墓⁽²³⁾は、延興四年（四七四）に亡くなった夫人の姫辰と太和八年（四八四）に亡くなった司馬金龍の夫婦を葬っていたが、石棺床附近で柏木棺の板が散亂してただけで畫像石棺は見當たらなかった。しかし遷都以後はというと、先に紹介した以外にも洛陽關林石刻藝術館やアメリカのミネアポリス美術館などに所藏される石棺⁽²⁴⁾が數點あり、盛んに作られたことがわかる。従ってこれも孝文帝以後の北魏朝廷のとした所謂漢化政策の結果、南朝の影響が及んだものと解され、最近指摘される龍門石窟の北魏窟における南朝の影響と関連し興味深い問題である。

ところで、南朝帝陵の「羽人戲龍・戲虎圖」と北朝の畫像石棺の「仙人騎龍・騎虎圖」が「昇仙圖」とみなされた説⁽²⁵⁾の有力な根據の一つに、前漢の賈誼の作と伝えられ作者不明の「惜誓」の次の文章があった。

登蒼天而高舉兮、歷衆山而日遠、觀江河之紆曲兮、離四海之霑濡、攀北極而一息兮、吸沆瀣以充虛、飛朱鳥使先驅兮、駕太一之象輿、蒼龍蚺虬於左驂兮、白虎騁而爲右駟、建日月以爲蓋兮、載玉女於後車、馳騫於杳冥之中兮、休息虬崑崙之墟、即ち年老いた主人公が月日の還らざるを哀しんで遠遊をした時の有様を詠い、飛翔して蒼天に昇り、衆山、江河、四海を一飛びして北極星に攀じて空虛を癒そうとしたと述べ、その時の乗物について、「朱鳥」を先驅けとして天帝太一神の馬車を駕し、「蒼龍・蚺虬」を左外側の驂馬とし、「白虎」を右外側の駟馬とし、更に日月の光を華蓋としたという。そこでこの遠遊の際の



圖66 鄧縣彩色畫像磚墓 女仙騎虎圖 長38cm

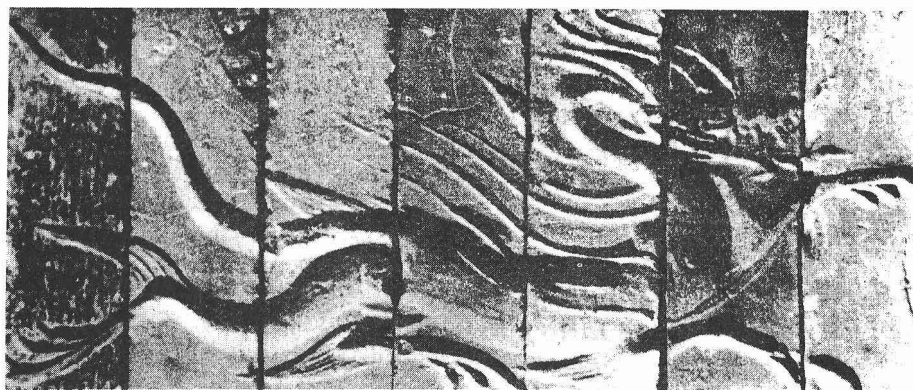


圖67 常州南郊戚家村畫像磚墓 青龍圖

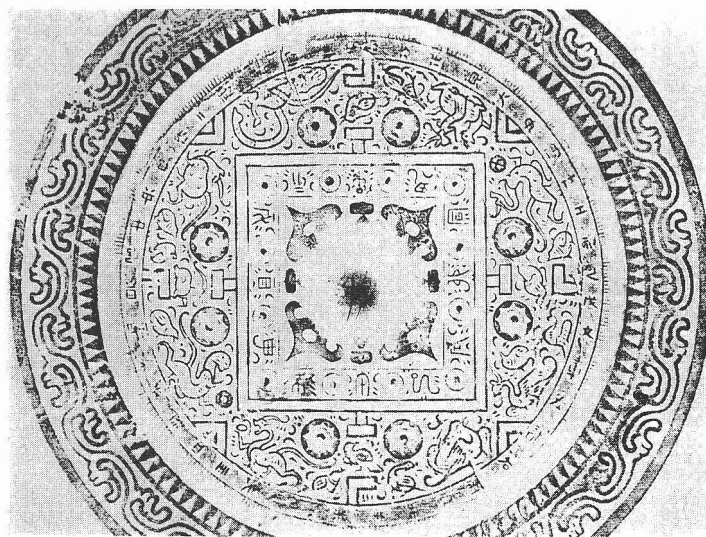


圖68 方格規矩四神鏡（拓本） 徑22.7cm 和泉市久保惣記念美術館

「蒼龍」「白虎」を「羽人戲龍・戲虎圖」などの仙人が騎乗して驅ける龍・虎に引き當て、死者の昇仙の時にも「蒼龍」「白虎」が乗物になると類推して、圖を「昇仙圖」とみなしたのである。しかし、「惜誓」の述べる遠遊の際の馬車は、本來は「離騷」などにみられる如く龍が使われたけれども、五行思想に伴う青龍・白虎・朱雀・玄武の四神成立後に、馬車の牽き手として「蒼龍」(青龍)と「白虎」を借りてきたまでのことである。そしてその主たる目的は、先驅けとして「朱鳥」(朱雀)もいるように、また『淮南子』兵略訓にも、

所謂天數者、左青龍、右白虎、前朱雀、後玄武

とある通り、むしろ東西南北の方角の守護神として馬車の警護に當たらせることにあり、昇仙の乗物というのは當っていない。またこの「惜誓」の主人公が馬車を駕すように、もし圖において龍と虎が昇仙の際の乗物であつたとすれば、これまでの典型的な「昇仙圖」である長沙子彈庫楚墓出土の「人物御龍圖」帛畫⁽²¹⁾や長沙馬王堆一、三號漢墓出土のT字型帛畫がそうであつたように、墓の主人公の靈魂が龍や虎に乗るか、もしくはそれらの牽く車(舟)に乗らなければならないが、ここでは先にもみた如く、主人公ではなく龍と虎を世話する羽人や同類の仙人が乗つていたのである。「昇仙圖」とみなせない所以である。

また圖において龍や虎が天空の天上世界を驅けていることも、「昇仙圖」とみなされる大きな根據の一つになったが、これは四神が元來天體と關係があつて天上に屬するからである。『淮南子』天文訓には、

何謂五星、東方木也、其帝太皞……其神爲歲星、其獸蒼龍……南方火也、其帝炎帝……其神爲熒惑、其獸朱鳥……中央土也、其帝黃帝……其神爲鎮星、其獸黃龍……西方金也、其帝少昊……其神爲太白、其獸白虎……北方水也、其帝顓頊……其神爲辰星、其獸玄武

とある。即ち五行思想に従つて各方角に歸屬する惑星とそれを象徵する獸を擧げるように、四神とはその方角の星座を象徵する獸、もしくはその方角の星座を總稱する星宿名⁽²²⁾だったのである。その最も早い例が戰國初期の湖北隨州擂鼓墩曾侯乙墓より出土した漆箱の蓋面圖像⁽²³⁾であり、蓋天に見立てた太鼓橋のように反り返った蓋の表面に、篆書で書いた北斗の「斗」字を中に

二十八宿の名前をめぐらし、その左右兩端に龍と虎の圖像を畫いていた。まだ朱雀と玄武は登場していないけれども、東方の青龍の宿と西方の白虎の宿を表していたのである。後の『晉書』卷十一、天文志に従えば、東方青龍の宿には角・亢・氐・房・心・尾・箕の星宿、西方白虎の宿には奎・婁・胃・昂・畢・觜・參の星宿が含まれるといった具合である。また前漢末から後漢にかけて大流行した方格規矩四神鏡⁽²³⁾の内區に表された四神(圖68)も、天空の四方の宿を象徵するものであり、そのために東方の青龍の傍らに鳥が中にいる太陽、西方の白虎の傍らに蟾蜍が中にいる月が表されるのである。そしてこれら四神の役割は、内區外側の鏡銘⁽²⁴⁾(圖68)に「左龍右虎は非羊(不祥)を辟け、朱雀玄武は四彭(方)を主る」とあるように、四方のそれぞれの方角を守護して邪惡な靈を退けたり、「朱雀玄武は陰陽を順ならしむ」とあるように、陰陽の氣を順調にめぐらすという役割があったのである。南朝帝陵の磚畫「羽人戲龍・戲虎圖」、北魏畫像石棺の「仙人騎龍・騎虎圖」も同様であり、天空の星宿であるからこそ前者の場合は墓室の壁の上段に配され、後者の場合も下に山嶽をみて空を驅けていたのである。しかし驅けているからといって「昇仙圖」のように仙界の崑崙山を目指して行くというわけではなく、單に世話する仙人とともに餌を食べながら戯れているに過ぎないのである。このように天空の四神を表現することによって、天井や蓋板に日月を表したこととともに、墓室や棺の中に宇宙を表現しようとしたのであり、また一方、北魏畫像石棺が朱雀を前檔の門扉に配したり、また玄武の傍らに劍をもった仙人を配したりしたように、守護神を表現しようとしたのである。當時は墓を惡靈から守るためにあらゆる方策を盡くし、南朝陵墓ではこの四神の他に麒麟と獅子が三點セットとして使われたことは先にみた通りである。帝陵においては甬道の左右壁に獅子、墓室内に四神を磚畫で表現したうえに、墓の外に鎮墓獸として麒麟石獸を置いており、王侯墓では墓室内は不明であるが墓の外に鎮墓獸として獅子石獸を置いていた。また鄧縣彩色畫像磚墓や常州戚家村畫像磚墓では麒麟、獅子、四神を畫像磚で表現していたのである。

さて、「羽人戲龍・戲虎圖」の主題の問題はひとまず置くことにして、先にも述べた如く、仙塘灣墓(圖69)と金家村墓(圖52)から出土した二つの「羽人戲虎圖」は虎、羽人、天人の圖柄は勿論、細部に至るまで全く同じであり、同範の圖とみなしてよ

いと思われる。「羽人戯虎圖」は吳家村墓(圖53)からも出土しているが、こちらは圖柄は大體同じでも細部をみると、例えば羽人の持物など微妙に異なっていた。磚畫の作り方については羅宗眞⁽²⁹⁾氏が、まず絹の上に畫き、それを部分に分けて木範に陰刻した後胎土に型押しして焼成し、あらかじめ磚の側面に刻した記號に従って配列する、と推測したように、當然範(型)があった筈であり、兩圖はその同じ範を用いて作成したのである。そして、このことは範の保存が前提となるため當然兩圖の制作時期が接近していたことを物語っており、先にその他の事情も考え併せ、仙塘灣墓を建武元年(四九四)に追尊造營された齊景帝蕭道生の修安陵、金家村墓を永泰元年(四九八)に造營された齊明帝蕭鸞の興安陵と推定したのである。兩者は父子の關係にあるばかりか、修安陵を築いたのは明帝であり、興安陵を築いたのも明帝自身と次に即位した息子の東昏侯蕭寶卷の筈であるから、兩圖の同範關係も容易に納得させられるのである。

従って仙塘灣墓と金家村墓の原畫制作は齊の建武元年か、或いはそれ以前ということになるが、墓室裝飾の磚畫とはいえ、この「羽人戯虎圖」は當時の宮廷を中心とする繪畫の水準の高さを十分に窺わせるものといえよう。特に羽人(圖69)の表現に目を見張らせるものがあり、羽衣を着け空中を駆けながら振向いたその姿は、肉の引締まった長身瘦軀の大膽なフォルムといい、振回される仙草、風になびく羽衣の緊張に満ちつつ流れるような動きといい、これまでの作品に絶えてみられなかったものである。これらの表現を可能にしたのは全て線であり、遒勁かつ流麗な息の長い線を用いた輪郭は、形を正確に捉えるばかりか、輕快なうえにも弾力に満ちた感じを與える。冗漫な筆は一筆としてなく、一筆一筆が決定的であると同時に無駄な肉をそぎ落としていく。面長の魁偉な容貌や極端に細く引き締まった胸部の描寫(圖69 (F))にみる通りである。これと比べれば吳家村墓「羽人戯虎圖」の羽人は、「羽人戯龍圖」の場合(圖53 (3))もそうであるが、同じく帝陵とはいえ技量に相當な開きが認められる。既に畫像が相當崩れて、胸の所で磚を上下逆にはめ込んだのは論外として、胸は廣く締まりなく腕も太くなり、左右の脚は長さが異なっており、腰と脚は脈絡を失っている。線も力がないうえに未整理で、いたずらに騒がしい感じを與えるのである。またこの羽人を北魏畫像石棺の仙人(圖70)と比較するならば、南朝において如何に繪畫の線に彫琢と洗練が加えられ

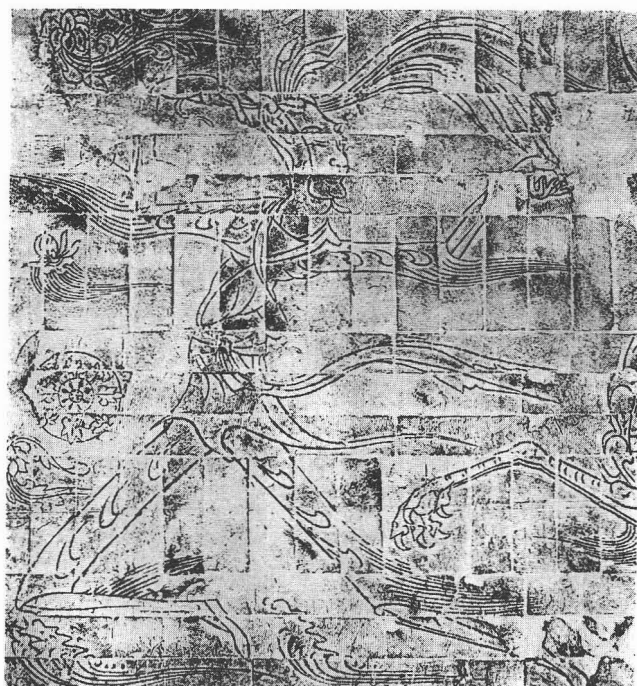


圖69 丹陽仙塘灣墓室磚畫 羽人戲虎圖

(上) 羽人 (拓本)

(下) 羽人 (磚)



圖70 洛陽北郊外出土北魏畫像石棺右側面
仙人騎虎圖 仙人 (拓本)

たかが知れよう。石棺の仙人をみる限り、線は單に形を表す無機的な線でしかなく、それ以上の深みが感じられない。これに對して羽人の方は柔らかく粘り強い有機的な線が用いられ、それによって始めて仙人の超越的な仙骨をも表現し得たのである。まさに言葉の眞の意味で藝術といつても過言でないであらう。

四 竹林七賢圖

「竹林七賢圖」は現在までのところ、丹陽の仙塘灣、吳家村、金家村の三基の陵、そして南京西善橋の王侯墓の合計四基の陵墓で發見されている。このうち仙塘灣大墓のものは發掘時の保存状態が最も悪く、左右壁ともに壊滅状態であったが、右壁の方は幅七五cm、高さ三〇cmの一部分だけ僅かにのこり、側面に「嵇下行第廿四」と文字編號を刻した磚(2)が見つかつて、嵇康以下七賢の磚畫のあつたことが確認された。従つて四基の陵墓といつても實質的には三基の陵墓で、うち保存状態、出來映えともに最も良かったのが西善橋墓である。

西善橋墓(3)(圖31)は南京南郊の丘陵地帯の官山(海拔二七・二m)という小さな土山の北麓にあつて、一九六〇年に南京博物院などによつて發掘された。墓(圖79(1))は稍や北に偏した東向きで、山の斜面に土坑を掘つて、封門牆、甬道、墓室から成る長方形の券頂磚室墓を築き、上は二・六mの厚さに土をかぶせていた。既に盜掘に遭つており、甬道は破壊されていたが、墓室は破壊を免れ完全であつた。甬道は長さ一・四九m、幅一・三m、高さ二・七mで、途中に石門が一つあり、石門は南朝大墓の例にならつて、上に半圓形の門拱があつて人字形の斗拱が浮彫りされ、下は二本の石柱、二枚の扇、門限から成つてゐた。一重の石門はこの墓が帝陵ではなく王侯以下の墓であることを物語つてゐる。また墓室は奥行六・八五m、幅三・一m、高さ三・四五mで、左右壁の中部に幅二・四m、高さ〇・八mの「竹林七賢圖」の磚畫がはめ込まれて、その前部に一・一m隔てて磚で作つた櫺子窓と燭臺を置く桃形の小壁龕があり、外に向かつて膨れた奥壁には小壁龕だけがあつた。また墓室の後

半部には奥行三・六m、高さ〇・一八mの棺床があって、上に木棺を受ける石板棺座が左右二枚ずつあった。左側に男性、右側に女性の棺を置いたものと推定され、夫婦合葬墓であった。また墓室の後壁下と前部中央には排水のための正方形陰井口（方一七cm）があって、互いに通じ、更に墓の外に通じていた。

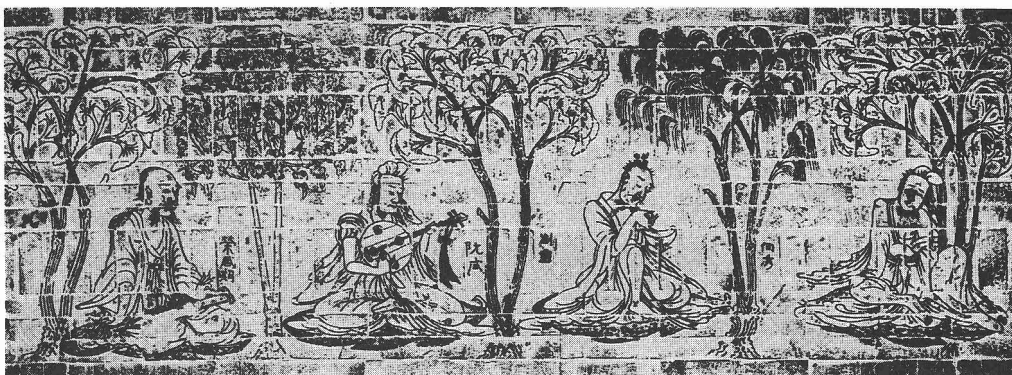
さて、「竹林七賢圖」磚畫（圖71）は、左右の壁に四人ずつ分けて配され、人物の脇に陽刻された榜題に従えば、右壁には手前から順に嵇康、阮籍、山濤、王戎を配し、左壁には向秀、劉伶（靈）⁽²³⁾、阮咸、榮啓期を配していた。竹林七賢の圖としては榮啓期が一人餘分であるが、これはあくまで左右壁を四人ずつ同數にするためと考えられる。榮啓期は孔子と同じ春秋時代の高士で、『列子』天瑞篇⁽²⁴⁾にあるように、孔子が泰山に遊んだ時、郊の野で榮啓期に樂しみを尋ねたところ、人に生まれたこと、男に生まれたこと、九十歳まで長生きしたこと、「三樂」を擧げて答えたのは餘りにも有名な話である。従って六朝時代にも大いに人氣を博し、陶淵明の「飲酒」や「詠貧士」の詩などに屢ば詠われたり、顧愷之、陸探微⁽²⁵⁾などによって屢ば畫の題材にされたりした。恐らく七賢と竹林の遊の相手を出来る最もふさわしい人物として、わざわざ春秋時代から呼ばれてきたのである。

それはともかく、各人物は樹下に敷物をしいて思ひ思ひの姿勢で坐し、琴や琵琶の樂器を奏でたり酒杯を手にしたりしている。榜題の人名も誤りはなく、「廣陵散」の祕曲をただ一人傳えたという嵇康は琴を弾きながら左方をみやり、酒を嗜んで嘯をよくしたという阮籍⁽²⁶⁾は酒の入った瓢尊を傍らに口に手をやって嘯を鳴らし、酒八斗を飲んで始めて酔ったという山濤⁽²⁷⁾は立膝ついて耳杯を上げ、如意の舞で知られる王戎⁽²⁸⁾は箱狀のものに寄掛かって如意を玩んでいる。また左壁の方に移ると、『莊子』に注して大いに玄風を暢べたという向秀⁽²⁹⁾は木にもたれながら目を閉じて瞑想に耽り、無類の酒好きで大人先生を主人公に「酒德頌」を著した劉伶⁽³⁰⁾は耳杯に残った酒を指でなめるようにし、音律を解し琵琶⁽³¹⁾が得意であった阮咸⁽³²⁾は撥を用いて琵琶を掻き鳴らし、琴を鼓して歌ったという榮啓期⁽³³⁾は確かに膝に置いた琴を弾きながら歌っているかの如くである。

竹林の七賢はいうまでもなく三國の魏（二二〇—二六五）から西晉にかけて、竹林に集まって清談をしたと伝えられる阮籍



(1) 右壁 粘康・阮籍・山濤・王戎像 長240cm 高80cm



(2) 左壁 向秀・劉伶・阮咸・榮啓期像

圖71 南京西善橋墓室磚畫 竹林七賢と榮啓期圖（拓本）

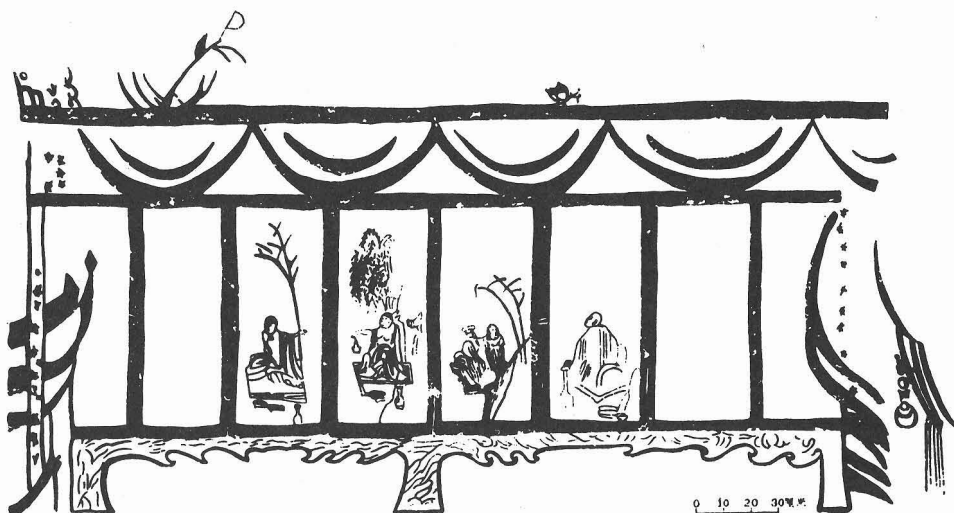


圖72 濟南市東八里洼北朝壁畫墓 高士屏風壁畫（模本） 長3.4m

(二二〇—二六三)、嵇康(二三三—二六三)、山濤(二〇五—二八三)、王戎(二三四—三〇五)、劉伶(不詳)、向秀(約二二八—二八一)、阮咸(約二三〇—二八一)の七人の高士を指している。彼等が生きた時代は、古代帝國の漢王朝が崩壊した後を受けて、新たに六朝體制へと大きく變貌を遂げようとした轉換期に當たり、新舊の兩勢力が漢代と異なる新しい理念、人間像を求めて模索していた。竹林の七賢、とりわけ代表格の阮籍や嵇康はその爲に先頭に立つて闘った人物で、漢代に國教として全ての面で指導原理の役割を果たした儒教、特にその禮教主義的規範に對し老莊の道家思想の上に立つて果敢に批判を加え、自ら慎重に處しながらも過激な程放達に振舞った。阮籍が禮俗の士に對しては白眼をもって相對し、氣に入った者に對しては青眼をもって相對したというのはその典型的な話である。但しここで注意を要するのは、彼等は竹林七賢とはいっても實際に七人全員がグループをなして行動したとか、或いは竹林に一堂に會したとかいうことはおよそ考え難いことである。確かに劉宋の劉義慶の撰述した後漢から東晉までの逸話集である『世說新語』の任誕篇には、

陳留阮籍、譙國嵇康、河内山濤、三人年皆相比、康年少亞之。預此契者、沛國劉伶、陳留阮咸、河内向秀、琅邪王戎。七人常集于竹林之下、肆意酣暢、故世謂竹林七賢

と、阮籍、嵇康、山濤を中心に七人が竹林の下に集い、心ゆくまで酒を飲んだと記されている。しかし嚴密に言えばそれは年齢差、住處の違い、或いは信條における微妙な違いなどから有り得ないことである。事實竹林七賢という呼稱自體も現在では東晉時代(三一四—四二〇)に成立したと考えられており、當時、王澄、謝鯤、胡毋輔之といった阮籍のエピゴーネン達⁽²⁸⁾が現れたことと關係している。彼等は「達」と稱してことさら頭を被髪にしたり裸になったり奇矯な行動をとったことで知られ、グループとして「八達」とか「四友」とか呼ばれたが、それは阮籍などのとった行爲を形の上で眞似てみたまでのことであり、その「八達」などの始祖という意味で「竹林七賢」という呼稱のグループが生まれたものと考えられる。つまり嚴密に言えば一種の傳説⁽²⁹⁾であるが、彼等の行爲が當時の貴族の間で如何に共感を呼んだかは、『世說新語』において彼等が如何に頻繁に登場するかをみれば明かである。従つて東晉以後になると、「竹林七賢圖」の制作も盛んに行われるようになり、張彥遠『歷代

名畫記』によると、東晉の顧愷之、戴逵、史道碩、宋の陸探微、齊の毛惠遠などが作ったと記されている。また『南史』⁽²⁰⁾卷五によると、齊の末期の東昏侯（四九八—五〇一在位）の宮殿には「七賢圖」があつて美女を侍らせていたという。また近年、濟南市東八里洼の北齊頃と目される北朝壁畫墓で、竹林七賢を畫いたのではないかと推測される壁畫屏風が發見されている。この墓は石で築いた單室墓で、奥行三・九m、幅三・四m、高さ二・三mの墓室の東、西、北三面の壁に壁畫を畫き、壁畫屏風は北壁と東壁の角に位置していた。屏風（圖72）は全長三・四m、高さ一・五mで、三本の脚をもつて八扇から成り、眞ん中の四扇だけに各々一人の高士を畫いていた。どの人物も大きな袖の長袍を着ながら胸などを露にしており、床に思ひ思ひの姿勢で坐して酒を飲み、邊りには酒の壺、盤、杯などが散らばっていた。未完成で竹林七賢と特定することは難しいが、七賢的な高士であることは間違いない、南朝の「竹林七賢圖」が北朝にも影響が及んだものとして興味深い例である。

西善橋の「竹林七賢圖」もこうした東晉以後に成立した竹林七賢傳説に基づくもので、各人物は著しく放達の様子に畫かれている。殆どの人物の胸ははだけており、向秀に至っては左の片肌を脱いでいる。また坐り方も自由氣儘であり、阮籍が足を投げ出しているのを始め、嵇康、山濤、劉伶は立膝をつき、王戎に至っては奇妙な足技をして脛を露にしている。どの像も個性的であるが、同時に頗る典型的に捉えられており、恐らく依據するところがあつたものと思われる。例えば嵇康像（圖73（1））は、彼の「兄秀才公穆入軍贈詩」十九首の内の第十五首⁽²¹⁾、「目は歸鴻を送り、手は五絃を揮う」の句を題材にしている。この句は、嵇康の四言詩を好んで圖にした顧愷之が特に「手 五絃を揮うは易く、目 歸鴻を送るは難し」といったもので、膝にのせた五絃の琴を弾きながら左方をみやった嵇康の目は、遠い彼方を見るとはなしに見つめるようで、氣高い精神性が見事に表されて、「俯仰に自得し、心を太玄に遊ばしむ」という次句を彷彿とさせるものがある。また阮籍像（圖73（2））は、『世說新語』簡傲篇に述べる西晉の文王司馬昭の席での「箕踞嘯歌し、酣放し自若たり」という有様を畫くものであろう。阮籍のこの足を投げ出した坐り方は、『莊子』至樂篇⁽²²⁾にみえる、莊子の妻が死に恵子が弔いに行くと、莊子は「箕踞し盆を鼓して歌った」という箕踞に當たろう。成玄英の疏に「兩脚を垂れ、簸箕の形の如し」とあるように、兩足を伸ばして上半身と併せ箕の形に

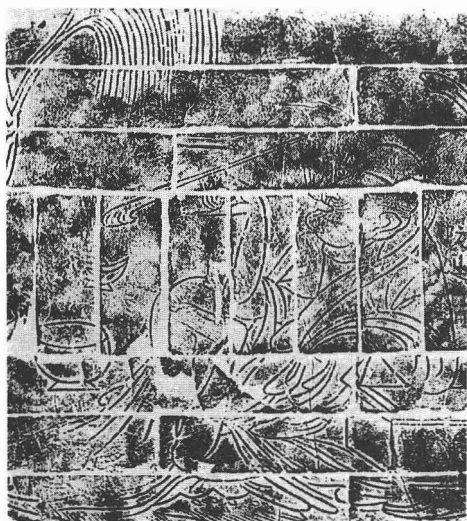


(1) 嵇康像

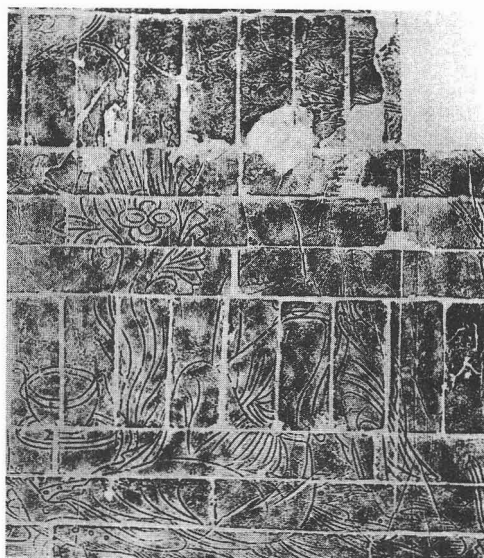


(2) 阮籍像

圖73 南京西善橋墓室磚畫 竹林七賢と榮啓期圖（拓本）



(1) 「阮步兵」(王戎)像



(2) 「劉伶」(阮籍)像

圖74 丹陽金家村墓室磚畫 竹林七賢と榮啓期圖（拓本）

作った坐り方である。また阮籍はすばめた口に親指を當て口笛を吹いているかの如くであるが、これが彼が善くしたという嘯である。從來口をすばめて吹くことは知られていたが、具體的な畫像はこれが初めてである。『世說新語』棲逸篇⁽²⁸⁾によると、阮籍は蘇門山に眞人が現れ會いに行った時も、眞人に箕踞して相對し長嘯したという。この場面は酒に鳥形のを浮かべた承盤付きの瓢⁽²⁹⁾尊を傍らに置いており、王者然とした晉文王の嚴肅な席で、一人箕踞嘯歌し好きなだけ酒を飲んで平然としていたという阮籍にふさわしい姿である。その他の像も當然據る所があったものと思われる。

そしてこれら八人の像が樹木を仕切にして、覆いかぶさる樹々の下に坐している。樹木は全部で五種あり、銀杏、松、柳、桐などを識別することが出来るが、阮籍の左手の小さな葉をつけた樹木は槐⁽³⁰⁾であろうか。一種の「竹林七賢圖」でありながら竹がないのも注目されよう。いずれにしても、この樹木を境にしてそれぞれ獨立した畫面が構成され、例えば「手は五絃を揮い、目は歸鴻を送る」の句を題材にした嵇康像が成立し、「箕踞嘯歌し、酣放し自若たり」という司馬昭の席での阮籍像が成立する。時代が異なる榮啓期の存在もこの獨立した畫面を物語り、濟南市東八里洼北齊壁畫墓の一扇一扇獨立した屏風畫をみるかの如くである。しかしこの「竹林七賢圖」は同時に七賢が竹林に一堂に會した場面を表したという印象を與えることも事實である。例えば山濤と王戎はまるで一本の柳の木を中に向かい合い對話をしているかの如くである。それは樹木が仕切の役をすると同時に兩側の人物によって共有されていることによってもたらされる効果である。また八人が、目を閉じ瞑想にふける向秀を除いて、皆正面ではなく横か斜め前を向いているのも、この効果に貢獻しているよう。各人の個性的な逸話を畫いて異時間にいる筈のところ、同じ時間を共有しているのである。樹下にしき坐した敷物が皆同じであることも、この同じ時間を象徴しているかのようである。敷物は圓形をして周縁の毛が切り揃えられ、豹の斑點のようなものがみえるところから皮褥の一種と思われるが、これは八人皆同じである。従って片側の四人が一堂に會しただけでなく、對面の四人とも向かい合って時間を共有している。要するに八人各個人の肖像畫であると同時に、「竹林七賢と榮啓期圖」としての群像畫、いや春秋の榮啓期が他の七賢とともに魏晉の時間を共有しているという點では「八賢圖」としての群像畫といえる。これらは全て畫家の計算

された効果であつたろう。しかし、かといって全てが成功しているというわけではなく、例えば隣合わせの嵇康像と阮籍像では、阮籍像の地平が嵇康像のそれより低いこと、また両者が接近し過ぎていることなど、群像の同一畫面としては明らかに齟齬がみられ、向秀像も地平が高過ぎるようである。これが寫し崩れによって生じたものか定かではないが、出来映え、保存状態ともに最もよかった西善橋墓の「竹林七賢圖」は、嵇康像の琴の置き方など、脈絡の不明瞭な寫し崩れが他にもみられ、これも寫し崩れの可能性が高からう。

このように磚畫「竹林七賢と榮啓期圖」がまさに八賢の群像表現ということになると、墓室裝飾の効果、つまり墓室内に安置された死者との関係はどうであらうか。「竹林七賢圖」が左右兩壁に立體的關係に表されて、八人が同じ時間、同じ空氣を共有するように畫かれているからには、その間に置かれた死者は恰も八賢に取り圍まれるように同じ時間、空氣を共有することになる筈である。つまり理想像としての八賢に仲間入りがすることが願望、意圖されていると考えられるのである。特に西善橋墓の場合は、墓室内の磚畫は「竹林七賢圖」だけで、しかも床から一・五〇mと低い位置にあったから、この印象が一段と強い。一體、この「竹林七賢圖」の如きテーマは、これまでの墓室裝飾の傳統のなかでは全く意表を突く革新的なことであつたといえる。漢代の墓室裝飾といえば、神仙、祥瑞、辟邪、昇仙、出行などがテーマであり、その餘波は南朝帝陵にも及び「四神圖」や「出行圖」などが制作されたのである。しかしこのように松や柳の樹の下で琴や琵琶を弾いたり酒を飲んだりする様を墓室に畫くなどということは到底考えられなかったことで、しかも上述の如く竹林七賢は阮籍、嵇康を代表格に漢代の儒教的秩序、特にその禮教主義的規範に對して果敢に闘った人物たちであった。このような人物を題材にその遊びの様を畫くということは、まさに漢代から六朝への時代の推移を最も雄辯に物語ることであり、漢代という古代の禮制秩序から完全に解放されたことを意味する。また、それと同時に竹林七賢が六朝の貴族にとって如何に願望の的であつたかを物語っており、死後において竹林の遊に加わることが當時の貴族の理想と考えられたのである。

ところで、西善橋の「竹林七賢圖」は以上みてきたように比較的完全であつたが、金家村墓と吳家村墓の「竹林七賢圖」は

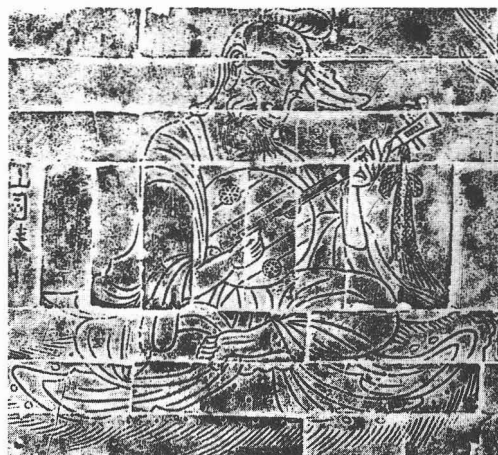
單に保存状態が悪かっただけでなく、圖柄が相當崩れ、榜題人名も非常に混亂していた。先ず金家村墓の場合、右壁「竹林七賢圖」の後半の上部が壊れていた以外は、保存はかなり良好であった、しかし、七賢と榮啓期各人物の畫像の配列の仕方は西善橋墓と同じであるにも拘らず、榜題人名にはかなり誤りが認められた。^(題)即ち榜題に従えば、右壁は手前から順に「嵇康」「劉伶」「阮籍」「山濤」「阮步兵(籍)」「王戎」とあり、左壁は「王戎」「向秀」「山司徒(濤)」「劉伶」「阮咸」「榮啓期」とあった。山濤の名が重複して現れ、代わりに向秀の名が缺けるといふ基礎的な誤りの他、西善橋墓の正確な榜題名に照らすと、阮籍(圖74(2))、王戎(圖74(1))、向秀、劉伶の四人が名を間違えられていたのである。また畫像自体もかなり相違があり、最も甚だしい阮籍像(圖74(2))に至っては、箕踞した阮籍と右脇に置かれた瓢尊の間に靈芝草^(註)のような草が生えて花をつけ、阮籍自身も西善橋(圖73(2))とは逆に左手を口にもっていき右手を後ろについている。そして劉伶像(圖77(左、中))は左手に持っていた耳杯が消えて袖の表現に變わり、代わりに袖の先が左手の表現に成り變わっている。

更に一層混亂の著しかったのが吳家村墓である。ここは左壁部分はほぼ保存良好であったけれども、右壁は盜掘者の侵入によって前半部を破壊されていた。そしてこれも畫像の配列の仕方は西善橋墓と同様であったが、榜題の人名は、右壁はのこった後半の二人が「山濤」「阮步兵(籍)」「王戎」とあり、左壁は手前から順に「榮啓期」「向秀」「阮咸」「劉伶」「山司徒(濤)」「阮咸)」「王戎」(榮啓期)とあった。山濤以外全て間違っていたというわけである。まだ畫像の崩れは王戎像に典型的にみられ、右手に持った如意の向きが西善橋、金家村墓と反對である他、頬髭を黒々とはやしている。全體にどの人物も年老いた目付きの怪しい人物に變わり、阮咸像(圖75(1)、(2))で特に顔のしわが目立つ他、榮啓期像(圖76(1)、(2))では年老いた眼付きの怪しい人物に成り變わってしまった。

従って榜題名と畫像を問題とする限り、西善橋墓の「竹林七賢圖」が最も正確で標準的存在であり、それが次第に崩れたり誤ったりして金家村墓と吳家村墓の「竹林七賢圖」が出来上がったものと思われる。西善橋墓と金家村墓は阮籍像(圖73(2)、74(2))をみると、後者に仙草が登場したりして圖像としての系統が違いかとも考えられるけれども、左手の指を口にやり、



(1) 西善橋墓



(2) 吳家村墓「山司徒」

圖75 磚畫 竹林七賢と榮啓期圖 阮咸像(拓本)



(1) 西善橋墓



(2) 吳家村墓「王戎」

圖76 磚畫 竹林七賢と榮啓期圖 榮啓期像(拓本)

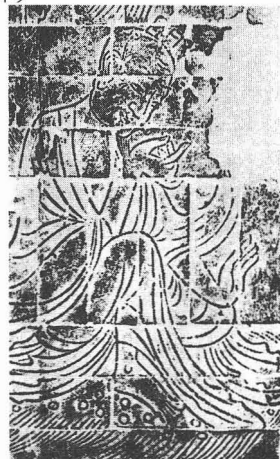
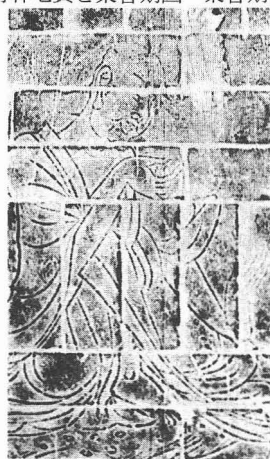
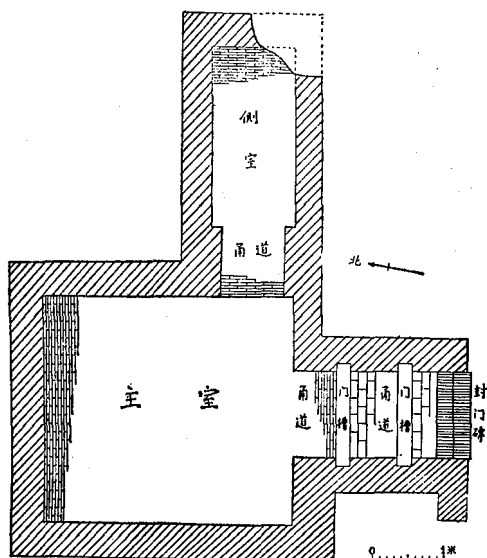


圖77 磚畫 竹林七賢と榮啓期圖 劉伶像(拓本) (左) 西善橋墓 (中) 金家村墓「山司徒」 (右) 吳家村墓「阮咸」

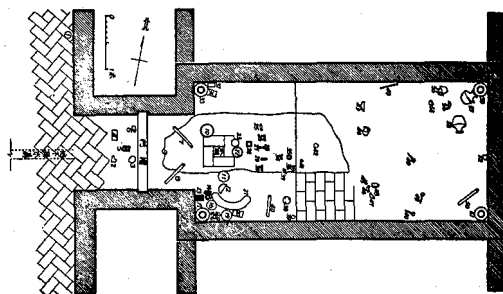
その肘を右足の膝の奥にもっていった姿勢には明らかに無理が認められ、やはり前者の畫像が崩れてそうになったものと解せられる。酒好きの劉伶の像に不可缺の耳杯が金家村墓で消えたのも、「山司徒（濤）」としたことによる畫像の崩れと解する以外ないであろう。また金家村墓と吳家村墓では、前者の山濤像の耳杯が後者では三日月形のものに變容したり、王戎像の如意の向きが反對になるなど、吳家村墓の方が崩れ方がひどいが、後者の劉伶（圖77右）像が前者の劉伶（圖77中）像をそのまま踏襲してやはり耳杯がみられないなど、制作年代は金家村墓が先で吳家村墓の方が後と思われる。そこでこの二基の帝陵については、先にその他の事情も勘案し、金家村墓が永泰元年（四九八）に崩じた明帝蕭鸞の興安陵、吳家村墓が天監元年（五〇二）に崩じた和帝蕭寶融の恭安陵としたのである。また金家村墓と吳家村墓の「竹林七賢圖」榜題人名には混亂がみられ、帝陵としては本來有り得べからざることであるが、それも南齊末期の政情の混亂を反映したものと解されよう。諸王に對して大規模な殺戮を行った明帝^(附)の興安陵は、惡童天子東昏侯（四九九—五〇二）によって造營されたものであり、南齊最後の皇帝で梁の武帝に禪讓を行った和帝の恭安陵が造營されたのは梁に入ってからであった。

それでは、最も完全な形の「竹林七賢圖」を出土した西善橋墓はいつ頃造營されたのであろうか。これについては一九六〇年の發掘當初から東晉とする説、東晉から宋までの晉—宋間とする説^(附)などがあつたが、上述の如く、後に一九六八年に出土した金家村墓や吳家村墓の齊陵の「竹林七賢圖」と比較してみても、西善橋墓の方が畫像が完全で、西善橋墓—金家村墓—吳家村墓の順に制作したものとみなされ、從來の宋以前とする説を補強するかにみえた。しかし果たしてそうであらうか。型押しして作られる磚畫は、型さえあればいつの時代でも同じものを作ることが出來、畫像が正確だからといって必ずしも實年代はそちらが古いとは限らないのである。従つてこれについては、「竹林七賢圖」の畫像を問題とする限り先後關係をつけにくいので、墓葬形式と副葬品をみることにする。

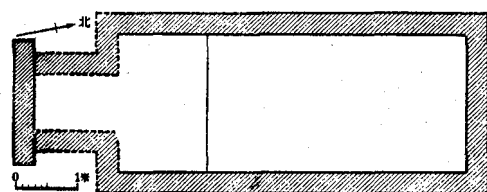
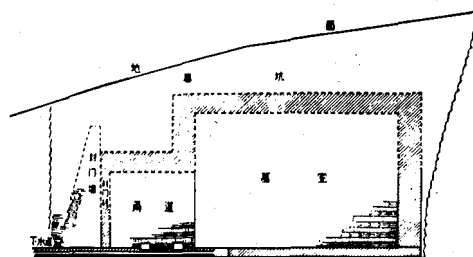
南京付近の東晉から陳に至る南朝陵墓の墓葬形式^(附)は、東晉では初期に側室をもつ多室墓形式が行われ、甬道に二重石門があり帝陵と目される南京大學北園東晉墓^(附)（圖78（1））もその一例である。そして東晉の中期以後になると、南京幕府山一號東晉墓^(附)



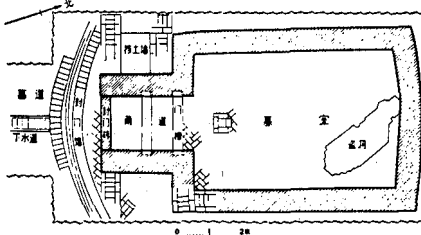
(1) 南京大學北園東晉墓平面圖



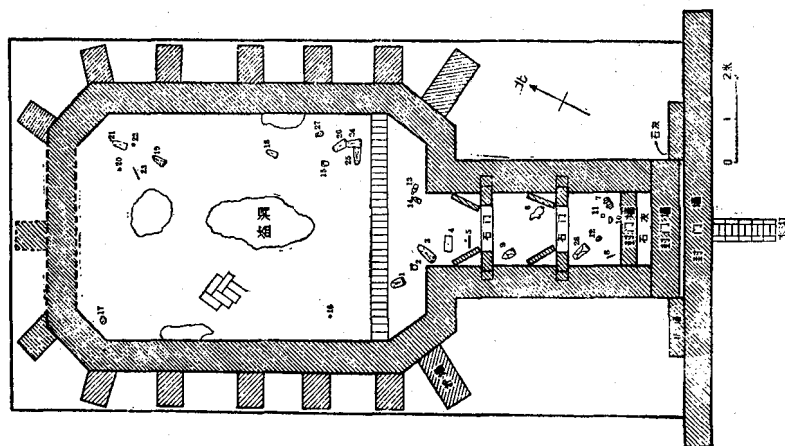
(2) 南京幕府山一號墓平面圖 東晉



(3) 南京太平門外明曇禧墓平面圖 宋 元徽 2 年(474)

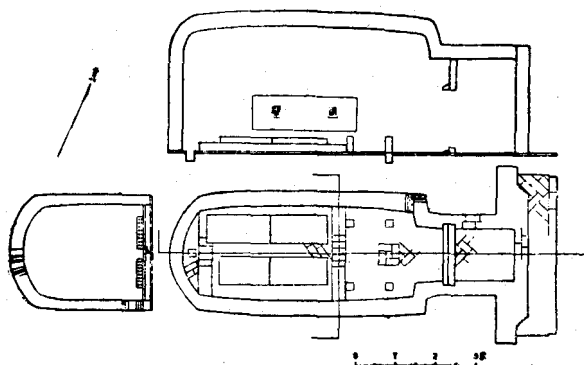


(4) 南京富貴山東晉墓立·平面圖 宋 永初 2 年(421)

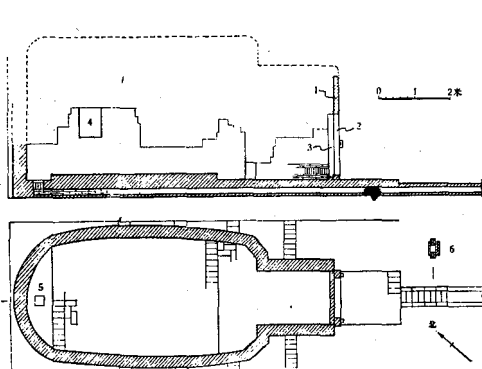


(5) 丹陽吳家村墓平面圖 齊

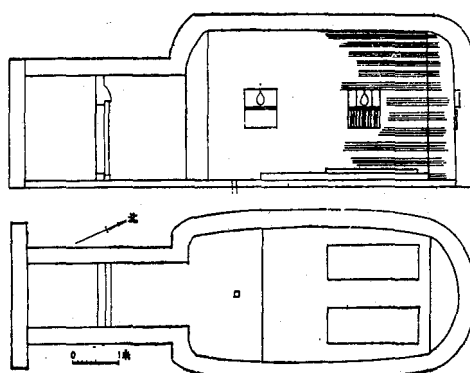
圖78 南 朝 墓 葬 形 制 (一)



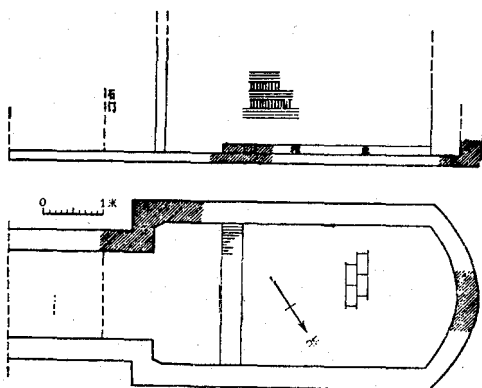
(1) 南京西善橋墓立・平面圖



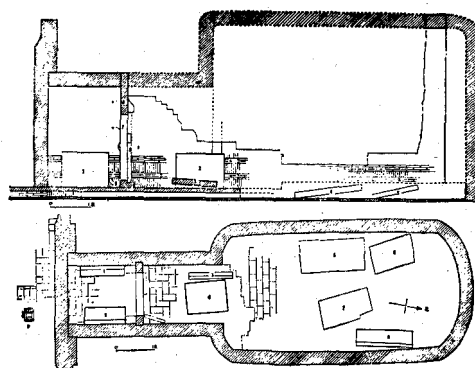
(2) 南京棲霞山甘家巷六號墓（蕭秀墓）
立・平面圖 梁 天監17年（518）



(3) 南京燕子磯普通二年墓立・平面圖
梁 普通2年（521）



(4) 南京堯化門梁墓（蕭偉墓）立・平面圖
梁 中大通4年（532）



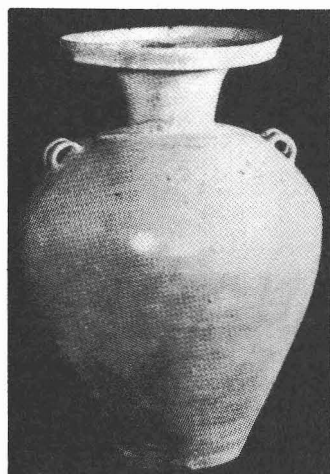
(5) 南京仙鶴門南朝墓立・平面圖 梁

圖79 南朝墓葬形制（二）

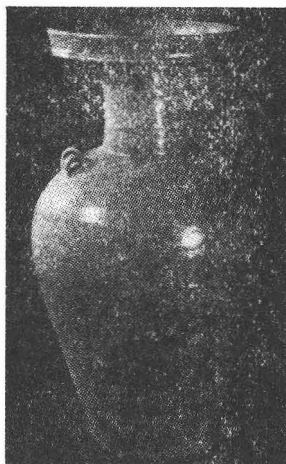
(圖78 (2))や南京苜蓿園東晉墓⁽²⁰⁾のように單室で長方形の墓室形式が流行し、宋の永初二年(四二二)に造營された東晉最後の恭帝の冲平陵とみなされる南京富貴山東晉墓⁽²¹⁾(圖78 (4))、宋元徽二年(四七四)の南京太平門外の明臺愍墓⁽²¹⁾(圖78 (3))など、宋代にまで及んだ。そして齊代に入ると、武漢などでは齊永明三年(四八五)の武漢地區南朝一九三號墓⁽²¹⁾のようになお長方形の墓葬形式が行われたけれども、南京や丹陽では墓室の奥の壁が外側に膨れ始めると同時に左右の壁も少し膨らみ、長方形の角も取れるようになる。丹陽の仙塘灣墓⁽²¹⁾(圖42)と吳家村墓⁽²¹⁾(圖78 (5))の二陵もこの形式である。次の梁代も基本的にはこの形式であるが、墓室がより縦長で角もより丸く全體に橢圓形を呈するのが特徴である。そして陳はこの齊・梁形式の更に發達した形式を示し、油坊村大墓⁽²¹⁾(圖33)のように天井がドーム狀をなすのも新しい點といえる。

では、問題の西善橋墓⁽²¹⁾(圖79 (1))はどの邊に位置するかというと、墓室の奥が圓形に膨れて角が取れたという點では、齊の仙塘灣墓⁽²¹⁾(圖42)と似た形式を示しているが、墓室が長くなったという點では、梁天監十七年(五一八)に亡くなった蕭秀の墓と目される南京甘家巷南朝六號墓⁽²¹⁾(圖79 (2))、南京燕子磯の普通二年(五二二)墓誌が發見された普通二年墓⁽²¹⁾(圖79 (3))、中大通四年(五三二)に亡くなった蕭偉の墓と推定される南京堯化門梁墓⁽²¹⁾(圖79 (4))、或いは梁代の南京仙鶴門南朝墓⁽²¹⁾(圖79 (5))などと似、より梁代に近いといえる。

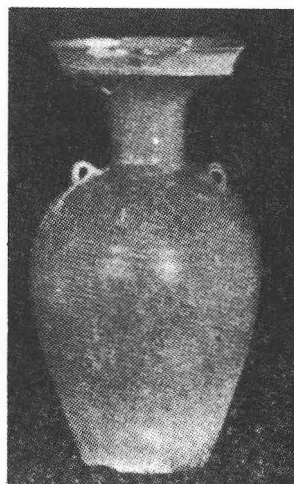
このことは副葬品の盤口壺、陶耳杯、陶俑などについてもいえ、東晉の盤口壺は南京郊區五塘村東晉墓出土品⁽²¹⁾(圖80 (1))にみるように首が短く肩も張って胴が横に膨れているが、梁の盤口壺は南京仙鶴門南朝墓出土品⁽²¹⁾(圖80 (3))のように首が長く全體に細くスマートになっており、西善橋の盤口壺⁽²¹⁾(圖80 (2))はより梁代のものに近いといえる。また西善橋墓から出土した陶耳杯⁽²¹⁾(圖81 (2))は、南京新民門外老虎山東晉墓から出土した陶耳杯⁽²¹⁾(圖81 (1))と比べ、兩端の反り返り方が激しいが、同じような頭耳杯は梁代の南京板橋南朝墓⁽²¹⁾からも出土している。また陶俑も、男子のそれ⁽²¹⁾(圖82 (2))は全體のプロポーションが蕭秀墓出土俑⁽²¹⁾(圖82 (1))など梁代のものに近く、女子のそれ⁽²¹⁾(圖82 (3))は陳の油坊村大墓に似た陶俑⁽²¹⁾があり、同じように髪を大きく雙環に結っているが、西善橋墓のものはまだ幾分硬い所があり、油坊村大墓の方が更に自然な印象に近くなっている。



(1) 南京五塘村東晉墓出土 高35.4cm



(2) 南京西善橋墓出土

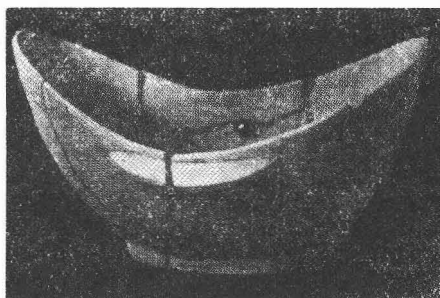


(3) 南京仙鶴門南朝墓 高39.5cm

圖80 盤口壺



(1) 南京老虎山東晉墓出土



(2) 南京西善橋墓出土

圖81 陶耳杯



(1) 南京棲霞山甘家巷六號墓
(蕭秀墓) 出土男俑 高30cm



(2) 南京西善橋墓出土男俑



(3) 南京西善橋墓出土女俑
高37.5cm

圖82 陶 俑

これらを総合するに、西善橋墓は齊末から梁の年代の幅をみて、より梁代に近いものであるといえる。従ってその「竹林七賢圖」の實際の制作年代も齊末または梁で、梁代という可能性が大であり、金家村墓と吳家村墓の二基の齊陵より晚いということが考えられよう。恐らく金家村墓以前の帝陵に更に完全な「竹林七賢圖」磚畫があつて、金家村墓と吳家村墓はそれを繼承しながら次第に畫像が崩れていったが、その後で西善橋墓はより完全な磚畫の型もしくは粉本を手に入れ、諸王クラスの墓であるにも拘らず、それに基づき制作したのである。従ってこれによって判明したことは、現在の發掘資料に據る限り、「竹林七賢圖」磚畫の制作は勿論宋代に遡ることはなく、全て齊以後だということである。

西善橋墓でみたような「竹林七賢圖」磚畫の制作が全て齊以後だということは、また觀點を變えて次の事實によっても證されよう。即ちこの「竹林七賢圖」磚畫の「竹林七賢圖」としての最も大きな特徴の一つは、七賢を並べて畫く際に、その代表格である阮籍と嵇康の扱いに關して、阮籍を最初にもつて來ずに嵇康を最初にもつて來たことである。これは比較的新しいことで、東晉の戴逵(三三八—三九五)の著した『竹林七賢論』⁽²³⁾の序列は不詳であるが、他に袁宏の『竹林名士傳』⁽²⁴⁾、陶淵明(三六五—四二七)の『集聖賢群輔錄』⁽²⁵⁾は阮籍—嵇康の順である。そして宋に入っても上引の劉義慶『世說新語』は勿論、山濤と王戎を除く五人を詠んだ顏延之(三八四—四五六)の『五君詠』⁽²⁶⁾も阮籍を最初にもつて來ている。従って東晉の顧愷之や宋の陸探微の畫いたという「竹林七賢圖」も、恐らく阮籍—嵇康の順であつたと考えられる。そして管見の限り、嵇康を先に置いたのは齊・梁間に宮廷詩人として活躍した沈約(四四一—五一三)の『七賢論』⁽²⁷⁾が最初であり、沈約はその中で嵇康を「上智の人」とほめたたえ、阮籍については「才器宏廣」しながらも「容貌風神は叔夜(嵇康)に及ばず」とはっきり述べている。沈約はこの序列に隨分拘つたようで、その著『宋書』卷七三、顏延之傳⁽²⁸⁾において「五君詠」に觸れた際も、嵇康—阮籍の順にその文章を引用している。無論、『文選』卷二⁽²⁹⁾に收録された「五君詠」は阮籍—嵇康—劉伶—阮咸—向秀の順で、これが本來の形であろう。つまり沈約の頃から嵇康—阮籍とする序列が出來上がったのである。

沈約は宋・齊・梁の三王朝に仕え、宋ではまだ表だった地位にいなかったが、齊に入ると後の文惠太子蕭長懋の記室參軍と

なり、蕭長懋が皇太子に立てられると太子家令となり、著作郎を兼ねて『宋書』百卷を著した。また齊武帝の永明時代（四八三—四九三）には竟陵王蕭子良の西邸サロンに集まって「永明體」と稱する詩風の旗手となり、謝朓・任昉・陸倕・王融・蕭衍等とともに「竟陵の八友」と呼ばれた。そして蕭衍が梁王朝を創業すると尙書左僕射となり、次いで尙書令に進んで官界に重きをなした。「七賢論」の正確な著述年代は不詳であるが、『宋書』百卷のうち紀傳の七十卷は永明六年（四八八）二月に完成^(明)しているから、遅くともこの時点には嵇康—阮籍とする序列は出来上がっていた筈である。またそれは必ずしも沈約が最初に唱えたとする必要もなく、當時の貴族の人間觀や趣味を反映したものと考えられる。いずれにしても帝陵の磚畫「竹林七賢圖」は沈約などの影響力のもとにその序列に基づいて制作されたと考えられ、そのことは自ずと磚畫「竹林七賢圖」が齊以後に作られたことを物語っているのである。従ってまた上述の東昏侯が潘妃のために神仙・永壽・玉壽の三宮殿を起こし、「七賢を作り、皆美女をもって側に侍らせた」^(明)（『南史』東昏侯紀）という「七賢圖」も、まさに金家村や吳家村の帝陵と同時にあり、嵇康—阮籍の順であつたらう。

七 南齊繪畫における磚畫の位置

以上考察した如く、これまで南朝帝陵で發見された磚畫は全て南齊以後のもので、その構想、實際の制作ともに南齊以後になされたものと考えられる。それでは、これら「竹林七賢圖」や「羽人戲龍・戲虎圖」は、南齊繪畫においてどのような位置を占めるのであろうか。南齊繪畫について現在の我々が持っている文獻史料は、南齊の謝赫の『古畫品錄』、陳の姚最の『續畫品』、唐の張彥遠の『歷代名畫記』、そして『南齊書』の斷片的な記事など、實に寥々たるもので、墳墓などの發掘資料と嚴密に對應させることは到底不可能なものであるが、どのような畫家があり、どのような活動がなされ、どのような作品があつたかについては概略言いでよう。

一體、南齊という王朝は高帝蕭道成以來、繪畫に格別關心を示したようである。『南齊書』卷三二、何戢傳には、宋の孝武帝が顧景秀畫くところの「蟬雀扇」を何戢に賜り、陸探微や顧彥先といった當時の名畫家もその巧絶さに驚嘆したが、何戢は高帝蕭道成が「頗る畫扇を好んだ」ので、王晏を介して献上したところ、高帝は王晏をして厚くその意に酬いさせたという逸話を載せている。また次の武帝蕭贍は北伐せんとした時、毛惠秀に命じて「漢武北伐圖」を畫かせ、中書郎の王融にその事を掌管させたが、畫が成ると非常に珍重して瑯琊臺上に置き、常に披いて鑑賞したという。そして東昏昏が潘妃のために神仙・永壽・玉壽の三殿を起した時、「七賢圖」を作らせ美女を侍らせたことは先に記したが、更に玉壽殿内に「飛仙帳」を作つて四面を繡綺で飾り、窗間にはことごとく神仙を畫いたといひ、また閼武堂において芳樂園を起した時には、池を跨いで紫閣の諸樓觀を立て、壁には男女の私褻の像を畫かせたといふ。このように當時、皇帝の繪畫趣味を反映して、宮廷を中心になり盛んに繪畫制作が行われたことが知れるが、『南齊書』卷五三、李珪之傳⁽²⁸⁾に載せる、武帝の永明四年(四八五)、少府卿の毛惠素が勅命によって銅官の碧青一千二百斤を錢六十萬で買つて「御畫」に供したというのも、その宮廷を中心とする盛んな制作活動を裏附けるものであらう。

従つて當時の宮廷の内府に多くの名畫が收藏されていたことも當然豫想されるところであるが、果たして張彥遠の『歷代名畫記』卷一、「敍畫之興廢」には、

南齊高帝、科其尤精者、錄古來名手、不以遠近爲次、但以優劣爲差。自陸探微至范惟賢四十二人、爲四十二等、二十七秩、三百四十八卷、聽政之餘、旦夕披玩

とある。即ち南齊高帝はとりわけ優れた作品を分類して、古來の名手を記録し、時代の遠近によって順序をつけるのではなく、ただ優劣によってランク附けをした。その結果、上は陸探微から下は范惟賢まで、四十二人を四十二のランクに分け、二十七帙、三百四十八卷に収めて、政務の暇な折に朝夕披いて楽しんだのである。これは無論内府の收藏品についていったことで、そのコレクションは禪讓によって宋の王朝から受け継いだものもあれば、高帝自身が王朝樹立後に蒐集したものもあつ

たと思われる。そしてその收藏場所が祕閣で、『古畫品錄』の曹不興⁽²⁸⁾の條に、「不興の迹、殆ど復た傳うることなく、唯だ祕閣の内に一龍あるのみ」と記す通りである。いずれにしても當時の繪畫の名品の殆どがこの祕閣に集まっていたであろうことは想像するに難くないところである。

また上引の記事で興味深いのは畫家の品等を行っていることで、古今の名畫家四十二人を選び出し、それを四十二の等級にランク付けをしたとある。六朝時代は、魏晉以來、人物批評が盛んに行われ、それは宋の劉義慶の撰述した『世說新語』などにみられる通りであるが、人物に限らず書や畫の品第も盛んで、特に書の場合は既に宋の時代に羊欣⁽²⁹⁾（三七〇—四四二）による『古來能書人名』などが撰述されている。繪畫においても南齊初期にこのような品第論が行われたことは注目すべきで、高帝を中心にかなり高度の繪畫鑑賞が行われたことを物語っている。また近年の陳傳席氏の研究によると、この高帝のコレクション及び品第論は謝赫の『古畫品錄』とも幾分關係があったという。即ち『古畫品錄』の序には、氣韻生動・骨法用筆などの「六法」について述べた後に、

然迹有巧拙、藝無古今、謹依遠近、隨其品第、裁成序引

とある。古來難解な箇所として知られるが、陳傳席氏は「謹依遠近、隨其品第」の二句に注目し、「遠近に依る」とあるからには、これに先だって遠近の繪畫作品を收録したものがあつた筈であるし、「其の品第に隨う」とあるからには、もともと品第が存在した筈だといひ、それらに依據して選裁と鑑別を行い序を加えたと解したのである。現行の『古畫品錄』は、三國吳の曹不興から梁の中大通四年（五三三）に亡くなった陸晄⁽³⁰⁾まで二十七人の畫家を取上げ、第一品から第六品の六等に品第しており、高帝のコレクションと品第論だけに止まらないで、更に「梁の武帝尤も寶異を加え、仍お更に搜尋す」（『歷代名畫記』敍畫之興廢）という、梁の武帝が大切にし更に搜し求めたコレクションも對象になっていたと考えられるが、それらは多分品等しただけで文字の説明がなかったので、それらに對して品等はそのままに「裁成」したものである。これは甚だ傾聽すべき意見で、これによって「謹みて遠近に依る」と「謹」字が使われ、「其の品第に従う」と「其」字が使われたのも納得される。

また事實、現行の『古畫品錄』は第一品に陸探微・曹不興・衛協・張墨・荀勗の五人を列し、その筆頭に陸探微を擧げており、齊高帝の品第論が「陸探微より范惟賢まで四十二人」と、陸探微をやはり第一等に品等したのと合致するのである。現行『古畫品錄』に載っていない最下等の范惟賢など十數名は撰述の時點で創られたものと思われるが、宋の陸探微が東晉の顧愷之以上に最高に評價されているのも特に注目されるところである。齊高帝はまた書を好んで、書の古迹十一帙を王僧虔に示して能書の人名を求め、それに對して王僧虔は民間で得た、帙中になく吳大皇帝・張芝などの作品十二卷を獻上し、併せて宋の羊欣の撰した『古來能書人名』を獻上したという。謝赫が齊高帝とどのような關係にあつたかは不明であるが、書において行われたと同じことが繪畫においても行われたのである。

そこで、いま『古畫品錄』に従つて南齊の畫家を擧げると、第一品と第二品に該當する者はいなくて、第三品に姚曇度と毛惠遠、第四品に遽道愍、章繼伯、第五品に劉瑱、第六品に丁光がいた。この他、姚最の『續畫品』⁽³⁸⁾にも、南齊の畫家が取上げられて、『古畫品錄』の撰者である謝赫を始め、姚曇度の子の釋惠覺、毛惠遠の弟の毛惠秀、子の毛稜、遽道愍の甥の釋僧珍、沈標、沈粲などがおり、また張彥遠『歷代名畫記』⁽³⁹⁾にも、これ以外に宋の宗炳の孫の宗測、劉係宗などの名が擧がっている。

その他にも宋の畫家とされながら南齊でも活躍した畫家がいたものと思われる。これら南齊畫家のうち、宮廷に關係した畫家としては毛惠遠、毛惠秀兄弟が擧げられる。『歷代名畫記』⁽³⁹⁾卷七によると、毛惠遠は河南滎陽陽武の人で、馬を畫くのを得意として、劉瑱の畫く「婦人」とともに當代第一を並び稱されたといい、唐代に傳世した作品の中に「七賢藤紙圖」⁽³⁸⁾があった。藤紙は浙江餘杭縣の由拳村の名産の紙で、それに「七賢圖」を畫いたものであろう。活躍年代は、弟の毛惠秀が武帝の永明年間（四八三—四九三）に宮中の書庫である祕閣に待詔として仕えたというから、彼もその頃か或いは少し前と思われる。『古畫品錄』にも品等されていたから既に高帝の時に活躍していた可能性がある。また「酒客圖」⁽³⁸⁾という「宮卷」があつたというから、彼も祕閣に仕えた毛惠秀同様、宮廷畫家として活躍したものと考えられよう。當時の宮廷畫家は、宋の「武帝の左右に居り」（『歷代名畫記』卷六）、「蟬雀扇」などを制作した顧景秀や、上述したように齊の武帝の命に従つて「漢武北伐圖」を制作した

毛惠秀のように、皇帝の側近く侍ってその命令のままに制作した。そしてまた毛惠秀が宮廷の書畫のコレクションを收藏した祕閣に待詔として仕えた⁽³¹⁾ように、傳世の古畫の名品などをみることが出来、それらを通して研鑽を積んだものと考えられよう。

南朝帝陵の磚畫「竹林七賢圖」や「羽人戲龍・戲虎圖」は、南齊の宮廷を中心としたこうした状況を背景に生まれたのである。もとより型押しした磚畫であるから畫家は元となる原畫を畫くだけであるが、帝陵であるからには宮廷畫家が關係していた筈である。またこれらの磚畫が南齊のいつ頃から帝陵の墓室内に制作されるようになったかについては、やはり南齊最初の高帝の時からと考えるのが妥當であろう。現在發見されている磚畫は、丹陽仙塘灣にある齊景帝蕭道生の修安陵（建武元年造營 四九四）が最も早く、全て南齊後期のものであるが、參道の麒麟石獸が丹陽趙家灣に存在する高帝の父宣帝蕭承之の永安陵以來、一貫して同じ形式で制作されていたのを考慮すると、南齊初期からと考えるのが妥當である。高帝自身の泰安陵は勿論、高帝が追尊し造營した宣帝の永安陵にも制作されたと考えられるのである。かなり高度の鑑賞を行った高帝の繪畫趣味からすれば、「竹林七賢圖」のようなこれまでに例のない作品が墓室内の壁にはめ込まれても、何の不思議もないところであろう。宣帝の永安陵以來、丁度參道の石獸が、僅か二十四年間のこととはいえそれなりに様式を變化させてきたと同じように、磚畫も様式を變化させながら和帝の恭安陵まで制作され續けてきたのである。磚畫の場合は型或いは粉本が使われるから、様式變化はそれ程ではないと思われるけれども、事實は仙塘灣、金家村、吳家村の後期の帝陵でみたように、時の流れとその時々⁽³²⁾の状況に應じてかなりの變化を示していたのである。いずれにしても「竹林七賢圖」や「羽人戲龍・戲虎圖」などの磚畫のもともとの形式は、南齊初期の高帝の宮廷にいた畫家たちによって作られたと考えることが出来る。

ところで、磚畫「竹林七賢圖」の嵇康像が、嵇康の四言詩の句「目送歸鴻、手揮五絃」に題材をとっていたことを先に考證したが、東晉の顧愷之も同じくこの句に題材をとって制作したことがあり、「手揮五絃は易く、目送歸鴻は難し⁽³³⁾」（『世說新語』巧藝篇）と述べている。従ってこの圖様は顧愷之によって最初に作られ、それがこの磚畫「竹林七賢圖」に應用されたということが考えられる。特にこの嵇康像は西善橋墓の磚畫（圖73①）をみると、膝に置いた琴を弾きながら焦點を定めるともなく遠

くをみつめた目の表現に見るべきものがあり、嵇康の氣高い精神性は十分に表現されているといえる。顧愷之もこうした人物の精神性の表現に秀でており、唐の張懷瓘は六朝を代表する顧愷之、陸探微、張僧繇の三人の畫家の特徴を捉えて、「張はその肉を得、陸はその骨を得、顧はその神を得る」と評し、とりわけその精神性の表現に着目している。この西善橋の「竹林七賢圖」の場合も、顔貌の表現に特に意が用いられており、もし寫し崩れを割引しながら改めて見るならば、精神性の表現はこの嵇康像のみならず阮籍、山濤、王戎、阮咸、榮啓期の像(圖71)などにも顯著に認められよう。山濤が左手に杯を持って右手でその袖を掴み顔を上げて遠くを見つめた様、また王戎が右手で如意を遊びながら示したシニカルな表情、若々しい阮咸(圖75)が琵琶を弾きながら下目使いに一點を凝視した顔の表現などに、精神性が感じられよう。線描でありながら線自體にはそれ程優れたものは感じられず、「骨」や「肉」の造形性よりも「神」の精神性の表出に重きが置かれているのである。その意味ではこの「竹林七賢圖」は顧愷之の繪畫の系譜上にあるということが出來、この時代の顧愷之系統の畫家の筆になったものと考えられる。實際この南齊初期にも顧愷之系統の畫家はおり、上述の宮廷畫家の毛惠遠がそうである。毛惠遠は自らも「七賢圖」を畫いているが、張彥遠の『歷代名畫記』⁽³¹³⁾卷七の傳によると、その「酒客圖」は「筆迹の外、頗る風格あり、意匠は顧(愷之)を師とした」といい、卷二の「敘師資傳授南北時代」では、「毛惠遠は顧を師とす」とはっきり顧愷之師事をうたっている。無論毛惠遠と特定することは難しいが、原畫を制作した候補の一人と考えられよう。何よりも南齊初期にあのような「竹林七賢圖」が現れる素地はあったのである。

この「竹林七賢圖」に對して、「羽人戲龍・戲虎圖」は更に新しい傾向を示した畫である。無論題材自體は漢代以來の一種の「四神圖」であり古いが、その「四神圖」という題材の扱い方にしても、單に四神を畫くのではなく、羽人と青龍・白虎が互いに戯れる様に畫き、これまでになかった新機軸が認められる。しかしそれ以上に新しいのは羽人の描寫にみられた線である。仙塘灣墓と金家村墓の「羽人戲虎圖」(圖52)を見る限り、その羽人(圖69)は遒勁かつ流麗な息の長い連綿と續く輪郭線によって捉えられて、デフォルメにも似た瘦身の體軀が見事に表現され、それ故にこの世のものでない仙骨の超越性がひしひし

と傳わって來るかのようである。長く大きな耳をもち面長の魁偉な容貌といい、顔と同じくらいに細く引締まった胸といい、或いは腰部における流れるように風になびく羽衣の裾や飄帶といい、膝を折り履をはいた細く長くまっすぐな脚といい、これら全てがただ線によって成し遂げられている。「竹林七賢圖」以上に線のもつ藝術的な効力が自覺され、彫琢を加えることによってその効力が十二分に發揮された作品である。上述の如くこの「羽人戲虎圖」磚畫は仙塘灣墓と金家村墓では同範であつたが、兩墓の磚畫は他の「出行圖」の「騎馬武士」「執戟侍衛」「執扇・蓋侍從」「騎馬樂隊」、或いは「竹林七賢圖」の場合には明らかに範を異にしており、この圖だけが何か特別な理由によって同じ範で作られていた。金家村墓の場合、他の磚畫と藝術的に格段の差が認められるところから、恐らく藝術的に優れていたが故に範が大切に保存され繰返し使用されたものと思われる。それでは、この「羽人戲虎圖」の原畫の作者として誰が考えられるであらうか。ここで思い起こされるのは張彥遠の『歷代名畫記』卷六、陸探微の條に引かれた唐の張懷瓘の陸探微に對する次の評語であり、かなり「羽人戲虎圖」の羽人描寫に當てはまっている。

陸公參靈酌妙、動與神會、筆迹勁利、如錐刀焉。秀骨清像、似覺生動、令人懷懷、若對神明。雖妙極象中、而思不融乎墨外。

先ず筆跡、即ち線が特に問題とされているのも注目すべきであるが、その線が「勁利」で尖つた刀のようだというのは、羽人全體、とりわけ風になびく羽衣の裾や飄帶に當てはまって、觸れば手が切れるかのようである。また「秀骨清像」、即ち人物の骨組みが秀で肉附けが清らかというのは、羽人の容貌のぜい肉をそぎ落として骨格が表面に出てきたような表現に當てはまり、また長身で瘦せた體軀にもびったりであり、その肉の引締まった強靱な體軀の空中を驅ける様は、確かに充實した「生動」を感じさせる。「懷懷として神明に對するが如からしむ」というのも、この世ならぬ神靈の仙人を題材として十分過ぎる程である。最後の「妙は象中に極むと雖も、而も思は墨外に融けず」の句は、陸探微の繪畫の妙が特に造形にあつたことをいい、しかも構想が畫の外に融け散っていくことなく畫中に凝集していることをいったものと思われ、圖の羽人は顔貌の表現をみても

わかる通り確かに精神性よりも形の把握に妙味が發揮されているのである。そしてその結果として冒頭の、陸探微は對象の靈を酌みとり常に神髓をつかんでいるという評語に纏められるように、圖においても羽人表現の核心をなす仙骨は見事に捉えられているのである。上述の如く、齊の高帝は陸探微を四十二人の名畫家の筆頭に推し、謝赫『古畫品錄』もそれに従って六品中の第一品筆頭に品等し、序において「陸探微と衛協のみ備さにこれ（六法）を該ぬ」と述べ、また「包前孕後、古今に獨立す」⁽³¹⁶⁾（陸探微條）と述べたが、この羽人の圖はそうした評價に耐えられるだけのものをもっている。但し謝赫のこの評は、陸探微を顧愷之以上に評價したことで後世唐の李嗣眞や張彥遠の激しい非難⁽³¹⁷⁾を浴びることになるが、それは精神的なものを重視するか造形的なものを重視するかの違いであり、この時代の齊高帝や謝赫は造形的なものをより重視したと考えられる。そうした時代の好尚は先にみた南齊初期帝陵の獅子灣や前艾廟の麒麟石獸にも窺われるところであり、またこの「羽人戲虎圖」において、羽人の表現の妙に比して虎の表現がそれに及ばないのも、本來虎の畫に不可欠な精神的な威猛さの表現がこの時代の好尚に合わなかったことを露していよう。

このように「羽人戲虎圖」の羽人は張懷瓘の陸探微評にかなり當てはまっていると思われるが、陸探微の活躍期からみて、この「羽人戲虎圖」の原畫を畫く可能性は果たしてあったであろうか。陸探微は吳の人で、『歷代名畫記』の宋の項に載せられ、その傳にも「宋の明帝（四六五—四七二）の時、常に侍從に在り」とあるように、一般に劉宋の畫家とされているが、諸種の史料からその活躍が南齊に及んだことが證せられる。その一は、陸探微が南齊の高帝蕭道成の肖像を畫いていることである。即ち『歷代名畫記』卷六、陸探微の傳には傳世作品七十一點が擧がっているけれども、その中に「齊高帝像」⁽³¹⁸⁾があり、高帝の在位中（四七九—四八二）かそれ以後に制作されたと考えられる。その二は、『南史』卷七五、宗測傳によると、宗炳の孫の宗測は、齊の武帝の永明三年（四八五）、詔によって太子舍人に徵されたが就かず、名山に遊ばんとし江陵の家を去って廬山にいき宗炳の舊宅に留まったが、そこで侍中の王秀之に欽慕されるところとなり、王秀之は陸探微に宗測と自分が互いに相對している像を畫かせたとある。後者の話は『南齊書』卷五四の宗測傳にはみえないので稍や疑いがもたれるけれども、前

者の史料により少なくとも齊の高帝の時にはなお活躍していたことは確かであろう。従って南齊初期に高帝が陸探微に「羽入戲虎圖」を畫かせるという可能性はあったわけである。標準となるべき信憑性の高い作品が皆無であるので、依然として陸探微と特定することは出来ないけれども、諸々の状況を勘案し候補の一人に考えたのである。陸探微は當時最も高く評價された畫家であるから當然彼を師とする畫家⁽³²²⁾もいた筈で、そうした畫家も勿論候補に挙げられよう。

いずれにしても「竹林七賢圖」や「羽人戲龍・戲虎圖」磚畫などは、その原畫が南齊の宮廷畫家の手によって制作されたものと考えられ、これまで手懸りすらなかった南齊の繪畫を知る絶好の資料といえるのである。

おわりに

南朝帝陵の石獸と磚畫について、具體的には帝陵の比定という作業による様式的編年と、表されたものの名稱や表現内容を問題とする圖像の両面から考察を進めてきたが、幾つかの點でこれまでの研究の不備を補えたようである。まず帝陵の參道入口に置かれた石獸を中心に検討し、これに一部磚畫を検討することによって補った帝陵の比定は、その結果を示せば別表(二四〇頁)の通りである。

従來の説に對して改めた主な點は、一、齊の明帝の興安陵とされてきた丹陽三城巷(1)の石獸を梁の最後の敬帝の陵とし、興安陵には丹陽金家村の石獸をあてたこと、二、宋の文帝の長寧陵説が一部にあった南京獅子衝の石獸を陳の文帝の永寧陵としたこと、三、齊の宣帝の永安陵とされてきた丹陽獅子灣の石獸、高帝の泰安陵とされてきた趙家灣の石獸を、互いに入換えて前者には趙家灣、後者には獅子灣の石獸をあてたこと、四、これまで年代が曖昧であった丹陽陵口の石獸を梁の末期の簡文帝の死後に制作されたとしたこと、五、陳の武帝の萬安陵とされた江寧石馬衝の石獸を齊もしくは梁初の王の墓のものとした

南朝帝陵の比定表

場 所	石獸體長	王朝	諡 號	諱	陵 名	卒 年
南京 麒麟鋪	(右) 3.18(m) (左) 2.96	宋	武 帝	劉 裕	初寧陵	永初3年(422)
丹陽 趙家灣	(右) 毀 (左) 毀	齊	宣 帝	蕭承之	永安陵	建元元年(追 479)
丹陽 獅子灣	(右) 毀 (左) 毀2.95	齊	高 帝	蕭道成	泰安陵	建元4年(482)
丹陽 前艾廟	(右) 2.70 (左) 3.15	齊	武 帝	蕭 蹟	景安陵	永明11年(493)
丹陽 爛石壠	(右) 無 (左) 1.58	齊	前廢帝 (鬱林王)	蕭昭業	王 墓	隆昌元年(494)
丹陽 水經山村	(右) 1.85 (左) 2.00	齊	後廢帝 (海陵王)	蕭昭文	王 墓	建武元年(494)
丹陽 仙塘灣	(右) 2.90 (左) 3.00	齊	景 帝	蕭道生	修安陵	建武元年(追 494)
丹陽 金家村	(右) 2.13 (左) 2.38	齊	明 帝	蕭 鸞	興安陵	永泰元年(498)
丹陽 吳家村		齊	和 帝	蕭寶融	恭安陵	天監元年(502)
江寧 石馬衝	(右) 2.72 (左) 2.50	齊			王 墓	
丹陽 三城巷2	(右) 3.05 (左) 3.10	梁	文 帝	蕭順之	建 陵	天監元年(追 502)
丹陽 三城巷3	(右) 無 (左) 3.10	梁	武 帝	蕭 衍	修 陵	太清3年(549)
丹陽 三城巷4	(右) 毀 (左) 無	梁	簡文帝	蕭 綱	莊 陵	大寶2年(551)
丹陽 陵 口	(右) 3.95 (左) 4.00	梁				
丹陽 三城巷1	(右) 3.02 (左) 毀	梁	敬 帝	蕭方智		永定2年(558)
南京 獅子衝	(右) 3.19 (左) 3.11	陳	文 帝	陳 蒨	永寧陵	天康元年(566)
南京 油坊村		陳	宣 帝	陳 頊	顯寧陵	太建14年(582)

こと、などである。

これらの改訂に際し判断の基準としたのは、考察の過程で次第に明るみに出てきたことであるが、その地理的位置に關しては、先ず大まかにいうと齊と梁は丹陽を帝陵區とし、宋と陳は帝陵を南京郊外に築いたが、前者について更に細かくいえば、齊の帝陵は丹陽東北の經山の周圍に築かれたのに對して、梁の帝陵は丹陽の東の荆林三城巷に築かれたことである。従つて丹陽三城巷に四基南北に並んだ帝陵の石獸は全て梁のもので、最も南の三城巷（1）の石獸も南朝帝陵のうち唯一比定の確實な梁文帝の建陵のすぐ南隣にあつて梁の帝陵のものといえる。また南朝帝陵の並べ方は右側を尙しとする考え方が行われ、丹陽三城巷の東向きに南北一列に並んだ梁の文帝建陵、武帝修陵、簡文帝莊陵の石獸はその典型的な例であるが、この考え方に從えば丹陽趙家灣と獅子灣の石獸も南向きに東西に並んで、右（西）が父宣帝蕭承之の永安陵、左（東）が子の高帝蕭道成の泰安陵に比定される。次に石獸の形式に關していうと、帝陵の石獸は全て角を有して右が一角、左が二角であるが、齊の石獸は正面からみて左右石獸ともに手前の前肢を前に出すのに對して、宋・梁・陳の石獸は奥の方の前肢を前に出す形式をとっていることである。但し一件だけ例外があつて、梁文帝の建陵の場合は、梁王朝成立の初年に造營されたため未だ梁の形式が確立しておらず齊の形式がとられたのである。そしてこの形式に照らすと、三城巷（1）の石獸は勿論、陵口、南京獅子衝の石獸も梁以後のものとなる。またこの形式は王の墓に置かれた角がなく鬣をもった獅子型石獸にも適用され、丹陽爛石壠、水經山村、そして江寧石馬衝など、手前の前肢を前に出した石獸は全て齊の墓の範疇に入ることになる。陳の武帝の萬安陵とされた江寧石馬衝の石獸を齊もしくは梁初の王墓石獸とした所以である。この他にも宋・梁・陳の石獸と齊の石獸との形式の違いは歴然としており、例えば前者の石獸は概して獅子の形をベースに頭が大きく胴が短く作られ、前肢の肘の所に獅子特有の三角形の長毛があるのに對して、後者は虎の形をベースに頭が小さく胴長に作られ長毛も表現されない。また前者の石獸は鬚髭が胸に垂れてそのまま左右に三本ずつ分かれるのに對して、後者は胸に垂れた鬚髭とは別に胸の毛が表され左右に三本ずつ分かれている。結果的に南朝帝陵のうちでは齊だけが特殊な形式を採用しており、石獸の翼の附け根の部分に表された四瓣もしくは

は五瓣の花文も齊の形式の石獸だけにみられるものである。

このようなことを基準に石獸による帝陵比定を行ったが、更に墓自體が発掘されて甬道や墓室内で磚畫が発見された丹陽の仙塘灣墓、金家村墓、吳家村墓、或いは南京の油坊村大墓については、その磚畫を比較することによって編年の檢證をした。その結果、丹陽の三基の陵のうち金家村墓と吳家村墓では「竹林七賢圖」や「羽人戲龍・戲虎圖」などに榜題の誤りや畫像の寫し崩れが目立って、金家村墓、吳家村墓の順に著しくなり、仙塘灣、金家村、吳家村の順に造營されたことがわかった。吳家村墓は石獸が発見されていないが、帝陵に特有の甬道部の二重石門が発見されて帝陵であることは確實であり、その磚畫を金家村墓と比較することによって、それより晚い齊最後の和帝の恭安陵に比定した。また南京の油坊村大墓も石獸が発見されておらず、磚畫も出土したのは甬道の「獅子圖」だけであったが、墓室が橢圓形で天井がドーム狀を呈するなど南朝末期の進んだ墓葬形式を示しており、陳の宣帝の顯寧陵に比定した。その他、磚畫は南京西善橋墓で完全な「竹林七賢圖」が発見されているが、この墓は甬道の石門が一重であるところから帝陵ではなく王侯貴族の墓であることがわかり、その造營時期も當初考えられたように東晉とか晉—宋間ではなく、墓葬形式や副葬品などから、齊末もしくは梁と考えるのが妥當である。しかしその磚畫「竹林七賢圖」は現在發見されているものうちでは最も完好な圖を示し、本來帝陵のものであるにもかかわらず、墓の主人公の王侯貴族が何等かの方法で型（範）を入手して磚畫を制作し、自分の墓に飾ったものと推測される。

このように南朝帝陵の比定と關連して石獸や磚畫の編年をしてきたが、これら石獸と磚畫を改めて圖像の面から考察すると、まず一角と二角をもった石獸の名稱については、ともに麒麟と稱するのが妥當である。その形は、後漢の墳墓の墓前に置かれた石獸の延長上にあり、これまでも一角獸を天祿、二角獸を辟邪とする説、一角獸を麒麟、二角獸を天祿とする説などが行われてきたが、いずれも十分に納得させるだけの根據を缺いていた。この帝陵石獸は、『南齊書』や『梁書』では一貫して「麒麟（麒麟）」と呼んでおり、宋の武帝劉裕の初寧陵以來、麒麟に對する何等かの特別な考え方に従って、南朝では麒麟とされてきたものと考えられる。そしてその機能の仕方も麒麟本來の祥瑞の瑞獸としてではなく、他の青龍・白虎・朱雀・玄武の

四神や獅子と同じように墓を守護する辟邪の目的で使われているのが特徴である。漢代にも既に麒麟に對するそのような考え方は萌芽的にあり、四神と併せて「五靈」と呼ばれたが、それを發展させて辟邪の目的に使用したものと思われる。

また帝陵の墓室の左右壁にはめ込まれた「羽人戲龍・戲虎圖」については、北魏の畫像石棺の「仙人騎龍・騎虎圖」などと關連し、これまで「昇仙圖」とする説があったが、ともに「四神圖」を構成する青龍、白虎の圖とすべきである。南朝帝陵の場合は前壁と後壁に朱雀と玄武の磚畫がはめ込まれた形跡があり、北魏畫像石棺の場合も前檔板と後檔板に朱雀と玄武が表されていたからである。どちらも先導したり騎乘したりしている人物は墓の主人公ではなく、羽衣をつけた仙人であり、天上にあって青龍や白虎の神獸を世話する仙人が仙草の餌を與えたり騎乘したりしながら互いに戯れているに過ぎない。むしろ「四神圖」を仙人が神獸と一緒に戯れる形式に表したこと自體に南朝的特質を見るべきで、この時代の南朝貴族の餘裕を窺うことが出来、その形式が漢化政策をとった北魏に影響して畫像石棺の畫像が生まれたものと解せられる。

さて、南朝帝陵の石獸と磚畫を考察した結果は以上の如くであるが、これら石獸と磚畫を改めて南朝彫刻史、繪畫史の方面から振り返ってみると、幾つかの點が特色として擧げられる。先ず、この考察を通して何よりもくっきりと浮かび上がってきたのは、南齊時代の彫刻、繪畫の兩面における造形活動の高揚ぶりである。宋から齊・梁を経て陳に至る帝陵石獸を概觀してみると、その造形的な一つのピークが南齊初期の獅子灣や前艾廟石獸にあったことは容易にみてとれる。獅子灣石獸は、頭・胸・胴・四肢の各部の表現の寫實的な正確さといい、それら各部を貫き纏め上げた動勢といい、前に突き出すように大きく作った胸部の巨大なヴォリュームといい、まことに充實し切つて精悍な姿勢に作られている。またこれに對して前艾廟の石獸は、下腹部を重く垂らして重心低く全體におっとりした姿勢に作り、動勢よりも頸、胸、下腹部が描く優雅な曲線や、背から腰を経て尾に至るなだらかな曲線が強調されている。かようにこの二つの石獸は對照的であるが、單に工人が作ったというのではなく背景に確かな造形理念の存在を感じさせるものがある。南齊の石獸もこれ以後になると、例えば仙塘灣の石獸はなお優れているけれども、躍動的な動きが強調され過ぎて稍やバランスを失っているのが難であり、金家村墓はもはや瘦せ過ぎている

といえる。従つて獅子灣を齊高帝の泰安陵、前艾廟を武帝の景安陵に比定した通り、南齊初期の石獸が如何に造形的に優れていたかがわかるが、またこれを宋の武帝の初寧陵に比定される麒麟鋪の素朴な石獸と比べても、如何に優れていたかがわかる。但し現存する宋の帝陵石獸は麒麟鋪だけで、その後どのように展開したかは不明であるが、『南齊書』の豫章文獻王嶷傳に孝武帝の築いた文帝の長寧陵石獸が形勢巧みで、これ以後の帝陵は皆これを模範としたとあるから、この時に改良が行われ、數度の様式的變遷を経て獅子灣石獸が生まれたものと考えられる。

このように獅子灣や前艾廟の石獸を通して南齊初期の彫刻における造形的活動の高揚ぶりが知れたが、繪畫においても帝陵で發見された畫磚を通してそれが證される。南齊後期の仙塘灣、金家村、吳家村の三基の陵、そして南京西善橋墓で見つかった「竹林七賢圖」や「羽人戲龍・戲虎圖」などの磚畫は、もともと南齊初期から墓の中に作られたと推測され、その時の型（範）を繰り返し用いたり、粉本を用いることによって畫像が齊後期まで伝えられてきたと思われる。そして「竹林七賢圖」の場合は、最も出來映え、保存ともに良好であった西善橋墓ですら既に畫像に崩れた部分が認められるのに對して、仙塘灣墓と金家村墓から出土した互いに同範の「羽人戲虎圖」磚畫は實に素晴らしい出來を示しており、しかも同範であるところからその範は何代にもわたり繰返し用いられ、元の形をよく傳えているものと考えられる。特に羽人にみられる線による表現は目を見張らせるものがあり、宋の明帝の時の宮廷畫家であり、南齊の高帝にも仕えてその肖像を畫いたという陸探微の繪畫を思わせるところがある。従つてこの「羽人戲虎圖」は南齊初期の範を用いたか、それに近い範を用いたものと考えられ、獅子灣や前艾廟の石獸とほぼ同時期のものと推測されるのである。片や繪畫、片や彫刻と互いに異なるとはいえ、實際に例えば磚畫の羽人と獅子灣石獸とを比べてみると、羽人を象る丸みを帶びた線の弾力性は、石獸を形作る丸みを帶びたモデリングの弾力性に相通するものを感じさせ、ともに内にみなぎる充實した力と勢いに溢れている。また「羽人戲虎圖」の虎の首から胸腹部に至る二重輪郭線が描く優雅なカーブは、前艾廟石獸の同部分の優雅な曲線に通ずるものがある。恐らくこの二種の造形の背後にはこの時代獨特の確かな造形理念があった筈で、その造形理念の擔い手としては、南齊初期に古えから今に至る名畫家四

十二人を選び更にそれを四十二の等級にランク付けし、かなり高度の繪畫鑑賞を行った齊の高帝などの存在が考えられる。またそのランク附けに一部従って『古畫品錄』を著した謝赫も當然關係があつた筈で、彼の唱えた「六法」（氣韻生動・骨法用筆・應物象形・隨類賦彩・經營位置・傳移模寫）もこれらにみる造形理念と無縁ではなかったものと思われる。例えば氣韻生動とは、この羽人に體現され石獸にも共通してみられるような無駄のない充實した力強さと今にも動き出さんとするような動勢の表現をいうものと考えられ、骨法用筆も羽人を輪郭線だけで象つてしまふ線の存在を前提として、對象の骨組みまで書き切つてしまふ筆の使用法をいうのであろう。いずれにしても、謝赫『古畫品錄』に示された理論、特に「六法」もそれが生まれた歴史的狀況に返して考えてみるべきで、その意味ではこの「羽人戲虎圖」磚畫は最適の材料と考えるのである。

また南朝帝陵の石獸を通してみたもう一つの彫刻史上の特色は、梁・陳の時代における造形表現の文樣的なものへの傾斜である。齊の帝陵形式を踏襲して梁初年に作られた文帝の建陵石獸にも既にみられたように、梁に入ると石獸の體の表面に表された翼の羽根や各所の毛が文樣として體軀から獨立し始めることである。つまり石獸の立體彫刻としての動勢や内實の表現より、靜止した姿勢表現や體の表面裝飾により關心を向け、次第に寫實を離れて大袈裟な表現や過剰な裝飾に陥っていくのである。梁武帝の修陵石獸に當てられる三城巷（3）の石獸は、再び宋の初寧陵の石獸の形式に歸り獅子をベースに作られたものとして重要であるが、獅子を思わせる骨格とモデリングが實によく把握されて文樣的比重は小さく、このような傾向を餘り感じさせない。しかし全體に殆ど靜止した姿勢に作られて翼もフラットであり、齊陵石獸にみた肩から翼にかけての躍動的な三日月形表現も渦卷文樣に變わり線が陰刻されているだけである。そしてこれ以後、堰を切つたように文樣化の傾向を顯著にみせ始め、三城巷（4）の簡文帝の莊陵石獸では、翼の表現も平面的な文樣でしかなくなり、陵口の石獸と、それを踏襲して作られた三城巷（1）の石獸では、翼が體軀とは別個に流れるように表現されて文樣自身の論理を主張し、腰部の毛の表現は左右相稱をなして圖案文樣を見るかの如くである。この傾向は陳の文帝の永寧陵に比定される南京獅子衝の石獸では一層増幅し、大きな頭部は大袈裟に表現されて日本の神樂の面をみるかのようであり、體は雲氣の文樣に化した毛で覆われ、全體にもはや

彫刻ではなく工藝を思わせるものになっている。このような梁から陳に至る造形の傾向は、磚畫が出土していないため繪畫によって檢證することが出来ないのは残念であるが、先にみた南齊の造形と異質なものであることは明かで、必ずしも彫刻に適したものとは言えないにしろ独自の造形感覺があったことがこれによってわかるのである。

これらを要するに、南朝の美術も宋、齊から梁を経て陳へとそれなりに大きな變化をみせながら推移し、南朝帝陵の石獸や磚畫は不十分ながらもその變遷を辿ることを可能にしてくれたのである。

以上、南朝帝陵における石獸と磚畫について述べてきたが、不備な點が多々あると思われる。これらについて關係方面の方々の御教示を仰げれば幸いである。

註

- (1) 同じ著者による「六朝陵墓埋葬制度綜述」(「中國考古學會第一次年會論文集」一九八〇)があるが、こちらで代表させる。
- (2) ここでは歐米收藏の石獸については取扱わないことにする。その他、選葬地法という觀點から論じた次の論考がある。來村多加史「南朝陵墓選地考」(『網干善教先生華甲記念考古學論集』所收、一九八八)。
- (3) 石獸の現在地の地名は、姚遷・古兵編『六朝藝術』、江蘇文物綜錄編輯委員會編『江蘇文物綜錄』(南京 一九八八)に據った。
- (4) 金琦「南京附近六朝陵墓石刻整修記要」(『文物』一九五九年四期)二九—三〇頁。
- (5) 石獸の寸法は姚遷・古兵編『六朝藝術』に據った。
- (6) 一二三頁所引、注(68)参照。
- (7) 宋朝が最初に造營した陵として、武帝劉裕が即位後に父劉翹(孝皇帝)と母趙氏(孝穆皇后)を追尊して丹徒に營んだ興寧陵(一名京陵)があるが、石獸があつたかどうかは不明である。宋書 卷四一
- (8) 孝穆趙皇后傳「晉哀帝興寧元年四月二日生高祖。其日、后以產疾殂于丹徒官舍、時年二十一。葬晉陵丹徒縣東鄉練壁里雲山。宋初追崇號謚、陵曰興寧」。同上 卷五 文帝紀「(元嘉四年)二月乙卯、行幸丹徒、謁京陵」。元和郡縣圖志 卷二五 潤州丹徒縣「永興寧陵、在縣東南三十五里、宋武帝追尊曰孝皇帝、諱翹、初仕郡、爲功曹」。張敦頤 六朝事跡編類 卷一三「蔣山圖經云、在縣東北二十里、政和間有人於蔣廟側得一石柱、題云初寧陵東北隅、以此攷之、其墳當去蔣廟不遠」。
- (9) 林樹中「南朝陵墓雕刻」四四頁所引。
- (10) 南齊書 卷二二 豫章文獻王嶷傳「北第舊邸、本自甚華、臣改脩正而已、小小製置、已自仰簡。(略)東府又有齋、亦爲華屋。而臣頓有二處住止、下情竊所未安」。
- (11) 南齊書 卷二二 豫章文獻王嶷傳「太祖在領軍府、嶷居清溪宅。(略)又啓曰、(略)臣前在東田、承恩過醉、實思嘆往秋之謗、故言啓至切、亦令羣物聞之、伏願已照此心」。
- (12) 南史 卷五 鬱林王條「先是文惠太子立樓館於鍾山下、號曰東田、太子屢游幸之、東田反語爲顛童也」。南齊書 卷二二 文惠太子長懋

傳「以晉明帝爲太子時立西池、乃啓世祖引前例、求東田起小苑、上許之」。

- (13) 梁書 卷一三 沈約傳「約性不飲酒、少嗜飲、雖時遇隆重、而居處儉素。立宅東田、矚望郊阜。嘗爲郊居賦、其辭曰、(略)睨東巘以流目、心悽愴而不怡。蓋昔儲之舊苑、實博望之餘基。(略)」。朱希祖はこの東巘を東岡とみなす。

- (14) 朱希祖「六朝陵墓調查報告書」(「六朝陵墓調查報告」所收) 一一—一三頁。林樹中氏はまたこの青溪北部を東風、今の後宰門底半山園の地と考證している。林樹中「南朝陵墓雕刻」五七頁、注5。

- (15) 南齊書 卷三二 何戢傳「父偃、金紫光祿大夫、被遇於宋武(武帝)。(略)上(齊高帝)頗好畫扇、宋孝武賜戢蟬雀扇、善畫者顧景秀所畫。時陸探微、顧彥先皆能畫、嘆其巧絕。戢因王晏獻之、上令晏厚酬其意」。

- (16) 南史 卷二 宋孝武帝條「(元嘉)十二年、立爲武陵王、二十二年、累遷雍州刺史。自晉江左以來、襄陽未有皇子重鎮、時文帝欲經略關・河、故有此授」。

- (17) 南史 卷五二 安成康王秀傳「秀於武帝布衣昆弟、及爲君臣、小心畏敬、過於疎賤者、帝益以此賢之。(略)佐史夏侯寶等表立墓碑誌、詔許焉。當世高才遊王門者、東海王僧孺、吳郡陸倕、彭城劉孝綽、河東裴子野、各製其文、欲擇用之、而咸稱實錄、遂四碑並建」。宋代には一碑はまだ讀めたようである。張敦頤「六朝事迹類編」卷一三 梁安成王墓條「今所存者二、其一已磨滅、其一字畫猶可讀、乃彭城劉孝綽文也」。

- (18) 拙稿「秦始皇陵と兵馬俑に關する試論」(「東方學報」京都五八冊一九八六)三五九—三六二頁。

- (19) 宋書 卷一五 禮志二「漢以後、天下送死者靡、多作石室石獸碑銘等物。建安十年、魏武帝以天下雕弊、下令不得厚葬、又禁立碑」。

- (20) 同右「晉武帝咸寧四年、又詔曰、此石獸碑表、旣私褒美、與長虛僞、

南朝帝陵の石獸と碑畫

修財害人、莫大於此。一禁斷之。其犯者雖會赦令、皆當毀壞。至元帝太興元年、有司奏、故驃騎府主簿故恩營舊君顧榮、求立碑。詔特聽立。自是後、禁又漸頽。大臣長吏、人皆私立。義熙中、尚書祠部郎中裴松之又議禁斷、於是至今」。西晉の神道柱として、一九七八年に河南博愛縣で出土した苛師(字道將「晉書」卷六一)の族人のものと思われる額銘をもつた神道柱(總高三・一m)がある。劉習祥・張英昭「博愛縣出土的晉代石柱」(「中原文物」一九八一年一期)。

- (21) 趙府君墓闕。北京圖書館金石組編「北京圖書館藏 中國歷代石刻拓本匯編 第二冊」(北京 一九八九)一〇六頁。

- (22) 南京博物院「南京富貴山東晉墓發掘報告」(考古)一九六六年四期。李蔚然「南京富貴山發現晉恭帝玄宮石碣」(考古)一九六一年五期)。

- (23) 晉書 卷一〇 恭帝紀「(元熙)二年夏六月壬戌、劉裕至于京師。(略)甲子、遂遜于琅邪第。劉裕以帝爲零陵王、居于秣陵、行晉正朔、車旗服色一如其舊、有其文而不備其禮。(略)宋永初二年九月丁丑、裕使后兄叔度請后、有間、兵人踰垣而入、弑帝于內房。時年三十六。諡恭皇帝、葬沖平陵」。宋書 卷三 武帝紀「(永初二年)九月己丑、零陵王薨。車駕三朝率百僚舉哀于朝堂、一依魏明帝服山陽公故事。太尉持節監護、葬以晉禮」。

- (24) 朱儼「健康蘭陵六朝陵墓圖考」三六—三七頁。羅宗真「六朝陵墓及其石刻」八六頁。町田章「南齊帝陵考」一〇九七—一〇九八頁。

- (25) 『中國美術全集 雕塑編2』(北京 一九八五)圖版八八、九〇、九二。

- (26) 南齊書 卷一 高帝紀上「太祖高皇帝諱道成、(略)漢相國蕭何二十四世孫也。(略)蕭何居沛、侍中彪免官居東海蘭陵縣中都鄉中都里。晉元康元年、分東海爲蘭陵郡。中朝亂、淮陰令整字公齊、過江居晉陵武進縣之東城里。寓居江左者、皆備置本土、加以南名、於是爲南蘭陵蘭陵人也」。

(27)

- (28) 『江蘇文物綜錄』三八頁。
- (29) 同上、三八頁、齊宣帝蕭承之永安陵條。
- (30) 朱希祖「六朝陵墓調查報告書」二四、二六頁。但し『六朝藝術』は獅子灣の陵を南向きとしている。圖版四一九、解説。
- (31) 朱俔『建康蘭陵六朝陵墓圖考』卷末 丹陽齊梁陵寢圖。
- (32) 李吉甫 元和郡縣圖志 卷二五 江南道潤州「南齊宣帝休安陵、在縣北二十八里。高帝父也、追尊爲宣皇帝。高帝道成泰安陵、在縣三十二里」。但し「南齊宣帝休安陵」とあるのは「永安陵」の明かな誤りである。
- (33) 同上「武帝蹟景安陵、在縣東二十二里。景帝道生永安陵、在縣東北二十六里。明帝父也、追尊爲景皇帝。明帝鸞興安陵、在縣東北二十四里」。
- (34) 丹陽縣志(隆慶三年刊)卷八 陵墓。
- (35) 李蔚然「論南京地區六朝墓的葬地選擇和排葬方法」〔考古〕一九八三年四期。
- (36) 南京市文物保管委員會「南京老虎山晉墓」〔考古〕一九五九年六期。
- (37) 南京博物院、南京市文物保管委員會「南京棲霞山甘家巷六朝墓群」〔考古〕一九七六年五期。
- (38) 晁中辰「尙左、尙右辨」〔中國史研究〕一九八八年二期。張卓秦漢魏晉官制尙左尙右問題」(同上)。晁中辰「秦漢官制尙左尙右考辨」〔中國史研究〕一九九〇年一期。
- (39) 南齊書 卷二〇 武穆裴皇后傳「建元元年、爲皇太子妃。三年、后薨。謚穆妃、葬休安陵。世祖即位、追尊皇后」。
- (40) 南京博物院「江蘇丹陽胡橋南朝大墓及磚刻壁畫」〔文物〕一九七四年二期。
- (41) 南京博物院「江蘇丹陽吳胡橋、建山兩座南朝墓葬」〔文物〕一九八〇年二期。來村多加史「南朝陵墓選地考」一〇二六頁。
- (42) 阮國林「南京梁桂陽王蕭融夫婦合葬墓」〔文物〕一九八一年二期。
- (43) 南京博物院・南京市文物管理委員會「南京棲霞山甘家巷六朝墓群」三一六頁。
- (44) 注(32)(33) 參照。
- (45) 建康實錄 卷一六 蕭道生傳「始安貞王道生、太祖次兄、宋奉朝請。太祖即位、追封爲王。建武元年、追封爲景帝。妃江氏爲景皇后、立寢廟于御道西、陵曰脩安」。南齊書 卷六 明帝紀「永泰元年七月、己酉、帝崩于正福殿、年四十七、(略)葬興安陵」。
- (46) 朱希祖「六朝陵墓調查報告書」二七一、二九頁。朱俔『建康蘭陵六朝陵墓圖考』二〇一二頁。羅宗真「六朝陵墓及其石刻」八六一、八七頁。姚遷・古兵『六朝藝術』圖版一八一三、一解說。
- (47) 南京博物院「江蘇丹陽縣胡橋、建山兩座南朝墓葬」一〇頁。
- (48) 町田章「南齊帝陵考」一〇七七頁。
- (49) 南齊書 卷六 明帝紀「永泰元年四月」丁卯、大司馬會稽太守王敬則舉兵反。(略)(帝)性猜忌多慮、故亟行誅戮。同上 卷二六王敬則傳「(明)帝既多殺害、敬則自以高・武舊臣、心懷憂恐。南齊書 卷七 東昏侯紀「帝在東宮便好弄、不喜書學、高宗亦不以爲非、但勗以家人之行。令太子求一日再入朝、發詔不許、使三日一朝。嘗夜捕風達旦、以爲笑樂。高宗臨崩、屬以後事、以隆昌爲戒、曰、作事不可在人後。故委任羣小、誅諸宰臣、無不如意」。
- (50) 南齊書 卷八 和帝紀「(中興二年)夏四月辛酉、禪詔至、皇太后遜外宮。丁卯、梁王奉帝爲巴陵王、宮于姑熟、行齊正朔、一如故事。戊辰、薨、年十五。追尊爲齊和帝、葬恭安陵」。
- (51) 南京博物院「江蘇丹陽縣胡橋、建山兩座南朝墓葬」一〇頁。
- (52) 注(57) 參照。
- (53) 朱希祖「南朝陵墓調查報告書」六四頁。朱俔『建康蘭陵六朝陵墓圖考』一九一二〇頁。
- (54) 南齊書 卷四 鬱林王紀「(隆昌元年七月)高宗慮變、定謀廢帝」。
- (55)

(略) 出西弄、殺之、時年二十二。輿尸出徐龍駒宅、殯葬以王禮。

(56) 梁書 卷五五 豫章王綜傳「豫章王綜字世謙、高祖第二子也。(略)初、其母吳淑媛自齊東昏宮得幸於高祖、七月而生綜、宮中多疑之者、(略)恆於別室祠齊氏七廟、又微服至曲阿拜齊明帝陵。然猶無以自信、聞俗說以生者血瀝死者骨、滲、即爲父子。綜乃私發齊東昏墓、出骨、瀝臂血試之、并殺一男、取其骨試之、皆有驗、自此常懷異志。

(57) 顧野王 輿地志「漢唐地理書鈔」所收「金牛山、昔吳楚之閒。金牛出自毘陵、奔來此山而沒、因名之。丹陽縣志(乾隆十五年刊)卷二 山川「經山、在縣東北三十五里、昔有異僧講經于此、故名。上有金牛洞、一名金牛山、一名金山」。

(58) 南史 卷六 梁武帝條「皇考外甚清和、而內懷英氣、與齊高少而款狎。嘗共登金牛山、路側有枯骨縱橫、齊高謂皇考曰、周文王以來幾年、當復有掩此枯骨者乎。言之懷然動色。皇考由此知齊高有大志、常相隨逐。齊高每外討、皇考常爲軍副。

(59) 但し朱僕は金牛山を江寧縣の南の銅山とし、羅宗眞氏もこれを受けて金牛山、祖硯山を江寧縣とする。朱僕「六朝陵墓調查報告」(『六朝陵墓調查報告』所收)に「金牛山(江寧東南銅山)」「(九六頁)とあり、朱僕「建康蘭陵六朝陵墓圖考」に「按、齊豫章文獻王蕭疑葬金牛坑(今銅山鄉)、去江寧鎮不遠、或係此墓」(五二頁)とある。また羅宗眞「六朝陵墓及其石刻」に「豫章王蕭疑墓 建元十年卒、葬金牛山(江寧縣)。竟陵王蕭子良墓 隆昌元年卒、葬祖硯山(江寧縣)」「(八三頁)とある。

(60) 『北京圖書館藏 中國歷代石刻拓本匯編 第二冊』一五三頁、「蕭秀東碑額」。

(61) 注(17) 参照。

(62) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖版五三一五七。

(63) 南史 卷六 梁武帝條「(天監元年閏月壬寅)有司奏、追尊皇考爲文皇帝、廟號太祖、皇妣張氏爲獻皇后、陵曰建陵、郗氏爲德皇后、

南朝帝陵の石獸と磚畫

陵曰脩陵。

(64) 梁書 卷七 太祖張皇后傳「宋泰始七年、殯于秣陵縣同夏里舍、葬武進縣東城里山。天監元年五月甲辰、追上尊號爲皇后、諡曰獻。

(65) 梁書 卷七 高祖鄒皇后傳「永元元年八月殯于襄陽官舍、時年二十二。其年歸葬南徐州南東海郡武進縣東城里山。(略)高祖踐阼、追崇爲皇后。(略)陵曰脩陵。

(66) 梁書 卷二 武帝紀中「(天監七年)六月辛酉、復建・修二陵周回五里內居民、改陵監爲令。

(67) 梁書 卷三 武帝紀下「(大同十年三月)壬寅、詔曰、朕自違桑梓、五十餘載、乃眷東顧、靡日不思。今四方款關、海外有截、獄訟稍簡、國務小閑、始獲展敬園陵、但增感動。

(68) 梁書 卷三 武帝紀下「中大同元年春正月丁未、曲阿縣建陵隱口石麒麟動、有大蛇闕隱中、其一被傷奔走」。この事件は「隋書」には次の如く記される。隋書 卷二二 五行志下 木沴金條「梁大同十二年、曲阿建陵隱口石麒麟動。木沴金也。動者、遷移之象。天戒若曰、園陵無主、石麒麟將爲人所徙也。後竟國亡。但し同條の次の記事は上の事件が別の形で誤り傳へられたものであらう。同上「梁大同十二年、送辟邪于建陵。左雙角者至陵所。右獨角者、將引、於車上振躍者三、車兩轅俱折。因換車。未至陵二里、又躍者三、每一振則車側人莫不驚奮、去地三四尺、車輪陷入土三寸。木沴金也。

(69) 乾隆丹陽縣志 卷一一 寺觀「皇業寺、縣東二十五里、蕭塘港北、一名皇基、又名戒珠院」。同上 卷一九 陵墓「脩陵、在縣東二十五里、皇業寺前」。

(70) 朱僕「丹陽六朝陵墓的石刻」(文物參考資料)一九五六年三期)五六頁。

(71) 梁書 卷五六 侯景傳。吉川忠夫「侯景の亂始末期」(東京 一九七四)。

(72) 梁書 卷三 武帝紀「(太清三年)五月丙辰、高祖崩于淨居殿、時年

八十六。辛巳、遷大行皇帝梓宮于太極前殿。冬十一月、追尊爲武皇帝、廟曰高祖。乙卯、葬于脩陵。同上卷五六。侯景傳「高祖雖外跡已屈、而意猶忿憤、時有事奏聞、多所譴却。景深敬憚、亦不敢逼。〔略〕是後、每所徵求、多不稱旨、至於御膳亦被裁抑、遂憂憤感疾而崩」。

(73) 注(68) 參照。

(74) 梁書 卷四 簡文帝紀「太清三年五月丙辰、高祖崩。辛巳、卽皇帝位」。

(75) 南史 卷七 梁武帝條「〔太清元年〕三月庚子、幸同泰寺、設無遮大會。上釋御服、服法衣、行清淨大捨、名曰羯磨。〔略〕乙巳、帝升光嚴殿講堂、坐師子座、講金字三慧經、捨身」。

(76) 南史 卷五〇 劉顯傳「顯博聞強記、過於裴〔子野〕・顧〔協〕。時波斯獻生師子、帝問曰、師子有何色、顯曰、黃師子超不及白師子超」。

(77) 梁書 卷四 簡文帝紀。一六〇頁所引を參照。

(78) 梁書 卷七 太宗王皇后傳「太清三年三月、薨于永福省、時年四十五。其年、太宗卽位、追崇爲皇后、謚曰簡。大寶元年九月、葬莊陵。先是詔曰、〔略〕朕屬值時艱、歲饑民弊、方欲以身率下、永示敦朴。今所營莊陵、務存約儉」。

(79) 注(69) 參照。

(80) 「江蘇文物綜錄」三九頁。

(81) この「乾隆丹陽縣志」がしばしば引用する「輿地志」は、朱偁は梁の顧野王撰とするが、不明である。朱偁「建康蘭陵六朝陵墓圖考」二六頁。

(82) 建康實錄 卷二 吳太祖下「〔赤烏八年〕八月、大赦。使校尉陳勳作屯田、發屯兵三萬鑿句中道、至雲陽西城、以通吳・會船艦、號破崗瀆、上下一十四埭、通會市、作邸閣。仍於方山南截淮立埭、號曰方山埭、今在縣東南七十里」。

(83) 南齊書 卷三一 荀伯玉傳「世祖在東宮、專斷用事、頗不如法。〔略〕

世祖拜陵還、〔張〕景眞白服乘畫舫、坐胡牀、觀者咸疑是太子。內外祇畏、莫敢有言。〔略〕因世祖拜陵後密啓之。上大怒、檢校東宮。世祖還至方山、日暮將泊。

(84) 儀禮 既夕禮「卒哭」。注「卒哭、三虞之後祭名、始朝夕之閒、哀至則哭、至此祭止也、朝夕哭而已」。

(85) 姚遷・古兵編「六朝藝術」も「南朝失名陵石刻」とする。

(86) 南齊書 卷二六 王敬則傳「敬則以舊將舉事、百姓擔簦荷鋤隨逐之、十餘萬衆。至晉陵、南沙人范脩化殺縣令公上延孫以應之。敬則至武進陵口、慟哭乘肩輿而前。遇興盛・山陽二紫、盡力攻之」。注(49) 參照。

(87) 南史 卷八 梁簡文帝條「帝知將見殺、乃盡酣、謂曰、不圖爲樂、一至於斯。既醉而寢。〔王〕偉乃出、〔彭〕儵進土囊、王脩纂坐上、乃崩。竟協於夢。偉撤尸扉爲棺、遷殯于城北酒庫中」。

(88) 梁書 卷五 元帝紀「〔大寶三年〕三月、王僧辯等平侯景、傳其首於江陵。戊子、以賊平告明堂・太社」。

(89) 陳書 卷二 高祖紀下「江陰王勰、詔遣太宰弔祭、司空監護喪事、凶禮所須、隨由備辦」。

(90) 梁書 卷五 元帝紀「承聖元年冬十一月丙子、世祖卽皇帝位於江陵。〔略〕〔承聖二年〕八月戊戌、尉遲迥陷益州。庚子、詔曰、〔略〕今八表义清、四郊無壘、宜從青蓋之典、言歸白水之鄉。江・湘委輸、方船連舳、巴峽舟艦、精甲百萬、先次建鄴、行實京師、然後六軍過征、九旂揚旆、拜謁塗陵、修復宗社。主者詳依舊典、以時宣勸」。

(91) 梁書 卷五 元帝紀「〔承聖三年〕冬十月壬寅、魏軍至于襄陽、蕭督率衆會之。〔略〕〔十二月〕辛未、西魏害世祖、遂崩焉、時年四十七。〔略〕明年四月、追尊爲孝元皇帝、廟曰世祖」。

(92) 乾隆丹陽縣志 卷一 疆域 尚德鄉。

(93) 「六朝陵墓調查報告」圖一七。

(94) 梁書 卷六 敬帝紀「〔太平二年十月〕今使遜位別宮、敬禪于陳、一

依唐虞・宋齊故事。陳王踐阼，奉帝爲江陰王，薨于外邸，時年十六，追諡敬皇帝。

- (95) 陳書 卷三 世祖紀「(大嘉元年六月)壬辰，詔曰：梁孝元遭離多難，靈輅播越，朕昔經北面，有異常倫，遣使迎接，以次近路。江寧既是舊塋，宜即安卜，車旗禮章，悉用梁典，依魏葬漢獻帝故事。(略)是月，葬梁元帝於江寧」。

- (96) 陳書 卷二 高祖紀下「(永定元年十月乙亥)又詔曰：(略)其以江陰郡奉梁主爲江陰王，行梁正朔，車旗服色，一依前準，宮館資待，務盡優隆。(略)(永定二年四月)乙丑，江陰王薨，詔遣太宰弔祭，司空監護喪事，凶禮所須，隨由備辦」。

- (97) 朱俊「建康蘭陵六朝陵墓圖考」四五—四六頁。羅宗真「六朝陵墓及其石刻」八六頁。姚遷・古兵編『六朝藝術』圖版九九—一〇三。

- (98) 梁書 卷六 敬帝紀「(承聖四年)七月辛丑，王僧辯納貞陽侯蕭淵明，自采石濟江。甲辰，入于京師，以帝爲皇太子。九月甲辰，司空陳霸先舉義，襲殺王僧辯，黜蕭淵明。丙午，帝即皇帝位」。

- (99) 陳書 卷二 高祖紀下「(永定三年六月)景午，崩于瑋璣殿，時年五十七。(略)秋八月甲午，羣臣上諡曰武皇帝，廟號高祖。景中，葬萬安陵」。

- (100) 朱希祖「六朝陵墓調查報告書」三九—四二頁。

- (101) 建康實錄 卷一九 高祖武皇帝條「丙申，葬于萬安陵，在今縣東南三十里彭城驛側，周六十步，高二丈」。

- (102) 北史 卷八四 孝行 王頒傳「(王)僧辯平侯景，留頒荊州。遇梁元帝爲周師所陷，頒因入關。聞其父爲陳文帝所殺，號慟而絕，食頃乃蘇，哭不絕聲，毀瘠骨立。(略)及陳滅，頒密召父在時士卒，得千餘人，對之涕泣。(略)答曰：其爲墳塋甚大，恐一宵發掘，不及其屍，更至明朝，事乃彰露。諸人請具鍬鍤。於是夜發其陵，剖棺，見陳武帝遺骸皆不落，其本皆出自骨中。頒遂焚骨取灰，投水飲之。既而自縛歸罪」。

- (103) 注(14) 參照。

- (104) 注(25) 參照。

- (105) 朱希祖「六朝陵墓調查報告書」四二頁。

- (106) 朱俊「修復南京六朝陵墓古蹟中重要的發現」(「文物參考資料」一九五七年三期)四四頁。羅宗真「六朝陵墓及其石刻」八六頁。

- (107) 朱俊「修復南京六朝陵墓古蹟中重要的發現」四四頁。

- (108) 南京博物院「江蘇六朝青瓷」(南京 一九八〇)圖一〇五。

- (109) 南京市文物保管委員會「南京郊區兩座南朝墓清理簡報」(「文物」一九八〇年二期)二八頁，注3。

- (110) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖五〇—五七。

- (111) 羅宗真「南京西善橋油坊村南朝大墓的發掘」(「考古」一九六三年六期)。

- (112) 同上，圖一六。

- (113) 常州市博物館「常州南郊戚家村畫像磚墓」(「文物」一九七九年三期)三二—三三頁。

- (114) 同上，三七—三八頁。林樹中「常州畫像磚墓的年代與畫像磚的藝術」(「文物」一九七九年三期)四二—四三頁。

- (115) 注(101) 參照。

- (116) 建康實錄 卷七 顯宗成皇帝條「欲立石闕于宮門，未定，後(王)導隨駕出宣陽門，乃遙指牛頭峰爲天闕，中宗從之」。

- (117) 陳書 卷五 宣帝紀「(太建)十四年春正月己酉，高宗弗豫。甲寅，崩于宣福殿，時年五十三。(略)二月辛卯，上諡孝宣皇帝，廟號高宗，癸巳，葬顯寧陵」。

- (118) 陳書 卷六 後主紀「(禎明三年正月)及夜，爲隋軍所執。景戌，晉王廣入據京城。三月己巳，後主與王公百司發自建鄴，入于長安。隋仁壽四年十一月壬子，薨於洛陽，時年五十二。追贈大將軍，封長城縣公，諡曰煬，葬河南洛陽之芒山」。

- (119) 注(68) 參照。

- (120) 梁書 卷三五 蕭子恪傳「子顯字景陽、子恪第八弟也、幼聰慧、文獻王異之、愛過諸子」。
- (121) 『六朝陵墓調查報告』所收、一九八頁。
- (122) 朱僕「修復南京六朝陵墓古蹟中重要的發現」四五頁。
- (123) 孫機「鎮江文物精華筆談 石獸」〔中國歷史博物館館刊〕九期 一九八六 二七頁。
- (124) 後漢書 靈帝紀「復修玉堂殿、鑄銅人四、黃鍾四、及天祿、蝦蟆、又鑄四出文錢」。李賢注「案、今鄧州南陽縣北有宗資碑、旁有兩石獸、鑄其膊一曰天祿、一曰辟邪。據此、即天祿、辟邪並獸名也」。
- (125) 歐陽修 集古錄跋尾 卷三「尙書職方員外郎謝景初家於鄧、爲余摹得之、然字畫訛缺、不若余見時完也」。
- (126) 楊應奎 重鐫漢汝南太守宗資墓記（康熙南陽縣志 卷六 藝文上所收）。
- (127) 同上所引。
- (128) 周到・呂品「略談河南發現的漢代石雕」〔中原文物〕一九八一年二期 三四—三五頁。
- (129) 南陽畫像石上の鹿に似た獨角の動物を桃拔とする見解がある。閃修山等編『南陽漢代畫像石刻』（上海 一九八一）圖五八。
- (130) 王子倫編『浙江出土銅鏡選集』（北京 一九五八）圖二七。
- (131) 注（123）參照。
- (132) 春秋經 哀公十四年「十有四年春、西狩獲麟」。左氏傳「西狩於大野、叔孫氏之車之鉏商獲麟」。
- (133) 詩經 周南 麟之趾「麟之趾、振振公子、于嗟麟兮。麟之定、振振公姓、于嗟麟兮。麟之角、振振公族、于嗟麟兮」。
- (134) 孟子 公孫丑「有若曰、豈惟民哉、麒麟於走獸、鳳凰於飛鳥、大山於丘壑、河海於行潦、類也」。
- (135) 拙稿「崑崙山と昇仙圖」一六四—一六七頁。
- (136) 漢書 卷六 武帝紀「元狩元年冬十月、行幸雍、祠五畤。獲白麟、作白麟之歌。應劭注「獲白麟、因改元曰元狩也」。
- (137) 石索 卷四 漢武氏石室祥瑞圖一「麟不刳胎殘少則至」。
- (138) 南京博物院・邳縣文化館「東漢彭城相繆宇墓」〔文物〕一九八四年八期 二六—二七頁。
- (139) 李鑑昭「江蘇睢寧九女墩漢墓清理簡報」〔考古通訊〕一九五五年二期 圖版九 3。
- (140) 河南省文化局文物工作隊『鄧縣彩色畫象磚墓』。柳涵氏と林樹中氏はともに南朝系統の墓葬に屬するとし、その時代については、前者は東晉から梁代とし、後者は宋・齊時代として南齊の可能性が高いとする。柳涵「鄧縣畫象磚墓的時代和研究」〔考古〕一九五五年五期 二六一頁。林樹中「江蘇丹陽南齊陵墓磚印壁畫探討」〔文物〕一九七七年一期 六八頁。
- (141) 『西安碑林』（東京 一九六六）圖一二〇—一二五。
- (142) 河南省文化局文物工作隊『鄧縣彩色畫象磚墓』圖三六。
- (143) 同上、二頁、圖五解說。
- (144) 禮記 禮運「何謂四靈、麟鳳龜龍謂之四靈」。
- (145) 禮緯稽命徵（古微書）卷一八所收「古者以五靈配五方、龍木也、鳳火也、麟土也、白虎金也、神龜水也。其五行之序、則木爇生火、火地生土、土卯生金、金溲生水、水液生木。五者修其母、則致其子、水官修、龍至、木官修、鳳至、火官修、麟至、土官修、白虎至、金官修、神龜至。故曰、視明禮修、麒麟來游、思睿信立、白虎馴擾、言從文成、而神龜在沼、聽聰正知、而名川出龍、貌恭體仁、鳳凰鳴桐」。
- (146) 孫機「幾種漢代的圖案紋飾」〔文物〕一九八二年三期 六五—六八頁。
- (147) 宋書 卷二八 符瑞志中「麒麟者、仁獸也。牡曰麒、牝曰麟。不刳胎剖卵則至。（略）漢武帝元狩元年十月、行幸雍、祠五畤、獲白麟。（略）晉元帝太興元年正月戊子、麒麟見豫章。晉成帝咸和八年五月

己巳、麒麟見遼東」。

(148) 朱銘盤『南朝宋會要』『南朝齊會要』『南朝梁會要』各符瑞項、『南朝陳會要』曆數項。強いて搜せば『建康實錄』に次の記事がある。

建康實錄 卷一七 梁高祖武皇帝條「(中興二年二月)乙丑、南兗郡主陳文興於城内鑿井、得玉鏤麒麟・玉璧・水精環各二枚。(略)(三月)壽張縣見麒麟一物」。

(149) 舊唐書 卷四 高宗紀上「(龍朔三年)冬十月丙申、絳州麟見于介山。丙午、含元殿前麟趾見。(略)十二月庚子、詔改來年正月一日爲麟德元年」。

(150) 一二三頁所引參照。

(151) 陳書 卷二六 徐陵傳「徐陵字孝穆、東海郟人也。(略)母臧氏、嘗夢五色雲化而爲鳳、集左肩上、已而誕陵焉。時寶誌上人者、世稱其有道、陵年數歲、家人携以候之、寶誌手摩其頂、曰天上石麒麟也。光宅惠運法師每嗟陵其早成就、謂之顏回」。

(152) 似た話に次のようなものがある。晉書 卷八三 顧和傳「和二歲喪父、總角便有清操、族叔榮雅重之、曰、此吾家麒麟、與吾宗者、必此子也」。

(153) 常州市博物館「常州南郊戚家村畫像磚墓」三三—三六頁。

(154) 同上、三五頁。

(155) これと関連して正倉院に所蔵される「鳥獸花背八角鏡」(第一號)の有翼鹿型の一角獸と二角獸も一對の麒麟とみなされよう。この鏡は同じく正倉院の「鳥獸背八角鏡」(第三號)と一部文様が共通し、後者が鳳凰二羽、有翼鹿型一角獸、有翼獅子型三指二角獸を表したのを受けて、更に詳しく鹿型は一角と二角に、獅子型は三指と偶蹄に分けて表したものである。これによつて一角獸麒麟が分化して二角獸麒麟が生まれたのがわかれるとともに、唐代にも二角獸麒麟のあったことが知れる。正倉院事務所編『正倉院の金工』(東京 一九七六)圖版一、三。

南朝帝陵の石獸と磚畫

(156) 河南省文物研究所『信陽楚墓』(北京 一九八六)六〇—六一頁、圖版一〇九。

(157) 鎮江市博物館「鎮江東晉畫像磚墓」(『文物』一九七三年四期)。

(158) 漢書 卷九六上 西域傳 烏弋山離國「而有桃拔・師子・犀牛」。孟康注「師子似虎、正黃有頰形、尾端茸毛大如斗」。後漢書 順帝紀「(陽嘉二年 一三三)疏勒國獻師子・封牛」。

(159) 中國社會科學院考古研究所・河北省文物管理處滿城漢墓發掘報告「(北京 一九八〇)上冊、一四五頁、下冊、圖版一〇七 1。この後脚で立った獅子と似た文様は、タジク共和國のタフト・イ・サンギーン出土の象牙製の劍の鞘(前五世紀頃)にもみられる。『シルクロードの遺寶展』(東京 一九八五)圖四七。

(160) 水野清一編『世界美術全集 第十三卷』(東京 一九六二)圖版二二。『和泉市久保惣記念美術館藏鏡圖録』(大阪 一九八五)圖版一三。

(161) 『同上 藏鏡拓影』(大阪 一九八四)圖版一三。銅鏡の獅子文様は他にも長沙出土の方格規矩四神鏡(王莽期)にもみられる。周世榮「湖南出土漢代銅鏡文字研究」(『古文字研究』第一四輯 一九八六)圖五一。

(162) 米内山庸夫「漢の獅子石像に就て」(『支那』一九卷九號 一九二八)。掲載挿圖以外の一體は、残っていたのは頭部だけであった。

(163) 爾雅 釋獸「狻猊似虬、食虎豹」。郭璞注「即師子也、出西域」。陝西省考古研究所「唐順陵勘査記」(『文物』一九六四年一期)三六頁。王世和・樓宇棟「唐橋陵勘査記」(『考古與文物』一九八〇年四期)五九頁。劉慶柱・李毓芳「陝西唐陵調查報告」(『考古學集刊』五期)二二六頁。

(165) 李誠 營造法式 卷一四「走獸之類有四品、一曰師子、麒麟・狻猊・獬豸之類同」。

(166) 博古圖 卷一二 漢麟瓶「周身甲錯、若麒麟然」。

(167) 『中國美術 第五卷 陶磁』(東京 一九七三)圖版五三、青花麒麟

- 文大盤（イスタンブール トプカピ美術館藏）。
- (168) 南京博物院編『明孝陵』（北京 一九八二）圖五三—五七、蹲坐麒麟・佇立麒麟各二體。
- (169) 三才圖繪 鳥獸卷三 麒麟。
- (170) 毛詩名物圖說 卷二 麒麟。
- (171) 南京博物院「江蘇丹陽胡橋南朝大墓及磚刻壁畫」。
- (172) 南京博物院「江蘇丹陽縣胡橋、建山兩座南朝墓葬」。
- (173) 羅宗真「南京西善橋油坊村南朝大墓的發掘」二九七頁。
- (174) 南京博物院・南京市文物保管委員會「南京西善橋南朝墓及其磚刻壁畫」（『文物』一九六〇年八・九期）四一—四二頁。
- (175) 南京博物院「江蘇丹陽縣胡橋、建山兩座南朝墓葬」六頁。
- (176) 壁畫（一）河北省安平縣遼家莊後漢墓中室壁畫。熹平六年（一七七）。
- 『中國美術全集 繪畫編二』圖一八一—二〇。（二）河南省偃師縣杏園村二九一七號後漢墓。同上 圖二—二四。
- (177) 宋書 卷五一 劉韞傳「在湘州及雍州、使善畫者圖其出行鹵簿羽儀、常自披玩。嘗以此圖示征西將軍蔡興宗、興宗戲之、陽若不解畫者、指輻形像問曰、此何人而在輦上、韞曰、此正是我」。
- (178) 南齊書 卷七 東昏侯紀「帝於殿內騎馬從鳳莊門入微明門、馬被銀蓮葉具裝鑲、雜羽孔雀寄生、逐馬左右衛從、晝眠夜起如平常」。
- (179) 南齊書 卷一 高帝紀上「時朝廷器甲皆充南討、太祖軍容寡闕、乃編椶皮爲馬具裝、析竹爲寄生、夜舉火進軍、賊望見恐懼、未戰而走」。
- (180) 楊泓『中國古兵器論叢（增訂本）』（北京 一九八五）四二頁。圖三四。
- (181) 釋名 釋衣服「褙襦、其一當胸、其一當背也」。
- (182) 拙稿「秦始皇陵と兵馬俑に關する試論」三九二—三九三頁。
- (183) 晉書 卷二五 輿服志「中朝大駕鹵簿 先象車、鼓吹一部、十三人、中道。（略）次河南尹、駕駟、戟吏六人。（略）鹵簿左右各三行、戟楯在外、弓矢在內、鼓吹一部、七人。（略）次華蓋、中道。（略）次曲華蓋、中道。（略）轍扇幢麾各一騎、鼓吹一部、七騎。（略）。磁縣文化館「河北磁縣東魏茹茹公主墓發掘簡報」（『文物』一九八四年四期）。湯池「東魏茹茹公主墓壁畫試探」（同上）圖二、三。
- (184) 古今注「障扇、長柄也、漢世多豪俠象雉尾而製長扇也」。
- (185) 南史 卷四七 荀伯玉傳「（王）敬則素衣以衣高帝、仍牽上輿。遂幸東宮、召諸王宴飲、因游玄圃園。長沙王晃捉華蓋、臨川王映執雉尾扇、聞喜公子良持酒鎗、南郡王行酒、武帝與豫章王嶷及敬則自捧肴饌。高帝大飲、賜武帝以下酒、並大醉盡歡、日暮乃去。注（83）參照。
- (186) 參照。
- (187) 『中國美術 第三卷 雕塑』（東京 一九七二）圖版一五、一六。
- (188) 宋書 卷六一 江夏文獻王義恭傳「有司奏曰、（略）義恭所陳、實允禮度。九條之格、猶有未盡、謹共附益、凡二十四條。（略）公主王妃傳令、不服朱服。輦不得重綱。郭扇不得雉尾。劍不得鹿盧形。輿不得孔雀白髦。（略）」。
- (189) 隋書 卷一三 音樂志上「（陳宣帝太建六年）至是蔡景歷奏、悉復設焉。其制、鼓吹一部十六人、則簫十三人、笳二人、鼓一人。東宮一部、降三人、蕭減二人、笳減一人。諸王一部、又降一人、減簫一。庶姓一部、又降一人、復減簫一」。
- (190) 集韻「笳、胡人卷蘆葉吹之也」。
- (191) 南京博物院「江蘇丹陽胡橋南朝大墓及磚刻壁畫」五一頁、圖一七。
- (192) 河南省文化局文物工作隊「鄧縣彩色畫象磚墓」。
- (193) 考古研究所安陽發掘隊「安陽隋唐盛墓發掘記」（『考古』一九五九年一〇期）圖版九—1、2。『中國陶俑之美』（東京 一九八四）圖五九。
- (194) 嘉祥縣文物管理所「山東嘉祥英山二號隋墓清理簡報」（『文物』一九八七年二期）圖八、九。『大黃河文明的流れ 山東省文物展』（東京 一九八六）圖九〇。
- (195) 町田章「南齊帝陵考」一〇八〇頁。

- (196) 南京博物院「江蘇丹陽縣胡橋、建山兩座南朝墓葬」四頁。
- (197) 南京博物院「江蘇丹陽胡橋南朝大墓及磚刻壁畫」五〇頁、圖九。
- (198) 同上 四九頁。
- (199) 林樹中「江蘇丹陽南齊陵墓磚印壁畫探討」(「文物」一九七七年一期) 六五頁、圖一。六六頁。
- (200) 楚辭 遠遊「仍羽人於丹丘兮、王逸注「或曰、人得道身生毛羽也」。
- (201) 湖南省博物館・中國科學院考古研究所「長沙馬王堆一號漢墓」(北京一九七三) 上集、圖二五。拙稿「崑崙山と昇仙圖」(「東方學報」京都五一冊 一九七九) 一〇〇—一〇一頁、圖三。
- (202) 西安市文物管理委員會「西安市發現一批漢代銅器和銅羽人」(「文物」一九六六年四期) 八—九頁、圖版二—3、4。また一九八七年、同様の羽人像が洛陽東郊の後漢墓から出土した。洛陽文物工作隊編『洛陽出土文物集粹』(北京 一九九〇) 圖四九。
- (203) 洛陽博物館「洛陽西漢卜千秋壁畫墓發掘簡報」(「文物」一九七七年六期) 八—九頁、圖三三、三四。拙稿「崑崙山と昇仙圖」一五五—一七一頁、圖三八。
- (204) 仙人についての近年の論考に次の如きものがある。小杉一雄「神仙の羽衣を論じて鳥毛立女屏風に及ぶ」(「美術史研究」二六冊 一九八八)。吉村伶「仙人の圖形を論ず—法隆寺金堂藥師如來臺座の墨畫飛仙圖に關する疑問—」(「佛教藝術」一八四號 一九九〇年)。
- (205) 東亞考古學會「營城子」(東京 一九三四) 三二—三三頁、圖版三六。
- (206) 雲南省文物工作隊「雲南省昭通後海子東晉壁畫墓清理簡報」(「文物」一九六三年一二期) 一—四頁、表紙裏圖版 2。
- (207) 南京博物院「江蘇丹陽胡橋南朝大墓及磚刻壁畫」四九頁、圖一四。
- (208) 洛陽博物館「洛陽北魏畫象石棺」(「考古」一九八〇年三期)。黃明蘭「洛陽北魏世俗石刻線畫集」(北京 一九八七年) 圖一三—二六、八五。
- (209) 黃明蘭「洛陽北魏世俗石刻線畫集」一一七—一一八頁。宮大中「試

南朝帝陵の石獸と磚畫

- 論洛陽關林陳列的幾件北魏陵墓石刻藝術」(「文物」一九八二年三期) 八二—八三頁。湯池「東魏茹茹公主墓壁畫試探」(「文物」一九八四年四期) 一〇頁。
- (210) 麀尾扇が道士の持物でもあったことは次の記事により知れる。南齊書 卷四一 張融傳「融年弱冠、道士同郡陵脩靜以白鸞羽麀尾扇遺融、曰、此既異物、以奉異人」。
- (211) 黃明蘭「洛陽北魏世俗石刻線畫集」圖二七—三四。『中國美術全集 繪畫編一九』(北京 一九八八) 圖一七、二〇。
- (212) 同上 圖二〇—二二五。
- (213) 『中國美術全集 繪畫編一二』(北京 一九八九) 圖五七。湯池「漢魏南北朝的墓室壁畫」(同上所收) 一四頁。
- (214) 陝西省文物管理委員會、陝西省三原縣雙盛村隋李和墓清理簡報(「文物」一九六六年一期) 圖四〇、四一。
- (215) 河南省文化局文物工作隊「鄧縣彩色畫象磚墓」圖三、三六、三七、三九。
- (216) 同右 圖三九。
- (217) 常州市博物館「常州南郊戚家村畫像磚墓」。
- (218) 山西省大同市博物館・山西省文物工作委員會「山西大同石家寨北魏司馬金龍墓」(「文物」一九七二年三期) 二二頁。
- (219) 石刻藝術館藏石棺。宮大中「試論洛陽關林陳列的幾件北魏陵墓石刻藝術」八〇頁。黃明蘭「洛陽北魏世俗石刻線畫集」圖四五、四六。ミネアポリス美術館藏石棺。奧村伊九良「鍍金孝子傳石棺の刻畫に就て」(「瓜茄」鷲字第一 一九三九) 三五九頁、圖一、二。長廣敏雄「六朝時代美術の研究」圖版三五、三六。
- (220) 吉村伶「龍門石窟における天人誕生の表現」(「美術史」六九號 一九八八)。
- (221) 湯池「東魏茹茹公主墓壁畫試探」一〇—一一頁。
- (222) 惜誓「楚辭章句」所收「惜余年老而日衰兮、歲忽忽而不反」。

- (223) 淮南子 兵略訓 高誘注「角亢爲青龍、參井爲白虎、星張爲朱雀、斗牛爲玄武。用兵軍者、右參井、左角亢、背斗牛、向星張、此順北斗之銓衡也」。
- (224) 湖南省博物館「新發現的長沙戰國楚墓帛畫」(「文物」一九七三年七期) 圖版一。湖南省博物館等「長沙馬王堆一號漢墓 上集」圖三八。湖南省博物館・中國科學院考古研究所「長沙馬王堆二、三號漢墓發掘簡報」(「文物」一九七四年七期) 圖版五。拙稿「崑崙山と昇仙圖」一一四—一五〇頁。
- (225) 林巳奈夫「漢鏡の圖柄二、三について」(「東方學報」京都四四冊一九七三) 一四—二三頁。
- (226) 隨縣擂鼓墩一號墓考古發掘隊「湖北隨縣曾侯乙墓發掘簡報」(「文物」一九七九年七期) 一〇頁、圖版五—二。拙稿「六博の人物坐像銅鎮と博局紋について」(「古史春秋」第五號 一九八八) 四五—四六頁。
- (227) 晉書 卷一一 天文志上 二十八舍。
- (228) 拙稿「六博の人物坐像銅鎮と博局紋について」三九頁、圖一八。
- (229) 『和泉市久保惣記念美術館藏鏡圖錄』圖二四、方格規矩四神鏡銘「左龍右虎辟非羊(祥)、朱雀玄武主四彭(方)」。同上、圖二五、方格規矩四神鏡銘「左龍右虎主四彭、朱爵(雀) 玄武順陰陽」。
- (230) 南京博物院等「南京西善橋南朝墓及其磚刻壁畫」四一頁。
- (231) 南京博物院「江蘇丹陽胡橋南朝大墓及磚刻壁畫」四九頁。
- (232) 南京博物院等「南京西善橋南朝墓及其磚刻壁畫」。
- (233) 西善橋墓の磚畫榜題は「劉靈」に作るが、『世說新語』任誕篇、『晉書』卷四九の傳などは「劉伶」に作る。
- (234) 列子 天瑞篇「孔子遊於太山、見榮啓期行乎郕之野、鹿裘帶索、鼓琴而歌。孔子問曰、先生所以樂、何也。對曰、吾樂甚多、天生萬物、唯人爲貴。而吾得爲人、是一樂也。男女之別、男尊女卑、故以男爲貴。吾既得爲男矣、是二樂也。人生有不見日月不免襁褓者、吾既已行年九十矣、是三樂也」。
- (235) 陶淵明 飲酒二十首并序 其二「九十行帶索、飢寒況當年」。同詠貧士七首 其二「榮叟老帶索、欣然方彈琴」。
- (236) 歷代名畫記 卷五 顧愷之條「榮啓期」。同上 卷六 陸探微條「榮啓期」。
- (237) 晉書 卷四九 嵇康傳「康將刑東市、太學生三千人請以爲師、弗許。康顧視日影、索琴彈之、曰、昔袁孝尼嘗從吾學廣陵散、吾每靳固之、廣陵散於今絕矣。時年四十」。
- (238) 晉書 卷四九 阮籍傳「博覽羣籍、尤好莊老。嗜酒能嘯、善彈琴。當其得意、忽忘形骸」。
- (239) 晉書 卷四三 山濤傳「濤飲酒至八斗方醉、帝欲試之、乃以酒八斗飲濤、而密益其酒、濤極量而止」。
- (240) 瘦子山集 卷五 樂府 對酒歌「山簡接離倒、王戎如意舞」。
- (241) 晉書 卷五十 郭象傳「先是注莊子者數十家、莫能究其旨統。向秀於舊注外而爲解義、妙演奇致、尤暢玄風。惟秀水、至樂二篇未竟而秀卒」。
- (242) 劉伶 酒德頌(「文選」卷四七所收)「有大人先生、以天地爲一朝、萬期爲須臾、(略)先生於是方捧罌承槽、銜杯漱醪、奮髯踞蹠、枕麴糲糟、無思慮、其樂陶陶、兀然而醉、豁爾而醒」。
- (243) 通典 卷一四四 樂四「阮咸亦秦琵琶也。而頂長過於今制、列十有三柱。武太后時、蜀人蒯朗於古墓中得之、晉竹林七賢圖、阮咸所彈與此類同、因謂之阮咸。咸世實以善琵琶知音律稱」。
- (244) 高士傳 卷上「榮啓期者、不知何許人也。鹿裘帶索、鼓琴而歌」。
- (245) 晉書 卷四九 阮籍傳「籍又能爲青白眼、見禮俗之士、以白眼對之」。
- (246) 福井文雅「竹林七賢についての一試論」(「PHILOSOPHIA」三七號 一九五九)。
- (247) 福永光司「嵇康における自我の問題」(「東方學報」京都三三冊 一九二二頁。注(246) 參照)。
- (248) 世說新語 德行篇「王平子、胡毋彥國諸人、皆以任放爲達、或有裸

體者、樂廣笑曰、名教中自有樂地、何爲乃爾也」。劉孝標注「王隱晉書曰、魏末阮籍、嗜酒荒放、露頭散髮、裸袒箕踞。其後貴游子弟阮瞻、王澄、謝鯉、胡毋輔之之徒、皆祖述於籍、謂得大道之本。故去巾幘、脫衣服、露醜惡、同禽獸。甚者名之爲通、次者名之爲達也」。

(249) 拙稿「竹林七賢圖」——特に南朝陵墓出土の磚畫について（「國際交流美術史研究會第八回シンポジウム 說話美術」所收 一九八九）。

(250) 歷代名畫記 卷五 顧愷之條「阮咸像、（略）榮啓期、（略）七賢、陳思王詩、並傳於後代」。同上「顧愷之論畫曰、（略）七賢、唯嵇生一像欲佳、其餘雖不妙合、以比前諸竹林之畫、莫能及者。嵇輕車詩、作嘯人似人嘯、然容悴不似中散、處置意事既佳、又林木雍容調暢、亦有天趣。（略）自七賢以來、並戴手也」。同上 史道碩條「七賢圖、（略）酒德頌圖、琴賦圖、嵇中散詩圖、（略）並傳於代」。同上 卷六

陸探微條「有宋孝武像、宋明帝像、孝武功臣、竹林像、豫章王像、（略）並傳於代者也」。同上 卷七 毛惠遠條「七賢藤紙圖、（略）並傳於代」。

(251) 南史 卷五 齊廢帝東昏侯條「又別爲潘妃起神仙・永壽・玉壽三殿、皆市飾以金壁。其玉壽中作飛仙帳、四面繡綺、窗間盡畫神仙。又作七賢、皆以美女侍側」。

(252) 山東省文物考古研究所「濟南市東八里洼北朝壁畫墓」（「文物」一九八九年四期）。

(253) 嵇中散集 卷一 兄秀才公穆入軍贈詩十九首 第十五首「息徒蘭園、秣馬華山、流磻平阜、垂綸長川、目送歸鴻、手揮五絃、俯仰自得、遊心太玄、嘉彼釣叟、得魚忘筌、郢人逝矣、誰可盡言」。

(254) 世說新語 巧藝篇「顧長康道畫、手揮五絃易、目送歸鴻難」。歷代名畫記 卷五 顧愷之條「重嵇康四言詩、畫爲圖、常云、手揮五絃易、目送歸鴻難」。

(255) 世說新語 簡傲篇「晉文王功德盛大、坐席嚴敬、擬於王者。唯阮籍在坐、箕踞嘯歌、酣放自若」。

南朝帝陵の石獸と磚畫

(256) 莊子 至樂篇「莊子妻死、惠子弔之、莊子則方箕踞鼓盆而歌」。

(257) 成玄英 南華真經注疏「箕踞者垂兩脚、如簸箕形也」。

(258) 世說新語 棲逸篇「阮步兵嘯、聞數百步。蘇門山中、忽有真人、樵伐者咸共傳說。阮籍往觀、見其人擁膝巖側。籍登嶺就之、箕踞相對。籍商略終古、上陳黃・農玄寂之道、（略）籍因對之長嘯。良久、乃笑曰、可更作。籍復嘯。意盡、退、還半嶺許、聞上嶺然有聲、如數部鼓吹、林谷傳響。顧看、迺向人嘯也」。

(259) これとよく似た、承盤付きの把手のある陶製の器（口径二四cm）が南京大學北園東晉墓より出土し、報告書は東晉賀循の記した明器の名「瓦罇」に従い瓢尊と名附けている。南京大學歴史系考古組「南京大學北園東晉墓」（「文物」一九七三年四期）四〇頁、圖一三。通典 卷八六 喪制四。

(260) 南京博物院等「南京西善橋南朝墓及其磚刻壁畫」四二頁。

(261) 南京博物院「試談「竹林七賢及榮啓期」磚印壁畫問題」（「文物」一九八〇年二期）一九二〇頁。

(262) このような一種の仙草が生えているところから、この阮籍像を蘇門山で真人に會った時の姿を表したものと解することも出来る。注

(258) 參照。

(263) 南京博物院「試談「竹林七賢及榮啓期」磚印壁畫問題」一九二〇頁。

注(49)(50) 參照。

(264) 1、東晉說 中國科學院考古研究所「新中國的考古收穫」（北京一九六一）九四頁、圖版九九。

2、晉一宋開說 南京博物院等「南京西善橋南朝墓及其磚刻壁畫」四二頁。林樹中「江蘇丹陽南齊陵墓磚印壁畫探討」七一頁。

3、劉宋末期說 鄭偉建「南京六朝墓葬壁飾及其內涵述略」（「江蘇省考古學會第四、五次年會論文選」所收 一九八六）九七頁。

4、梁以後說 宋伯胤「竹林七賢磚畫散考」（「新亞學術集刊」一九

八三年四期) 二一八頁。氏は、梁の昭明太子蕭統が顏延之の「五君詠」を補い山濤と王戎の詩を作った後とする。

(266) 馮普仁「南朝墓群類型與分期」(「考古」一九八五年三期)。

(267) 南京大學歷史系考古組「南京大學北園東晉墓」。

(268) 華東文物工作隊「南京幕府山六朝墓清理簡報」(「文物參考資料」一九五六年六期)。

(269) 南京博物院「南京中山門外苜蓿園東晉墓清理簡報」(「考古通訊」一九五八年四期) 四四—四八頁、圖三。

(270) 南京博物院「南京富貴山東晉墓發掘報告」。

(271) 南京市文物管理委員會「南京太平門外劉宋明臺墓」(「考古」一九七六年一期) 四九頁、圖一。

(272) 湖北省博物館「武漢地區四座南朝紀年墓」(「考古」一九六五年四期) 一八二—一八四頁、圖七。

(273) 羅宗真「南京西善橋油坊村南朝大墓的發掘」二九三—二九五、圖七。

(274) 南京博物院等「南京棲霞山甘家巷六朝墓群」三一六—三一九頁。

(275) 南京市文物保管委員會「南京郊區兩座南朝墓清理簡報」(「文物」一九八〇年二期) 二四—二五頁。

(276) 南京博物院「南京堯化門南朝梁墓發掘簡報」(「文物」一九八一年二期) 一五一—一八頁、圖三。

(277) 南京市博物館「南京郊區兩座南朝墓」(「考古」一九八三年四期) 三三〇—三三三頁、圖三。

(278) 魏正瑾・易家勝「南京出土六朝青瓷分期探討」(「考古」一九八三年四期)。

(279) 南京市博物館考古組「南京郊區三座東晉墓」(「考古」一九八三年四期) 三二五頁。

(280) 南京市文物保管委員會「南京老虎山晉墓」二九二頁、圖二。

(281) 南京市博物館「南京郊區兩座南朝墓」三二八—三三〇頁、圖二。

(282) 羅宗真「南京西善橋油坊村南朝大墓的發掘」三〇〇頁、圖二。

(283) 全晉文 卷一三七 戴逵 竹林七賢論。

(284) 世說新語 文學篇「袁彥伯作名士傳成、見謝公」。劉孝標注「宏以夏侯太初、何平叔、王輔嗣爲正始名士。阮嗣宗、嵇叔夜、山巨源、向子期、劉伯倫、阮仲容、王濬仲爲竹林名士」。

(285) 陶淵明 集聖賢羣輔錄下「魏步兵校尉陳留阮籍字嗣宗、中散大夫諡嵇康字叔夜、晉司徒河內山濤字巨源、建威參軍沛劉伶字伯倫、始平太守陳留阮咸字仲容、散騎常侍河內向秀字子期、司徒琅邪王戎字濬仲、右魏嘉平中並在河內山陽、共爲竹林之游、世號竹林七賢、見晉書・魏書、袁宏・戴逵爲傳、孫統又爲讚」。

(286) 顏延之 五君詠(「文選」卷二一所收) 阮步兵、嵇中散、劉參軍、阮始平、向常侍。

(287) 沈約 七賢論(「藝文類聚」卷三七所收)「嵇生是上智之人、值無妄之日、神才高傑、故爲世道所莫容、風逸挺特、蔭映於天下、言理吐論、一時所莫能參、屬馬氏執國、欲以智計傾皇祚、誅鉅勝已、靡或有遺、玄伯太初之徒、並出嵇生之流、咸已就戮、(略)阮公才器宏廣、亦非衰世所容、但容貌風神、不及叔夜、求免世難、如爲有塗、若率其恆儀、同物俯仰、邁羣獨秀、亦不爲二馬所安、故毀行廢禮、以穢其德、崎嶇人世、僅然後全、仲容年齒、不齒不懸、(略)劉伶酒性既深、子期又是飲客、山王三公、悅風而至、(略)自嵇阮之外、山向五人、止是風流器度、不爲世匠所駭、且人本含情、情性宜有所託慰、悅當年隱、蕭散懷抱、非五人之與、其誰與哉」。

(288) 宋書 卷七三 顏延之傳「乃作五君詠以述竹林七賢、山濤・王戎以貴顯被黜、詠嵇康曰、鸞翮有時鑠、龍性誰能馴。詠阮籍曰、物故可不論、塗窮能無慟。詠阮咸曰、(略)詠劉伶曰、(略)此四句、蓋自序也」。

(289) 注(286) 參照。

(290) 梁書 卷一三、沈約傳。吉川忠夫「沈約の傳記と生活」(「六朝精神史研究」所收 京都 一九八四)。

(291) 沈約 宋書 卷一〇〇 自序「(永明)五年春、又被勅撰宋書。六年

二月畢功、表上之、曰、(略)本記列傳、繕寫已畢、合七帙七十卷、臣今謹奏呈。所撰諸志、須成績上」。

(292) 注(251) 參照。

(293) 南齊書 卷三二 何戢傳「上頗好畫扇、宋孝武賜戢蟬雀扇、善畫者顧景秀所畫。時陸探微、顧彥先皆能畫、嘆其巧絕。戢因王晏獻之、上令晏厚酬其意」。

(294) 歷代名畫記 卷七 毛惠秀條「惠遠弟惠秀、下品上、永明中待詔秘閣。世祖將北伐、命惠秀畫漢武北伐圖、中書郎王融監掌其事、融好功名、秀又善圖、畫成帝極珍貴、置瑯琊臺上、每披玩焉」。南齊書

卷四七 王融傳「永明末、世祖欲北伐、使毛惠秀畫漢武北伐圖、使融掌其事」。

(295) 注(251) 參照。

(296) 南齊書 卷七 東昏侯紀「(永元)三年夏、於開武堂起芳樂園、山石皆塗以五采、跨池水立紫閣諸樓觀、壁上畫男女私褻之像」。

(297) 南齊書 卷五三 李珪之傳「先是、(永明)四年、榮陽毛惠素爲少府卿、吏才強而治事清刻。勅市銅官碧青一千二百斤供御畫、用錢六十萬。有讒惠素納利者、世祖怒、勅尚書評買、貴二十八萬餘、有司奏之、伏誅。死後家徒四壁、上甚悔恨」。この話は『歷代名畫記』卷六、毛惠遠條に毛惠遠のこととして記載されているが、少府卿という高い官職からして毛惠素と毛惠遠は同郷(榮陽)の別人と考えられる。

(298) 古畫品錄(津逮祕書本) 曹不與條「不與之迹、殆莫復傳。唯祕閣之內、一龍而已」。

(299) 宋書 卷六二 羊欣傳。注(303) 參照。

(300) 陳傳席「謝赫與古畫品錄的幾個問題」(『六朝畫論研究』所收 南京一九八五)二〇三—二〇四頁。

(301) 古畫品錄 序「六法者何、一、氣韻生動是也、二、骨法用筆是也、

南朝帝陵の石獸と磚畫

三、應物象形是也、四、隨類賦彩是也、五、經營位置是也、六、傳移模寫是也。唯陸探微、衛協、備該之矣。然迹有巧拙、藝無古今、謹依遠近、隨其品第、裁成序引。故此所述、不廣其源、但傳出自神仙、莫之聞見也」。

(302) 梁書 卷二六 陸杲傳「(中大通)四年、卒、時年七十四」。

(303) 南齊書 卷三三 王僧虔傳「太祖善書、及即位、篤好不已。(略)示僧虔古迹十一卷、就求能書人名。僧虔得民間所有、表中所無者、吳大皇帝、景帝、歸命侯書、桓玄書、及王丞相導、領軍洽、中書令琨、張芝、索靖、衛伯儒、張翼十二卷奏之。又上羊欣所撰能書人名一卷」。

(304) 姚最 續畫品(津逮祕書本)。

(305) 歷代名畫記 卷七 毛惠遠條「毛惠遠、中品上、榮陽陽武人。善畫馬、時劉瑱善畫婦人、並當代第一、(略)曾見酒客圖、是宮卷、後有題記、筆迹之外、頗有風格、意匠師於顧。酒客圖、刀戟圖、中朝名士圖、刀戟戲圖、七賢藤紙圖、諸白馬圖、騎馬變勢圖、葉公好龍圖、並傳於代」。

(306) 元和郡縣圖志 卷二五 杭州 餘杭縣「由拳山、晉隱士郭文學所居。傍有由拳村、出好藤紙」。

(307) 注(294) 參照。

(308) 注(305) 參照。宮卷は宮中で作られた圖卷の意であらう。

(309) 歷代名畫記 卷六「顧景秀、中品上、宋武帝時畫手也。在陸探微之先、居武帝左右、武帝嘗賜何戢蟬雀扇、是景秀畫」。

(310) 注(294) 參照。

(311) 注(254) 參照。

(312) 歷代名畫記 卷六 陸探微條「夫象人風骨、張亞於顧・陸也。張得其肉、陸得其骨、顧得其神。神妙亡方、以顧爲最」。

(313) 注(305) 參照。

(314) 長廣敏雄「歷代名畫記」(東京 一九七七)の譯注を參照した。

(315) 注(301) 參照。

- (316) 古畫品錄 第一品 陸探微條「窮理盡性、事絕言象。包前孕後、古今獨立、非復激揚所能稱贊。但價重之極乎上、上品之外、無他寄言、故屈標第一等」。
- (317) 古畫品錄 第三品 顧愷之條「格體精微、筆無妄下。但跡不逮意、聲過其實」。
- (318) 歷代名畫記 卷六 陸探微條「李嗣真云、亡地寄言、故居標第一、此言過當、但顧長康之迹、可使陸君失步、荀勗絕倒。然爾萬代著龜衡鏡者、顧・陸同居上品第一」。同上 卷五 顧愷之條「謝氏黜顧、未爲定鑒」。
- (319) 歷代名畫記 卷六「陸探微、上品上、吳人也。宋明帝時、常在侍從、丹青之妙最推工者」。
- (320) 同右「有宋孝武像、宋明帝像、(略)齊高帝像、(略)並傳於代者也」。南史 卷七五 宗測傳「測字敬微、一字茂深、家居江陵。(略)永明三年、詔徵太子舍人、不就。欲游名山、乃寫祖少文所作尚子平圖於壁上。(略)遂往廬山、止祖少文舊宅。(略)侍中王秀之彌所欽慕、乃令陸探微畫其形與已相對、又貽書曰、昔人有圖畫儒・札、輕以自方耳」。
- (321) 同右「有宋孝武像、宋明帝像、(略)齊高帝像、(略)並傳於代者也」。南史 卷七五 宗測傳「測字敬微、一字茂深、家居江陵。(略)永明三年、詔徵太子舍人、不就。欲游名山、乃寫祖少文所作尚子平圖於壁上。(略)遂往廬山、止祖少文舊宅。(略)侍中王秀之彌所欽慕、乃令陸探微畫其形與已相對、又貽書曰、昔人有圖畫儒・札、輕以自方耳」。
- (322) 『歷代名畫記』卷六によれば、宋代には陸探微を師法した畫家に袁倩、顧寶光などがあり、陸探微の子の陸綏、陸宏肅、袁倩の子の袁質もこの系統の畫家に數えられよう。特に袁倩は陸探微の高弟で、「豫章王像」などの肖像畫の他、「天女白畫」「二龍圖」などがあつた。
- (323) 謝赫『古畫品錄』、姚最『續畫品』については、稿を改めて論ずることとする。
- 挿圖出所目録
- (1) 殷維翰『南京山水地質』(北京 一九七九)圖一より
- (2) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖二
- (3) 筆者蒐集寫眞
- (3) 同右
- (4) 北京圖書館金石組編『北京圖書館藏 中國歷代石刻拓本匯編 第二冊』一四一頁
- (5) 筆者蒐集寫眞
- (6) 南京博物院等編『江蘇省出土文物選集』圖一五〇
- (7) 筆者蒐集寫眞
- (8) 『黃河文明展』圖錄(名古屋 一九八六)圖九八
- (9) 筆者蒐集寫眞
- (10) 朱傑『建康蘭陵六朝陵墓圖考』卷末「丹陽齊梁陵寢圖」より
- (11) 『六朝陵墓調查報告』圖六
- (12) 筆者蒐集寫眞
- (2) 同右
- (3) 同右
- (13) 同右
- (2) 同右
- (3) 同右
- (14) 同右
- (2) 同右
- (3) 同右
- (15) 羅宗眞「六朝陵墓埋葬制度綜述」圖五
- (2) 筆者蒐集寫眞
- (3) 同右
- (16) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖一二九

- (17) 筆者蒐集寫真
(18) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖一三九
(19) 筆者蒐集寫真
(20) 同右
(21) 同右
(22) (1) 同右
(2) 同右
(23) (1) 同右
(2) 同右
(24) 同右
(25) 同右
(26) (1) 同右
(2) 同右
(27) (1) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖一二七
(2) 筆者蒐集寫真
(28) (1) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖一二六
(2) 筆者蒐集寫真
(29) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖一〇〇
(30) (1) 筆者蒐集寫真
(2) 同右
(3) 同右
(4) 同右

南朝帝陵の石獸と磚畫

- (31) 羅宗真「南京西善橋油坊村南朝大墓的發掘」圖一より
(32) 南京博物院編『江蘇六朝青瓷』圖一〇五
(33) 羅宗真「南京西善橋油坊村南朝大墓」圖七
(34) 常州市博物館「常州南郊戚家村畫像磚墓」圖一
(35) 『中國美術全集 雕塑編2』圖八七
(36) (1) 『中華人民共和國古代青銅器展』圖錄(東京一九七〇)圖二一〇
(2) 南京博物院等「東漢彭城相繆宇墓」圖一一
(3) 徐州市博物館編『徐州漢畫象石』圖一二九
(37) (1) 河南省文化局文物工作隊『鄧縣彩色畫象磚墓』圖五
(2) 『西安碑林』(東京一九六六)圖一二四
(38) 河南省文化局文物工作隊『鄧縣彩色畫象磚墓』圖三七
(39) 同右、圖四一
(40) (1) 史岩編『中國雕塑史圖錄(二)』(上海一九八七)圖四九五
(2) 江上波男『アジア文化史研究』(東京一九六七)圖版九
(3) 米內山庸夫「漢の獅子石像に就て」圖一
(41) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖一五八
(42) 同右、圖一六〇
(43) 史岩編『中國雕塑史圖錄(二)』圖四九四
(44) 同右、圖四九三
(45) (1) 『中國美術(1)』(東京一九六三)一四〇頁 圖六六
(2) 『營造法式』卷三三
(46) 南京博物院「江蘇丹陽胡橋南朝大墓及磚刻壁畫」圖二
(47) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖二〇一
(48) 南京博物院「江蘇丹陽胡橋南朝大墓及磚刻壁畫」圖五より
(49) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖二〇六
(50) (1) 南京博物院「江蘇丹陽胡橋南朝大墓及磚刻壁畫」圖一六
(2) 河南省文化局文物工作隊『鄧縣彩色畫象磚墓』圖一〇〇
(51) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖二〇九

- (48) 湯池「東魏茹茹公主墓壁畫試探」圖三
- (49) (佐) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖二一〇
(右) 水野清一・長廣敏雄『龍門石窟の研究』(京都一九四一)圖一九
- (50) (1) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖二一二
(2) 重慶市博物館編『重慶市博物館藏 四川漢畫像磚選集』(北京一九五七)圖三一
- (51) (佐) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖二〇三
(右) 河南省文化局文物工作隊『鄧縣彩色畫象磚墓』彩版
- (52) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖二二三
- (53) (1) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖一九七
(2) 同右、圖一九一
(3) 同右、圖一九二
- (54) (右) 南京博物院「江蘇丹陽胡橋南朝大墓及磚刻壁畫」圖九
(中) 同上、圖一五
- (55) (右) 林樹中「江蘇丹陽南齊陵墓磚印壁畫探討」圖一
(1) 湖南省博物館等『長沙馬王堆一號漢墓』上集、圖二五
(2) 『中國美術全集 工藝美術編5』(北京一九八六)圖二二二
(3) 東亞考古學會『營城子』圖版三六 a
- (56) 雲南省文物工作隊「雲南省昭通後海子東晉壁畫墓清理簡報」表紙裏圖版2
- (57) 筆者蒐集拓本
- (58) 洛陽博物館「洛陽北魏石棺」圖六、七
- (59) 黃明蘭『洛陽北魏世俗石刻線畫集』圖一三
- (60) (1) 同上、圖一八
(2) 同上、圖一六
- (61) (1) 同上、圖二一
(2) 同上、圖二〇
- (62) (右) 王子雲編『中國古代石刻畫選集』(北京一九五七)圖六(3)
(右) 黃明蘭『洛陽北魏世俗石刻線畫集』圖三四
- (63) (3) Annette L. Juliano, Art of The Six Dynasties, New York, 1975, pl. 45.
- (64) (1) 黃明蘭『洛陽北魏世俗石刻線畫集』圖一〇三
(2) 『中國美術全集 繪畫編12』圖五七
- (65) 河南省文化局文物工作隊『鄧縣彩色畫象磚墓』圖一九
- (66) 同上、圖二九
- (67) 史岩編『中國雕塑史圖錄(二)』圖四九七
- (68) 『和泉市久保惣記念美術館藏鏡拓影』圖二四
- (69) (右) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖一八一
(中) 筆者蒐集寫真
- (70) 黃明蘭『洛陽北魏世俗石刻線畫集』圖二三
- (71) (1) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖一六二
(2) 同右、圖一六三
- (72) 山東省文物考古研究所「濟南市東八里注北朝壁畫墓」圖三
- (73) (1) 筆者蒐集寫真
(2) 同右
- (74) (1) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖二一九
(2) 同右、圖二一七
- (75) (1) 筆者蒐集寫真
(2) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖一八七
- (76) (1) 筆者蒐集寫真
(2) 姚遷・古兵編『六朝藝術』圖一八八
- (77) (右) 同上、圖一七五
(中) 同右、圖二二〇
(左) 同右、圖一八六
- (78) (1) 南京大學歷史系考古組「南京大學北園東晉墓」圖一

- (79)
- (2) 華東文物工作隊「南京幕府山六朝墓清理簡報」圖二
 - (3) 南京市文物管理委員會「南京太平門外劉宋明曇曇墓」圖一
 - (4) 南京博物院「南京富貴山東晉墓發掘簡報」圖三
 - (5) 南京博物院「江蘇丹陽胡橋、建山兩座南朝墓葬」圖二
 - (1) 南京博物院等「南京西善橋南朝墓及其磚刻壁畫」圖一
 - (2) 南京博物院等「南京棲霞山甘家巷六朝墓葬」圖二
 - (3) 南京市文物管理委員會「南京郊區兩座南朝墓清理簡報」圖一
 - (4) 南京博物院「南京堯化門南朝梁墓發掘簡報」圖三
 - (5) 南京市博物館「南京郊區兩座南朝墓」圖三
- (80)
- (1) 南京市博物館考古組「南京郊區三座東晉墓」圖版五 6
 - (2) 南京博物院等「南京西善橋南朝墓及其磚刻壁畫」圖一八
 - (3) 南京市博物館「南京郊區兩座南朝墓」圖六 1
- (81)
- (1) 南京博物院等編『江蘇省出土文物選集』圖一三九
 - (2) 南京博物院等「南京西善橋南朝墓及其磚刻壁畫」圖一六
 - (1) 南京博物院等「南京棲霞山甘家巷六朝墓葬」圖版九 1
 - (2) 南京博物院等「南京西善橋南朝墓及其磚刻壁畫」圖一二
 - (3) 南京博物院編『南京博物院』(東京 一九八二)圖九四
- (82)